

皇學館大学大学院

博士（文学）学位請求論文

近世前期における神宮御師集団の基礎的研究

谷戸 佑紀

平成二十六年十二月二日

目次

序章	1
一 近世の宗教者集団に関する研究	1
二 神宮御師に関する研究と課題設定	2
三 本稿の構成	8
第一部 神宮御師集団の近世的变化	18
第一章 神宮御師集団と師旦関係―寛永年間の争論をめぐって―	19
はじめに	19
一 徳川家康・秀忠の朱印状と師旦関係	19
二 寛永争論	23
(1) 寛永争論以前における師旦関係の実態	23
(2) 寛永争論と師旦関係	25
おわりに	31
第二章 山田三方と旦那争論―裁判制度の整備を中心に―	36
はじめに	36
一 旦那争論と裁定主体の変遷	37
(A) 北畠氏領国期(天正元年～天正十二年)	37
(B) 豊臣氏政権期(天正十二年～慶長八年)	38

(C) 徳川氏政権期（慶長八年～元和九年）	40
(D) 山田三方自治期（元和九年～）	41
二 山田三方による裁判制度の整備	42
おわりに	47
第三章 神宮御師の連帯意識の萌芽について―「内宮六坊出入」を素材に―	54
はじめに	54
一 六坊と三日市兵部との争論	55
二 三か寺の再訴	59
おわりに	65
第二部 神宮御師集団と近世社会	70
第四章 伊勢神宮外宮宮城支配と山田三方―「宮中之定」をめぐって―	71
はじめに	71
一 近世前期の外宮宮城内の状況	72
二 宮守と官人の諍いと宮城内の法規	76
三 宮城内の法規をめぐる対立とその決着	81
おわりに	87
第五章 山伏から御師への転身―内宮御師風宮兵庫大夫家を例に―	93
はじめに	93

一 内宮宮域と穀屋・山伏（近世初頭）	94
二 山伏から御師へ（近世前期）	97
（1）「寺」としての穀屋	97
（2）御祓配りをめぐる争論	99
（3）宮域外への転居と御師への転身	100
おわりに	103
第六章 衣類統制と伊勢神宮―天和年間の「帯刀一件」を素材に―	110
はじめに	110
一 祠官の帯刀に関する交渉	111
二 年寄の帯刀に関する交渉	114
三 年寄と御師の帯刀に関する交渉	116
四 交渉の帰結	118
おわりに	121
終章	127

序章

本稿は、近世前期における神宮御師集団の実態について考察を行うものである。

日本人の宗教意識を考える上で欠くことのできない事項として伊勢信仰が挙げられる。例えば、第六十二回式年遷宮を迎えた平成二十五年の一年間で、伊勢神宮への参拝者が一四二〇万人を超えたことが報じられている⁽¹⁾。

この伊勢信仰を広く民衆にまで普及させる上で大きな役割を果たしたのが神宮御師⁽²⁾である。神宮御師とは、祈禱・神楽の奏上・参宮宿・廻旦（御祓配り）などを行う一種の宗教者で、その活動を通じて伊勢神宮と前近代社会の人々を結ぶ存在であったとされる。従って、神宮御師の実態を浮き彫りにすることは、今日まで連続する伊勢信仰の特質を明確にし、同信仰の普及・深化を論じる上で不可欠な研究課題であるといえる。

最初に、先行する研究を整理し、本稿の課題と視角を示しておく。

一 近世の宗教者集団に関する研究

まず、近世の宗教者集団に関する研究の動向を確認する。

宗教者集団を対象とする研究は、戦後の朝廷研究と身分制研究の

なかで本格的に取り組まれるようになった。前者に関しては、昭和六十四年（一九八九）に発表された高埜利彦氏の『近世日本の国家権力と宗教⁽³⁾』が起点となっており、この流れは宗教者の様々なレベルにおける組織化・編成を中心とした議論へと展開してゆく⁽⁴⁾。

後者に関しては、昭和五十一年の高木昭作氏による国役論⁽⁵⁾や、昭和五十六年の朝尾直弘氏による地縁的・職業的身分共同体論⁽⁶⁾を経て、塚田孝氏・吉田伸之氏らが牽引した社会集団論⁽⁷⁾・身分的周縁論⁽⁸⁾という研究潮流のなかで取り上げられ、多様な宗教者とその集団に光が当てられることになった。

これらにより、陰陽師⁽⁹⁾・虚無僧⁽¹⁰⁾・西宮夷願人⁽¹¹⁾・神子⁽¹²⁾などの事例が意欲的に報告され、近年では一定の成果が蓄積されつつある。また、本稿と関連する成果としては、富士山御師に関する本格的な研究がまとめられたことが特筆される。それは甲州史料調査会編『富士山御師の歴史的研究⁽¹³⁾』で、富士山御師を多角的な視点から浮き彫りにした点で画期的な成果であるといえる。

なお、このほか他地域（他社）の御師については、大山⁽¹⁴⁾・御嶽山⁽¹⁵⁾・津島⁽¹⁶⁾・熊野⁽¹⁷⁾・出雲⁽¹⁸⁾などの事例が報告されており、今後の進展が期待される。

右のような研究状況に対し、課題として挙げられるのは、近世中期以降を対象とする成果に比べ、近世前期の宗教者集団の実態に関す

る成果が乏しい点である。すなわち、従来の研究では、史料的な制約もあつてか、特に地方神社レベルにおいては、宗教者集団を静的にしか把握できていない。このため、中世からの移行を視野に入れた議論を困難なものにしてしまっているといえる。

従つて本稿では、神宮御師集団を事例(19)とすることを通じて、近世前期における変化の様相、換言すれば、近世中期以降の状況がどのように形成されたか、を具体的に描くことを目指したい。

二 神宮御師に関する研究と課題設定

次に、神宮御師を対象とした研究について概観し、本稿の課題を設定する。

神宮御師に関する研究は近世にまで遡る。その中心となつたのは、鳥居前町の学者たちで、まとまつた著述としては河崎延貞の「御師説」(20)が最も古く、その他、出口延経の「神事随筆」(21)・喜早清在の「毎事問」(22)・久志本常彰の「神民須知」(23)といった随筆などで部分的に扱われている場合も散見される。しかし、あくまで御師に関する事物の語源や来歴を簡略に説明するものに過ぎず、その存在自体を論じるものではなかつたと指摘できる。

これらに対し、本格的な研究として特筆されるのは、足代弘訓が著した「御師考証」(24)である。本書は、「御師が神宮の古代的権

威たる特異性を超えて発生するに至つた事情」を「神宮の経済的基盤の変化」から説明し、「御師と檀那の関係の成立を歴史的必然」とするものであつて(25)、諸文献に基づいて実証的に論考している点に特色がある。注目したいのは次の二点である。

(1)御師を伊勢神宮と諸国の人々をつなぐ存在として位置づけている点。

(2)御師を中世の濫觴から弘訓が生きた近世まで連続する存在として捉えている点。

これは以降の研究においても前提として継承され、その方向性を規定したと考えられる。つまり、今日の御師像は、弘訓によって示された理解を基礎にしているといつても過言ではなく、「御師考証」はこの意味においても研究史上、起点となる成果であると評価できる。反面、これにより、左のような傾向や問題点を生むことになった。

A、以降の研究が、個々の御師と旦那(26)・旦那所(27)との関係を説明することを目的としたものに偏ることになった。

B、研究の対象となる時期が中世に集中した。これは御師による幅広い層への旦那の開拓が始まり、伊勢信仰が普及した時期であつたことによる。一方、近世は師旦那関係の定着期として中世に比べて等閑視されることになった。

C、時代ごとの変遷が不鮮明になり、それぞれの時代における御師の実態・特色が捨象されてしまった。

本稿は、このような「御師考証」に起因する傾向・問題点を改善することを目指すものであり、その試みの中から新たな御師の姿を描いてゆきたいと考える。

次に戦前期について概観しておく。まず、神宮御師について述べたものとして最初に挙げられるのは、明治三十二年（一八九九）に青柳糸若氏が紹介した「伊勢御師沿革」⁽²⁸⁾である。これは度会郷友会発行の『度会』に載せられた短文で、簡潔に神宮御師の概略を記したものである。もともとは藤井清司氏⁽²⁹⁾が執筆したものとされ、それを「こゝに抜粋して未だ知らざる人の為にす」という。明治四年（一八七二）七月に御師が廃止⁽³⁰⁾された後、三十年近くを経て郷土誌上で紹介されたことは、御師が歴史的な存在として対象化されるようになったことを示しており、前時代となった近世を包括した研究の始まりを示すものであるといえる。

当該期の研究は、伊勢神宮史⁽³¹⁾や自治体史⁽³²⁾の一齣として言及されることはあったが、御師自体を専一に扱った論考は思いのほか少ない。主要なものとしては、第一に石巻良夫氏の「伊勢の御師」⁽³³⁾を挙げる必要がある。これは大正六年（一九一七）の発表で、構成としては、「一 御師の起源」「二 幣物の争奪」「三 宇

治山田の坊」「四師職式の制定」「五 両宮御師の軋轢」「六 師職の格式と所領」「七 山田の殷盛」「八 御師の御祓配布」からなり、発生から活動内容に及ぶ幅広い概要を提示している。特に、仏教勢力の存在・御師集団間の対立・御師職と師職式・廻旦の様相・公権力との関係性などへの着目は今日の議論を先取りするものであり、先駆的な成果として位置づけられる。

また、専一に扱った論考ではないが、平泉澄氏が大正十五年に発表した『中世に於ける社寺と社会との関係』⁽³⁴⁾も挙げねばならない。同氏は「第四章 経済生活」において寺社の御師について取り上げ、その起源を考察するにあたって神宮御師の主要な活動内容を「(一) 祈祷師、(二) 参詣宿」と指摘した。この理解は、中西用康氏からの批判⁽³⁵⁾があつたものの、戦後も、新城常三氏⁽³⁶⁾・西山克氏⁽³⁷⁾・窪寺恭秀氏⁽³⁸⁾などによって支持され、今日において通説的な理解となっている。

この他、「御師考証」で示された御師発生に関する考察を深化させるものとして、中西用康氏の「伊勢に於ける御師発生の経路（上）・（下）」⁽³⁹⁾や岡田米夫氏の「源頼朝の奉幣祈祷と御師との関係を通して見たる王朝時代より武家時代への転換期に於ける神宮の社会史的考察」⁽⁴⁰⁾などがある。

最後に、戦後の研究状況について見てゆく。まず、当該期の成果を振り返る上で、見逃せないのは次の二つの動向である。

①伊勢神宮が一宗教法人となり、その存立において国民の奉賛が占める比重が増したことで、伊勢神宮と各地の人々との歴史的な結びつきと、両者の仲介者である御師の存在が改めて注目されたということ。

②御師家に関する史料は、明治四年以降も旧御師家などの個人が所蔵し続ける場合が多かったが、それが公共機関に収蔵されることとなり、史料の整理・公開、そして史料集の公刊が進み、史料の利用が容易になったということ（41）。

当該期は、これらのもとに研究が進められてゆくことになり、参宮や社会構造など隣接する諸問題をも扱う点において研究の裾野が広がるとともに、その内容もより実証的かつ深化したものとなった。特に、②によって個別事例に取り組む成果が現われ、それが一つの潮流となったことは大きな画期であったといえる。また、①に対応する形で、神宮御師についての研究が伊勢信仰研究の主要なテーマの一つとして扱われるようになり（42）、戦前期に比べ、多くの成果が産み出されたことも特筆されよう。ただ、既に西垣晴次氏が昭和五十九年（一九八四）の段階で、伊勢信仰に関する研究を概観して「最近の研究論文や報告のなかには、先行の論文や資・史料についてまったく無知のままで発表されるものが少なくない（43）」と述べているように、先行する成果を踏まえていない場合もあって、研究

が散漫になってしまったことは否めない。ここでは拡散した成果を整理しておく。

まず挙げられるのは、昭和二十六年（一九五一）に発表された新城常三氏の「中世の御師―中世社寺参詣史の一節―（44）」である。参詣（参宮）の前提として旦那・旦那所との関係の形成と御師の廻旦を素描したもので、旦那との関係を具体的に提示した点で従来に無い成果であったといえる。そして、ここで準備された視点は、昭和三十九年の『社寺参詣の社会経済史的研究（45）』で深められ、交通史・参詣史研究のなかで位置づけられることになる。

地域ごとの廻旦を扱った成果も生まれている。昭和二十九年（一九五四）に小林計一郎氏が発表した「伊勢御師宇治家と信州檀家―荒木田久老・同久守を中心として―（46）」である。これは内宮御師宇治家の信濃国への廻旦を浮き彫りとしたもので、これ以降、様々な地域の事例を報告した成果が発表されるようになる（47）。

さらに、民俗・文化的な側面を述べた成果も生まれた。それは、昭和三十年に出された井上頼壽氏『伊勢信仰と民俗（48）』と、昭和三十一年の大西源一氏による『参宮の今昔（49）』で、この著述のなかで神宮御師を取り上げ、簡潔ながら御師に関わる幅広い諸問題を扱っている。

昭和三十五年（一九六〇）は、二つの研究姿勢の異なる伊勢神宮

の通史が発表された点で画期的な年となった。一方は二月に発表された大西源一氏の『大神宮史要』⁽⁵⁰⁾で、尊信的な姿勢のもと、伊勢神宮を基点とし、そこから周囲を照射する方法を採る。もう一方は七月に出された藤谷俊雄氏・直木孝次郎氏の『伊勢神宮』⁽⁵¹⁾で、批判的な姿勢のもと、周囲を重視し、そこから伊勢神宮の歴史を描く方法を試みている。

これらを受けて、神宮御師が国家や社会において担った役割を明確に探る論考が発表されるようになり、さらに、以降、歴史学会の動向や、そこで交わされた議論を意識した論考が現れ始める。

例えば、萩原龍夫氏は「伊勢信仰の発達と祭祀組織」⁽⁵²⁾（昭和三十七年）のなかで、伊勢信仰が日本国内の祭祀組織に与えた影響を探るという関心から、神宮御師の活動と信仰の広がりとの関わりを論じている。また、新城常三氏は、前述の『社寺参詣の社会経済史的研究』（昭和三十九年）において、参宮を行う側に留意しつつ、参宮を勧め、受け入れる側としての神宮御師の様相を浮き彫りにしている。

昭和四十四年（一九六九）には、鳥居前町の社会構造との関係から論じる成果も現れた。それは藤本利治氏の「御師の活動からみた近世日本の地域性と山田の町」⁽⁵³⁾で、「門前町と御師の活動」⁽⁵⁴⁾・「近世都市の機能結合―門前町を事例として―」⁽⁵⁵⁾などの成果が

発表される。そして、これ以降、鳥居前町の形成と構造に関する成果が生まれてゆく⁽⁵⁶⁾。この他、近世における家格や家筋、階層の問題を扱ったものとして大澤貴彦「近世神宮祠官の家格と家筋について」⁽⁵⁷⁾（平成七年）などがある。

昭和五十年代になると、伊勢神宮の広報誌である『瑞垣』の誌面で「特集―神宮御師―」⁽⁵⁸⁾が組まれ、『神宮御師資料』⁽⁵⁹⁾という資料集も刊行が開始された。これらは神宮御師への認知を促す動きとして指摘できよう。特に後者は、神宮御師に関する基本的な情報を提供するもので、今日においてもその価値は大きい。

昭和五十一年（一九七六）の西川順士氏「両宮御祓銘論の背景」⁽⁶⁰⁾は、御師集団間の対立に着目し、両者の規模や教説の相違を踏まえて、その対立の背景を論じた点で重視すべき成果である。

そして、西垣晴次氏『お伊勢まいり』⁽⁶¹⁾（昭和五十八年）は、民衆の参宮を総合的に扱ったもので、とりわけ、伊勢信仰の普及とナショナル・アイデンティティ（国民意識）形成との関係性に言及し、これが近代国民国家の形成を準備したという展望は特筆すべきものがある。

しかしながら、西垣氏自身が『伊勢信仰Ⅱ 近世』⁽⁶²⁾の序文において、

本書の扱う近世においては神宮の存在は大きく民衆の信仰に依

存していたから、たしかに民衆宗教の一つとして位置づけられる側面をもっていた。しかしながら他の民衆宗教と伊勢信仰とを大きくきわだたせているのは、伊勢信仰が国家ないしは天皇と深くかかわりながら、その歴史を形成してきたという事実である。この点を無視しては伊勢信仰を正しく理解することはできないであろう。しかし、残念なことに、近世に限っていうならば、こうした点につき史実を掘りおこし実証をこころみた考察は、戦後まったくなされていないといつてよい。ために本書にもこれに関した論文を収めることができなかった。

としているように⁽⁶²⁾、正面から検討した成果は見られず、今日においても課題として残されたままとなっている。とりわけ、近世社会においては、伊勢信仰が民衆層のナショナル・アイデンティティの構成要素であったとの指摘⁽⁶³⁾が既になされており、今後、これに関する検討が不可欠であろう。言うまでもなく、伊勢神宮との間を仲介していたのは神宮御師であるから、神宮御師の布教内容や信仰との関わり方について解明する取り組みが求められる。

昭和六十年代に入ると、今日の研究に大きな影響を与えた新たな成果が誕生する。それは、昭和六十二年（一九八七）に西山克氏が発表した『道者と地下人―中世末期の伊勢―』⁽⁶⁴⁾である。これは、当時、高まりを見せていた社会史研究⁽⁶⁵⁾を意識したものと考え

られ、中世末の鳥居前町を対象として、その都市構造から社会慣行、神宮御師の展開過程などに及ぶ幅広い問題を論じている。特に「御宿職売券」や「道者売券」といった史料⁽⁶⁶⁾を網羅的に収集し、それを分析した論考は、実証面での水準を大きく引き上げ、研究史上、画期をなしたといつても過言ではない。

これを受けて、飯田良一氏「中世後期の宇治六郷と山田三方」⁽⁶⁷⁾（平成三年）など、宇治会合や山田三方といった「自治組織」に取り組む論考が生まれる。さらに、吉田吉里氏「外宮御師橋村一族について―中世末期、北部九州に於ける勢力拡大を中心として―」⁽⁶⁸⁾（平成九年）や窪寺恭秀氏「伊勢御師幸福大夫の出自とその活動について―中世末期を中心に―」⁽⁶⁹⁾（平成十一年）など、神宮御師の「家」をめぐる問題と活動を関連づけて検討した成果も発表されてゆく。

さらに、神宮御師を専一に論じる単著も現れた。それは、久田松和則氏が平成十六年（二〇〇四）に発表した『伊勢御師と旦那―伊勢信仰の開拓者たち―』⁽⁷⁰⁾である。同書は、昭和五十六年から発表してきた成果を大成したもので、対象とした地域は西北九州で、御師家は橋村家と藤井家である。伊勢参宮の実相と信仰を支えする御師の活動を描いており、特に「参宮人帳」や「為替日記」などの御師家内部の史料を用いることの有効性を提示した功績は大きい

(71)。近年では、『御参宮人帳』に見る伊勢御師の経済―天正・慶長期を中心に―(72) (平成二十五年) を発表している。

平成十四年は、神宮御師が廃絶して一三〇年目を迎える節目の年となった。これにあわせて伊勢市立郷土資料館において特別展が組まれ(73)、伊勢市・伊勢市教育委員会・皇學館大学の主催でシンポジウム「伊勢の町と御師―伊勢参宮を支えた力―(74)」が開かれている。また、平成十七年以降、外宮御師丸岡宗大夫邸など旧御師邸への発掘調査が実施されるようになった(75)。これらは、神宮御師が鳥居前町の歴史を象徴する存在として、伊勢市民に広く受容されていることを如実に表しているよう。

ここまでの研究蓄積を受けて、中世を対象とした議論を整理した成果も生まれた。平成十七年に出された窪寺恭秀氏「中世後期に於ける神宮御師の機能と展開について(76)」は、神宮御師の呼称や成立、展開といった基礎的な事項への検討を行っている。また、中世後期の祈祷行為について論じ、これが祭主(77)・禰宜以下の祭祀に携わる祠官層に限定されており、鳥居前町の地下人層(78)は実施できなかったことを明らかにしている。階層差と祈祷行為の関係性を論じるものとして興味深く、同氏が指摘するように、近世への移行を視野に入れて取り組む必要がある問題である。そして、このことは、前述した「(一) 祈祷師、(二) 参詣宿」を自明の前提とす

る通説的理解を再考することにもつながろう。

近世を対象とした研究に関しては、平成に入ってから次第に専論が増え始める。まず、挙げねばならないのは、笠原綾氏の「近世の武家の信仰をめぐって―近世前半における幕府・諸大名と伊勢御師―(79)」(平成二年)である。これは、近世前期の「武家」層を対象に、神宮御師との関係の具体相を考察するもので、江戸幕府の政策に言及するとともに、大名などの上層武家による代参・祈祷依頼に注目した点に特色がある。従来の研究では、これらの問題については簡単に触れる程度であったが、それに先鞭をつけ、今後の課題として「これらを単に信仰の問題として扱うのではなく、幕府政治や幕藩制国家の問題と関わらせて検討していく必要がある」と展望したことは、新たな視点を提示するものとして高く評価される。そして、同氏により「老中の伊勢参宮(80)」(平成九年)・「伊勢御代参の年頭恒例化と將軍権威(81)」(平成十年)などの成果が結実してゆくことになる。さらに、御師集団間の争論を素材に、伊勢神宮をめぐる朝幕関係について検討した澤山孝子氏「朝幕関係のなかでの伊勢神宮―寛文十年御祓銘争論を事例として―(82)」(平成十四年)が発表されている。また、笠原氏の成果を受けて、大名の参宮と御師家の接遇を検討した久田松和則「大名の伊勢参宮と御師の接遇―肥前大村藩主と黒瀬主馬の一例を通じて―(83)」(平成二十四

年)も生まれた。

近年では、伊勢神宮の膝下に広がる地域の通史が新たに編まれ、平成二十三年には中世編(84)が、平成二十五年には近世編(85)が刊行された。なかでも、千枝大志氏「宇治山田と御師」(中世編所収)と塚本明氏「伊勢参宮と御師」(近世編所収)は注目すべき論考である。前者は、遠隔地域における広域な旦那所の形成に着目し、これを神宮御師の「近世化」の徴証と評価するもので、中世後期における御師職の売買・譲渡と旦那所の形成の問題から、近世への移行を展望した。そして、後者は、「伊勢参宮と御師」(近世編所収)は、近世中期以降の参宮の諸相と御師の姿を具体的に描くものである。

以上、神宮御師に関する研究の軌跡を追い、その進展を確認してきた(86)。右の諸成果によって、師旦那関係を中心とした諸活動に関する多くの事実が解明されたといえる。しかしながら、前述した「御師考証」によって生まれた傾向・問題点が根強く残っていることは否めないであろう。特に近世を対象とした研究に限っては、基礎的な事項についてさえ十分に考察が行われておらず、その活動の背景に迫ることを困難なものにしていると指摘せざるを得ない。このため、今日まで蓄積された成果が適切に評価されているとは言い難く、むしろ「御師考証」以来の紋切り型の理解が流布してしまっている。

このような状況を改善し、その存在を等身大の姿で把握してゆく

ためには、これまでの研究において等閑視されてきた側面に光を当ててゆく必要がある。そこで、本稿では、近世前期を対象に次の課題に取り組んでみたい。

一、神宮御師が構成する集団(神宮御師集団)に着目し、その実態を明らかにする。

二、神宮御師集団と江戸幕府・伊勢神宮との関係を浮き彫りにする。

三、神宮御師の身分や格式、職分を明確にし、これが確定してゆく過程を跡付ける。

これらにより、神宮御師という存在を近世社会上で位置づけることができ、この手続きを経ることで、今日まで蓄積されてきた成果を適切に消化し、研究をより実相に即した形で発展させてゆくことが可能であると考ええる。従って、本稿は、従来の研究の不足を補い、伊勢信仰の普及・深化の様相を解明してゆく上での土台を構築する意味を持つ。

三 本稿の構成

本稿は二部から構成される。全体としては、当該期における神宮御師集団の展開を軸として、江戸幕府や伊勢神宮(内宮・外宮)の動きに注目しつつ、他の宗教者との関係にも目配りして考察を進め

た。このため、争論などの個別事例を中心に検討を行うという帰納的な方法を用いた。これは、近世前期の史料が断片的にしか残存していないことにもよる。各章の概要を示しておこう。

第一部では、当該期に起きた変化を捉えることを目指す。

第一章においては、神宮御師集団が二つの集団（内宮御師集団・外宮御師集団）に大別されることに着目し、この両集団と師旦関係をめぐる諸問題に焦点を絞って、主に朱印状の内容と寛永年間の争論を素材として検討を行う。

第二章においては、外宮御師集団の統制機関である山田三方を事例として、旦那争論の裁判主体の変遷と、その解決を目的とした裁判制度が整備される過程を跡付ける。

第三章においては、「内宮六坊出入」と呼称される山伏との争論を素材として、御師集団間における連帯意識の形成について明らかにする。

第二部では、近世社会における諸相を中心に検討を行う。

第四章においては、寛永年間に起きた「宮中之定」の制定をめぐる一件を素材に、外宮宮域支配と山田三方、そして外宮御師集団との関わりのある方を明らかにする。

第五章においては、内宮御師風宮兵庫大夫家を事例として、山伏から御師への転身の様相とそれをめぐる諸問題に関して分析する。

第六章においては、天和年間に起きた帯刀をめぐる一件を素材に、神宮御師の身分と格式、そして、神宮における位置づけについて検討する。

右の六章に加えて、結びとして終章を置き、全体の内容を整理した。各章の原題及び初出は次の通りである。

序章（新稿）

第一部

第一章 「近世前期における神宮御師集団と師檀関係―寛永年間の争論をめぐる―」（『地方史研究』三七四号、二〇一五年、掲載予定）

第二章（新稿）

第三章 「神宮御師の連帯意識の萌芽について―近世前期の『内宮六坊出入』を素材に―」（『皇學館論叢』四四卷三号、二〇一一年）、一部改稿

第二部

第四章 「近世前期における伊勢神宮外宮宮域支配と山田三方―『宮中之定』をめぐる―」（上野秀治編『近世伊勢神宮地域社会の特質』、岩田書院、二〇一五年、掲載予定）

第五章「近世前期における山伏から御師への転身―内宮御師

風宮兵庫大夫家を例に―」（『神道宗教』二二六・二

二七合併号、二〇一二年）、一部改稿

第六章『天和の治』期の身分統制と伊勢神宮―『帯刀一件』

を素材として―」（『日本歴史』七五五号、二〇一

年）、一部改稿

終章（新稿）

なお、本稿で引用した史料の漢字や合字は、原則的に現在常用の
字体に改めた。また、史料の読点・中黒・返り点は、すべて筆者が
付したものである。

- (1) 伊勢市産業観光部企画課編『平成二十五年 伊勢市観光統計』(伊勢市、二〇一四年)。伊勢市ホームページ(http://www.city-ise.mie.jp/secure/12_124/25kankotoukei.pdf) 掲載。二〇一四年一〇月九日閲覧。
- (2) 伊勢神宮の御師については、研究史上、「神宮御師」や「伊勢御師」などの呼称があるが、本稿では、①二種類の御師集団が正宮に対応する形で別個に存在していたこと(第一部一章参照)、②伊勢神宮に属する神職(祠官)として位置づけられていたこと(第二部六章参照)、などの近世特有の特徴に着目し、伊勢神宮との関係性を重視する視座から、「神宮御師」で統一した。
- (3) 高埜利彦『近世日本の国家権力と宗教』(東京大学出版会、一九八九年)。
- (4) 例えば、井上智勝『近世の神社と朝廷権威』(吉川弘文館、二〇〇七年)・梅田千尋『近世陰陽道組織の研究』(吉川弘文館、二〇〇九年)・菅野洋介『日本近世の宗教と社会』(思文閣出版、二〇一一年) など。
- (5) 高木昭作『幕藩初期の身分と国役』(『日本近世国家史の研究』所収、岩波書店、一九九〇年)。初出は、『歴史学研究』(一九七六年度歴史学研究会大会報告別冊)、一九七六年。
- (6) 朝尾直弘「近世の身分制と賤民」(『朝尾直弘著作集』七巻所収、岩波書店、二〇〇四年)。初出は、『部落問題研究』六八号、一九八一年。
- (7) 塚田孝「近世の身分制支配と身分」(歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本歴史』5巻近世1所収、東京大学出版会、一九八五年)・「社会集団をめぐって」(『歴史学研究』五四八号、一九八五年) など。
- (8) 例えば、塚田孝ほか編『身分的周縁』(部落問題研究所出版部、一九九四年)・高埜利彦・横田冬彦・吉田伸之ほか編『シリーズ近世の身分的周縁』全六巻(吉川弘文館、二〇〇〇年) など。
- (9) 林淳『近世陰陽道の研究』(吉川弘文館、二〇〇五年) など。
- (10) 保坂裕興「十八世紀における虚無僧の身分形成」(『部落問題研究』一〇五号、一九九〇年)・長谷川佳澄「虚無僧と地域社会」(『千葉史学』六〇号、二〇一二年) など。
- (11) 佐藤晶子「西宮夷願人と神事舞太夫の家職争論をめぐって」(橋本政宣・山本信吉編『神主と神人の社会史』、思文閣出版、一九九八年)・中野洋平「えびす願人・えびす社人とその支配」(『ヒストリア』二三六号、二〇一三年) など。
- (12) 西田かほる「神子」(前掲『シリーズ 近世の身分的周縁1 民間に生きる宗教者』所収) など。
- (13) 甲州史料調査会編『富士山御師の歴史的研究』(山川出版社、

二〇〇九年）。

(14) 原淳一郎「近世寺社参詣における御師の役割」『近世寺社参詣の研究』所収、思文閣出版、二〇〇七年。初出は、「近世寺社参詣における御師の役割―大山御師の廻壇を通じて―」、『史学』七三卷二・三号、二〇〇七年。

(15) 靱矢嘉史「武州御嶽山の近世的成立―武蔵国地域大社の一事例として―」『早稲田―研究と実践―』三一号、二〇〇九年。

(16) 林淳「近世津島社の社家組織と御師」(青柳周一ほか編『近世の宗教と社会―地域のひろがりと宗教』所収、吉川弘文館、二〇〇八年)。

(17) 新城恵美子「中世後期熊野先達の在所とその地域的特徴―伊予・陸奥国を例として―」『本山派修験と熊野先達』所収、岩田書院、一九九九年。初出は、『法政史論』六号、一九七九年。

(18) 島根県古代文化センター編『島根県古代文化センター調査研究報告書 30 出雲大社の御師と神徳弘布』(島根県古代文化センター、二〇〇五年)。

(19) 神宮御師を取り上げた一つの理由としては、神社とその宗教者を対象とする研究が寺院を対象とするそれと比べ、立ち遅れていることが挙げられる。これは国家や社会への影響力の度合いなどへの評価も関係しているが、本質的には、かつての研究

者の意識によるところが大きい。つまり、井上智勝氏が近世における神社の展開について概説するにあたり、「戦後歴史学は、国家神道体制への反動から、神社や天皇に関する研究を忌避してきた」としているように(井上智勝「近世神社通史稿」、『国立歴史民俗博物館研究報告』一四八集、二〇〇八年、二七〇頁)、戦後特有の雰囲気があったにせよ、先入的な認識によってその研究が棚上げされてきたといえる。平成初年以降、改善に向かう傾向にあるが、研究が遅れていることは否めない。本稿の執筆に際しては、近世の伊勢神宮とその宗教者を積極的に俎上に載せてゆくという問題意識から史料と事例の紹介を心掛けた。

(20) 国立公文書館所蔵、請求番号五〇五九三号。当史料は、元禄十四年二月二十八日に久志本常彰が書写したもので、奥書によると、原本は久志本常治の求めによって河崎延貞がまとめたものであるとされる。

(21) 「御師」項(神宮司庁編『大神宮叢書 神宮随筆大成 前篇』所収、吉川弘文館)。

(22) 「御師称号ノ事」・「御師ヲ大夫ト称スル事」・「御師ノ家ヲ坊ト称スル事」・「檀那ト称する事」・「御被太麻ノ事」項(前掲『神宮随筆大成 前篇』所収)。

(23) 「大夫」・「御師」・「坊」・「道者」・「初穂」項(前掲『神宮随

筆大成 前篇』所収)。

- (24) 神宮文庫所蔵、図書番号一門三四八二号。当史料は弘訓の所蔵していた原本である。成立時期を比定しておく。天保八年(一八三七)五月付で黒瀬応進が「足代家原本」を書写したという一本(神宮文庫所蔵、一門七六七九号)の内題の下部に「足代権大夫度会弘訓稿」と記されており(原本では、当該箇所を切除した上で紙を貼り、「従四位上度会神主弘訓著」と修正されている)、このことから上限を、弘訓が「権大夫」を称するようになった文化十二年(一八一五)五月に置くことができる(榊原頼輔『足代弘訓』、山村浅次郎、一九二二年、八五〜八六頁)。
- 次に、本文末尾に九月十日付で竹屋光棣が「御師考証」を返却する旨を述べた書状の写しが確認できることに注目したい。弘訓の注記によると、これは天保四年のものであるとされる。このことから、下限を天保四年九月とすることができ。従って、成立時期は、文化十二年五月から天保四年九月の間と考えられよう。ただし、修正の跡が看取され、脱稿後に加筆が施されたものとみられる。
- (25) 中田四朗「足代弘訓の御師考証について」(『三重史学』三三号、一九六〇年)、四九〜五一頁。
- (26) 神宮御師が関係を取り結ぶ相手(崇敬者)については、史料

上、「道者」・「旦那」などの呼称があるが、本稿では、「旦那」で統一した。用例としては、慶長八年九月九日付で宇治会合に発給された徳川家康朱印状に、「一、参宮之輩者可_レ為_二旦那次第_一事」とあることなど(徳川家康朱印状、『三重県史』資料編近世1、三重県、七八九〜七九〇頁)。

(27) 「旦那所」は、神宮御師と関係を結ぶ特定の場所・地域(縄張り)を指す語である。用例としては、慶安元年十月十七日に三日市兵部が山田奉行所へ提出した訴状に、「一、我等古来相伝之旦那所上州へ内宮成願寺之使僧之由申南覚坊と申山伏罷越、(後略)」とあることなど(「乍恐申上候条々」、「内宮六坊出入并雜記」収録、神宮文庫所蔵、一門四六六三号)。「旦那」が点的な把握とするならば、「旦那所」はそれらが集合した面的な把握であるといえよう。

(28) 青柳糸若「伊勢御師沿革」(『度会』二二・二三号、一八九九年)。

(29) 藤井清司氏は、神苑会創立委員などを務めた人物で、『神苑会史料』(神苑会清算人事務所、一九一一年)・『神苑会史料補遺』(田中芳男、一九一三年)などの編纂者として知られる(前掲『神苑会史料』・『神苑会史料補遺』)。

(30) 西川順土「廃止前後の御師」(『歴史手帖』一二巻七号、一九

八四年)。

(31) 広池千九郎『伊勢神宮』(広池千九郎、一九〇八年)・中村徳五郎『皇大神宮史』(弘道閣、一九二二年)など。

(32) 宇治山田市役所編『宇治山田市史』(宇治山田市役所、一九二九年)など。

(33) 石巻良夫「伊勢の御師」『國學院雜誌』二三卷五号・二三卷七号、一九一七年)。

(34) 平泉澄『中世に於ける社寺と社会との關係』(至文堂、一九二六年)。

(35) 中西用康氏は、平泉澄氏の「(一) 祈禱師、(二) 参詣宿」という指摘のうち、前者を前提とすることに疑義を呈し、「御師の起源は御祈師なりとの誤りたる信念に基いて御祈師が御師であると云はんが為に附会の説と例とを採用せられてゐる」という批判を行っている(「伊勢に於ける御師發生の経路(下)」、『歴史と地理』二五卷一号、一九三〇年、一一二〜一一四頁)。

(36) 新城常三「中世の御師—中世社寺参詣史の一節—」『北大史学』創刊号、一九五一年)、二七頁。

(37) 西山克『道者と地下人—中世末期の伊勢—』(吉川弘文館、一九八七年)、一一二頁。

(38) 窪寺恭秀「中世後期に於ける神宮御師の機能と展開について」

『皇學館大学神道研究所紀要』二二輯、二〇〇五年)、一二九頁。

(39) 中西用康「伊勢に於ける御師發生の経路(上)・(下)」、『歴史と地理』二四卷六号・二五卷一号、一九二九年・一九三〇年)。

(40) 岡田米夫「源頼朝の奉幣祈禱と御師との關係を通して見たる王朝時代より武家時代への転換期に於ける神宮の社会史的考察」『史学会会報』九号、一九三一年)。

(41) 神社に関する史料が抱える諸問題については、諏訪神社の關係史料を事例として資料学的検討を行った井原今朝男「神社史料の諸問題—諏訪神社關係史料を中心に—」(前掲『国立歴史民俗博物館研究報告』一四八集)を参照。特に、近代神社制度の導入により旧社家と神社との關係が断たれ、史料の多くが個人の家藏史料に帰してしまい、今日、それらが危機的状況にあるという指摘は、伊勢神宮・御師家に関する史料にも当てはまる。

(42) 井後政晏「伊勢信仰の研究と課題」(『神道史研究』五〇卷三・四合併号、二〇〇二年)・藤森馨・平泉隆房・久田松和則・牟禮仁・加茂正典「伊勢神宮史研究の現状と課題」(『皇學館大学神道研究所紀要』二四輯、二〇〇八年)。

(43) 西垣晴次「近世伊勢信仰の研究成果と課題」(『民衆宗教史叢書 第十三卷 伊勢信仰』近世』所収、一九八四年)、三三五〜三三六頁。

(44) 前掲「中世の御師―中世社寺参詣史の一節―」。

(45) 新城常三『社寺参詣の社会経済史的研究』（塙書房、一九六四年）。後に増補して『新稿 社寺参詣の社会経済史的研究』（塙書房、一九八二年）。

(46) 小林計一郎「伊勢御師宇治家と信州檀家―荒木田久老・同久守を中心として―」（『信濃』六巻八号、一九五四年）。

(47) 例えば、藤田定興「盤城・岩代地方を旦那場とした近世の伊勢御師とその旦那廻りの実態」（小津清治先生還暦記念会編『福島地方史の展開』所収、一九八五年）・草間孝廣「松前における伊勢御師の活動」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊三五号、二〇〇一年）・千枝大志「伊勢御師の動向と山国」（坂田聡編『禁裏領山国荘』、高志書院、二〇〇九年）など。また、廻旦の請負については、上野秀治氏が関係史料を紹介している（『江戸後期伊勢御師の配札に関する一試論』、『皇學館大学史料編纂所報』一九六号、二〇〇五年）。

(48) 井上頼壽氏『伊勢信仰と民俗』（神宮司庁教導部、一九五五年）。

(49) 大西源一『参宮の今昔』（神宮司庁教導部、一九五六年）。

(50) 大西源一『大神宮史要』（平凡社、一九六〇年）。

(51) 藤谷俊雄・直木孝次郎『伊勢神宮』（三・一書房、一九六〇

年）。

(52) 萩原龍夫「伊勢信仰の発達と祭祀組織」（『中世祭祀組織の研究』所収、一九六二年）。

(53) 藤本利治「御師の活動からみた近世日本の地域性と山田の町」（『歴史時代の集落と交通路』所収、地人書房、一九八九年）。初出は、「山田御師と活動に現われた近世日本の地域性―師職銘帳の統計的分析（一）―」（『皇學館大学紀要』七輯、一九六九年）。

(54) 藤本利治「門前町と御師の活動」（『門前町』所収、古今書院、一九七〇年）。

(55) 藤本利治「近世都市の機能結合―門前町を事例として―」（『近世都市の地域構造』所収、古今書院、一九七六年）。

(56) 例えば、舩杉力修「戦国期における伊勢神宮外宮門前町山田の形成―上之郷を事例として―」（『歴史地理学』一八九号、一九九八年）・伊藤裕久「都市空間の分節と統合―伊勢山田の都市形成―」（『年報都市史研究』八号、二〇〇〇年）・小林秀「中世都市山田の形成とその特質―屋敷売券を手がかりに―」（伊藤裕偉・藤田達生編『都市をつなぐ―中世都市研究13―』、新人物往来社、二〇〇七年）など。

(57) 大澤貴彦「近世神宮祠官の家格と家筋について」（谷省吾先

生退職記念神道学論文集編集委員会編『谷省吾先生退職記念神道学論文集』所収、国書刊行会、一九九五年。

(58) 肥後和男「御師について」など九本の論文と「神宮御師(宇治・山田)名鑑」を掲載(『瑞垣』一二二号、一九七七年)。

(59) 皇學館大学史料編纂所編『神宮御師資料』一〜七輯(皇學館大学出版部、一九八〇〜一九九八年)。

(60) 西川順土「両宮御祓銘論の背景」(『皇學館論叢』四九号、一九七六年)。

(61) 西垣晴次『お伊勢まいり』(岩波新書、一九八三年)。

(62) 西垣晴次「序」(前掲『民衆宗教史叢書 第十三巻 伊勢信仰』近世』所収)。

(63) 水本邦彦「徳川日本とはなにか」(『日本歴史 私の最終講義

3 徳川社会論の視座』所収、敬文舎、二〇一三年)、一五〜三

〇頁。初出は、『京都府立総合資料館 資料館紀要』三八号、二〇一〇年。

(64) 前掲『道者と地下人―中世末期の伊勢―』。

(65) 例えば、朝尾直弘・網野善彦・山口啓二・吉田孝編『日本の社会史』全八巻(岩波書店)は、昭和六十一年(一九八六)から刊行が開始されている。

(66) 「御宿職売券」は、神宮御師と旦那との借財による師旦那契約

の際に用いられた文書で、「道者売券」は、御師間で師旦那関係を結ぶ権利を売買する際に用いられた文書である。

(67) 飯田良一「中世後期の宇治六郷と山田三方」(『三重県史研究』七号、一九九一年)。

(68) 吉田吉里「外宮御師橋村一族について―中世末期、北部九州に於ける勢力拡大を中心として―」(『神道史研究』四五巻四号、一九九七年)。

この他、橋村氏の活動については、小西瑞恵「戦国期における伊勢御師の活動―橋村氏を中心に―」(『中世都市共同体の研究』所収、思文閣出版、二〇〇〇年) などがある。

(69) 窪寺恭秀「伊勢御師幸福大夫の出自とその活動について―中世末期を中心に―」(『皇學館史学』一四号、一九九九年)。

(70) 久田松和則『伊勢御師と旦那―伊勢信仰の開拓者たち―』(弘文堂、二〇〇四年)。

(71) このような史料を用いた成果として、千枝大志「神宮地域における銀の普及と御師の機能」(『中近世伊勢神宮地域の貨幣と商業組織』所収、岩田書院、二〇一一年) など。初出は、「中近移行期伊勢神宮周辺地域における銀の普及と伊勢御師の機能」、『神道史研究』五五巻一号、二〇〇七年。

(72) 久田松和則『御参宮人帳』に見る伊勢御師の経済―天正・慶長期を中心に―(『神道史研究』六一巻二号、二〇一三年)。

(73) 伊勢市教育委員会編『伊勢市郷土資料館 第13回特別展図録』(伊勢市教育委員会、二〇〇三年)。

(74) 『御師廃絶一三〇年記念シンポジウム 伊勢の町と御師―伊勢参宮を支えた力―資料集』(御師廃絶一三〇年記念シンポジウム実行委員会、二〇〇三年)。

(75) 岡田登「試掘調査」(伊勢市編『伊勢市史』第六巻考古編、伊勢市、二〇一一年)。丸岡宗大夫邸については、松月久和「御師丸岡宗大夫邸」(『伊勢市史』第七巻文化財編、伊勢市、二〇〇七年)、丸岡家については、山田恭大「外宮御師丸岡家の師職経営」(『皇學館論叢』四六巻一号、二〇一三年)を参照。

(76) 前掲「中世後期に於ける神宮御師の機能と展開について」。

(77) 祭主家については、藤波家文書研究会編『大中臣祭主藤波家の歴史』(続群書類従完成会、一九九三年)を参照。また、祭主家の御師としての側面については、足利將軍家との師旦関係について論じた芝本行亮「大神宮御師と大中臣氏」(『神道史研究』四九巻三号、二〇〇一年)を参照。

(78) 地下人層とは、伊勢神宮鳥居前町の都市共同体の構成員層を指す。これは西山克氏の理解によるものである(前掲『道者と地下人―中世末期の伊勢―』、一一―一三頁)。

(79) 笠原綾「近世の武家の信仰をめぐる―近世前半における幕

府・諸大名と伊勢御師―」(『歴史評論』五二二号、一九九二年)。

(80) 笠原綾「老中の伊勢参宮」(『論集きんせい』一九号、一九九七年)。

(81) 「伊勢御代参の年頭恒例化と將軍權威」(今谷明・高埜利彦編『中近世の宗教と国家』所収、岩田書院、一九九八年)。

(82) 澤山孝子「朝幕関係のなかでの伊勢神宮―寛文十年御祓銘争論を事例として―」(『三重県史研究』一七号、二〇〇二年)。

(83) 久田松和則「大名の伊勢参宮と御師の接遇―肥前大村藩主と黒瀬主馬の一例を通じて―」(皇學館大学編『神宮と日本文化』所収、皇學館大学、二〇一二年)。

(84) 伊勢市編『伊勢市史』第二巻中世編(伊勢市、二〇一一年)。

(85) 伊勢市編『伊勢市史』第三巻近世編(伊勢市、二〇一三年)。

(86) 研究史の整理にあたっては、皇學館大学編『伊勢神宮研究文献目録』(皇學館大学、二〇一二年)によるところが大きい。

第一部

神宮御師集團の近世的变化

第一章 神宮御師集団と師旦関係―寛永年間の争論をめぐって―

はじめに

本章は、神宮御師集団と師旦関係について、寛永年間に起きた争論を素材に考察するものである。

近世の神宮御師には、内宮鳥居前町（宇治）に居住する内宮御師と、外宮鳥居前町（山田）に居住する外宮御師の二種類があり、前者は宇治会合、後者は山田三方（ともに、有力な御師家で構成される合議機関）の統制のもと、別個の集団を形成していた。

従来の研究においては、伊勢信仰研究の主要なテーマとして御師家ごとに活動面を中心に進められたこともあって⁽¹⁾、右のような集団の問題については等閑視される傾向にあった。このような状況の中、西川順土氏⁽²⁾や澤山孝子氏⁽³⁾による研究は、寛文年間に争われた「両宮御祓銘論」と称される大規模な争論の背景や概要を検討し、これにより、両御師集団（内宮御師集団・外宮御師集団）の間に存在する競合・対立を議論の遡上に載せた点で貴重な成果であるといえる。

両御師集団の競合・対立を考える上で第一に挙げなくてはならないのは師旦関係の問題である。師旦関係とは、御師と旦那・旦那所との間で取り結ばれるもので、様々な得点が存在したことから、「御

師職」や「御宿職」という呼称で物権化し、御師間で譲渡・売買の対象となった⁽⁴⁾。御師間で起きる争論の大半は、この御師職の帰属をめぐるものであり、前述の「両宮御祓銘論」でもこれが争点となっている。ただ、近世における師旦関係の様相については、具体的な検討がなされておらず、このため、御師集団間で争論が発生する理由も不鮮明なままとなっている。

従って本章では、徳川家康・秀忠・家光が両御師集団へ発給した朱印状への検討を通じて、師旦関係のあり方とその規定の変遷を浮き彫りにすることを課題として設定したい。特に家光朱印状については、発給の契機となった寛永年間の争論（以下、「寛永争論」と記す）を詳しく見てゆき、その背景と意義を明らかにする。

一 徳川家康・秀忠の朱印状と師旦関係

ここでは、徳川家康・秀忠から発給された朱印状の内容を検討し、両朱印状で師旦関係がどのように規定されていたか、を見てゆく。まず、徳川家康の朱印状を掲げる。

一、内宮知行方可^レ為^二守護不入^一事、

付、諸法度任^二先規^一年寄共可^二申付^一事、

一、喧嘩口論之儀前々雖^レ在^レ之、当時堅令^二停止^一訖、若於^二違背之輩^一者双方可^レ為^二曲事^一事、

一、参宮之輩者可_レ為_二旦那次第一事、

慶長八年九月九日

(朱印)

内宮二郷

年寄

右は慶長八年（一六〇三）九月九日付で宇治会合に発給された徳川家康朱印状⁽⁵⁾である。これと同趣旨の朱印状が山田三方にも発給されている。

三か条目に「参宮之輩者可_レ為_二旦那次第一事」という文言がみえる。先行する研究では、滝川政次郎氏が「御師と参詣人の師檀関係を否認したもの⁽⁶⁾」とするように、御師と旦那との既存の師檀関係を否定するものであると理解されてきた。例えば、大西源一氏は「従来の御師の縄張を無視し、檀家をして、任意に他の御師と師檀関係を結び得ることを公認したもの⁽⁷⁾」としている。これに対し、近年、上野秀治氏は「御師の師檀関係を否定したものとも解釈できるが、これまでの師檀関係を幕府が認めなかったのではなく、参宮してくる人だけが対象であった⁽⁸⁾」という指摘を行い、従来の見解に疑義を呈した。

両見解を吟味するにあたって注目したいのは、「御師職式目之条々⁽⁹⁾」と「師職定書⁽¹⁰⁾」という二つの法規の存在である。「御師職

式目之条々」は、慶長十年極月吉日の成立で、山田奉行である長野友秀・日向政成⁽¹¹⁾の「山田諸国旦那式出入、各へ相尋候へハ、事不_レ行候間、先規より有来候通、懇_二被_レ成_二式目二、三方衆連判ニ而、此方へ渡可_レ被_レ置候⁽¹²⁾」という指示を受けて、山田三方が御師職をめぐる争論の「調停時の慣行を集大成したもの⁽¹³⁾」である。そして、「師職定書」も、この「御師職式目之条々」と類似した内容で、宇治会合が寛永八年（一六三一）七月二十日付で作成したものである。これら師檀関係の存在を前提とした法規が、家康朱印状の発給以降においても、それぞれの御師集団内で制定され続けていることを重視するならば、家康朱印状によって否定されたと理解するのは不整合であろう。

従って、この文言は、既存の師檀関係を黙認するとともに、参宮に際する旦那の意向の尊重を指示したものと理解した方が適切であるといえる。つまり、「参宮者のことに関しては、旦那（参宮者として参拝に訪れた旦那）の意向を尊重せよ」と解釈できる。これによって、参宮に際しての御師に対する旦那の優位と、その意向の尊重が定められたのである。

右の朱印状は、前述したように山田三方にも発給されており、対して山田三方は、慶長八年九月十七日付で「御侘言可_二申上_一之旨」を申し合わせた連判状⁽¹⁴⁾を作成した上で、抗議を行った。その

連判状に「今度被^レ成下^一候御朱印之条々、忝奉^レ存候、雖^レ然、御参
宮人者、可^レ為^二旦那次第^一之旨、加様^二罷成候へ者、先規法式茂相
違、上下迷惑仕候^一とあることから、家康朱印状の「参宮之輩者可^レ
為^二旦那次第^一事」という文言が、山田三方や御師たちにとって「先
規法式」を損ない「迷惑」を被るものとして認識されたことがわか
る。この理由としては、旦那の意向を尊重することは止宿先の決定
権を旦那に委ねることを意味し兼ねず、師旦那関係の衰微につながる
と受け止められたからであろう⁽¹⁵⁾。

先行する研究では、右の抗議によつて、三か条目を「一、参宮之
輩者可^レ為^二先規法式^一事」とする慶長八年九月二十五日付の朱印状⁽¹⁶⁾
が再発給されたとされてきた⁽¹⁷⁾。しかしながら、後述する
理由からこれは山田三方による偽りであり、山田三方は抗議を行つ
た際に家康朱印状を没収されたと考えられる。

次に、徳川秀忠の朱印状を掲げる。

- 一、内宮知行方可^レ為^二守護不入^一事、付、諸法度如^二先規^一年寄
共可^二申付^一事、

- 一、喧嘩口論之儀堅令^二停止^一訖、若於^二違背之族^一者双方可^レ為^二
曲事^一事、

- 一、参宮之輩者可^レ為^二旦那次第^一事、
右条々任^二去慶長八年九月九日先判之旨^一、弥可^レ守^二其旨^一

者也、

元和三年九月三日（朱印）

内宮二郷

年寄

これは、元和三年（一六一七）九月三日付で宇治会合に発給され
た朱印状⁽¹⁸⁾である。三か条目の文言が家康朱印状と同一であり、
また、「右条々任^二去慶長八年九月九日先判之旨^一」との記述がある
ことから、同朱印状を継承するものであることがわかる。

一方、同年九月六日付で山田三方に発給された秀忠朱印状⁽¹⁹⁾
をみると、

- 一、伊勢太神宮領宮川三宮之内可^レ為^二守護不入^一事、付、諸法度任^二先規^一、
一年寄共可^レ申付^一事

- 一、喧嘩口論之儀弥堅令^二停止^一訖、若於^二違犯之族^一者双方可^レ
為^二曲事^一事、

- 一、参宮之輩可^レ任^二先規法式^一事、

右可^レ相^二守此旨^一者也、

元和三年九月六日 御朱印

とある。宛所を欠くなど不審な点もあるが⁽²⁰⁾、注目すべきは、三
か条目に「参宮之輩可^レ任^二先規法式^一事」とあることである。これ
は前掲の宇治会合宛に発給された家康・秀忠朱印状と異なり、従来
からの法式の尊重を指示するものであると理解でき、旦那の参宮に

際しての御師の優位と主導を認める文言であるといえる。さらに、「右可^レ相^二守此旨^一者也」とあつて、宇治会合宛の秀忠朱印状と比べると、家康朱印状の存在が前提とされていないことに気付く。このことから、再発給が行われていないことが確認でき、山田三方は秀忠から新規に朱印状の発給を受けたと考えられる。

試みに、後述する寛永争論における山田三方の主張と江戸幕府の年寄たち（以下、「年寄」と記す）の判断を見ておく。山田三方の年寄たちは、

卅三年以前に旦那次第之御朱印しゅうやう上人より外宮ニ而請取
驚、伏見へ罷登^{（マ）} 権見様江御訴訟申上候者、参宮之輩旦那次第
と御座候へ者両宮之売買すたり、太神宮御ちんさして以来数
代相伝之旦那もすたり候得者、何とも迷惑仕候由申上候へ者、

被^二聞召別させ^一、参宮之輩者先規法式と成被^レ下頂戴仕候、（後略）

とあるように、抗議の結果、家康から朱印状の再発給を受けたと述べている。また、年寄等からの「権見様之先規法式之御朱印者如何仕候哉」という下問に対し、

大久ほ石見殿一目御覽し可^レ被^レ成と被^レ仰候故指上、其後御帰^{（マ）}
し候へと申上候へとも、其時之御出頭故御事多候へ而何角とい
たし御返しなく候、

と答えている（21）。つまり、再発給された朱印状を大久保長安に奪

われたため、現在は所持していないとしているのである。しかしながら、これらを裏付ける証拠は提出されず、さらに辻褄が合わない答弁を行ったため、

讃岐殿御申被^レ成候者、権見様成被^レ下申さぬ御朱印を成被^レ下、
其上大久保石見ニ借失ハレ候と色々いつまり申候事、上之御機
嫌あしく候、則かいえきか、るさいに被^二仰付^一候はん、されとも
神慮長袖の儀故此度者御免ニ而候、以来何様之儀仕候ハ、る
さいに可^レ被^二仰付^一候間、左様ニ相心得候へ、（後略）

として（22）、裁定の場において山田三方の主張は偽りであるとされている。ここからも前述の事実が裏付けられよう。

以上の要点を整理すると次のようになる。

①徳川家康から宇治会合・山田三方のそれぞれに発給された朱印状には「参宮之輩者可^レ為^二旦那次第^一事」とあり、参宮に際しての旦那の意向の尊重が指示されていた。

②山田三方は抗議を行ったため、①の家康朱印状は没収された。そして、それに代わる朱印状の再発給は行われていない。

③秀忠朱印状は、宇治会合のものと山田三方のものとは文言が相違する。宇治会合のものは家康朱印状を継承し、旦那の意向の尊重を指示するものであったのに対し、山田三方のものは従来からの法式の遵守を指示するものであった。

となる。①と③から、両朱印状に載せる師旦関係の規定は、参宮者の応対に関する指示に止まるもので、その明確な承認を意味する内容ではなかったと指摘できる。むしろ②の山田三方による抗議があったことを重視するならば、場合によっては師旦関係の衰微を招くものであったといえよう。

また、注意しておかなければならないのは、両御師集団の関係が調整されておらず、別々に朱印状が発給されていることである。これはそれぞれの集団に対して個別に制定されていることを表しており、③のように朱印状の文言に相違が発生すると、御師集団間の対立を引き起こす原因となってしまうのである(23)。

右から、家康・秀忠の朱印状は、既存の師旦関係を動揺させ兼ねないものであったと考えられる。そして、この朱印状の文言が次節で詳述する寛永争論での争点となつてゆくのである。

二 寛永争論

寛永争論は、寛永十一年(一六三四)六月から翌十二年七月にかけて宇治会合と山田三方の間で起きた争論で、争点となつたのは、徳川家康・秀忠が発給した朱印状の文言と師旦関係のあり方であった。本節では、同争論を中心に検討を行つてゆく。

(1) 寛永争論以前における師旦関係の実態

争論を見てゆく前に、寛永争論以前の師旦関係の実態について、闕所処分となつた御師職売却の事例から確認しておきたい。

元和年間に、外宮御師である三日市大夫と五文子屋庄左衛門が松前氏との師旦の契約をめぐる争論を起し、敗れた五文子屋は裁定を不服として再訴しようとしたため、闕所・追放処分となつた(24)。そして、闕所とされた御師職の売却が決まつた際に、内宮御師である木下大夫がその旦那所を侵犯した廉で山田奉行の中川忠勝(25)へ提出したのが左の証文(26)である。

今度從^ニ御公儀「山田五文子屋庄左衛門所領御闕所被^レ成、庄左衛門道者為^ニ上意」御売被^レ成候処、庄左衛門持分之北伊勢家所へ懇望仕、御被^レくはり、御参宮之宿仕候を御あらため出し被^レ成、我等法式をそむき不屈之旨堅被^ニ仰付^一候、然上ハ右之家所五文子屋持分之旦那之内、向後一人二而も御被^レくはり申ましく候、同参宮之宿一人も仕ましく候、若一人二而も御被^レくはり御参宮之宿仕候ハ、以来御聞付次第曲事^ニ可^レ被^ニ仰付^一候、一言之御わひを申上ましく候、此旨我等子々孫々ニ至まで相守可^レ申候、為^ニ後日^一如^レ件、

内宮

木下大夫

寛永五戊辰年卯月廿七日

久弘判

進上 中川半左衛門尉様

内宮御師（木下大夫）が、外宮御師（五文子屋庄左衛門）の闕所となつた旦那所（北伊勢家所）に手出しをしないことを山田奉行へ誓約していることがわかる。ここから、師旦関係に関し、山田奉行が御師集団の別を考慮していなかったことが読み取れる。また、この証文が山田奉行から新たに御師職の持ち主となつた河村彦大夫に与えられていることを重視すると（27）、御師間においても同様の認識であつたといえよう。

さらに、同五月三日には次のような指示が宇治会合・山田三方になされている（28）。

五文^{（28）}字 屋庄左衛門道者 上意を請從^ニ三方^一就^ニ売被^レ申候^一、越前之道者為田六右衛門、同北伊勢之道者河村彦大夫、此兩人庄左衛門持分一円買申候、然る上者先規法式候条不^レ及^レ申候得共、右之道者致^レ宿又者御祓賦申者於^レ在^レ之者曲事^ニ可^ニ申付^一候、恐々謹言、

五月三日

中川半左衛門

在判

山田惣衆中

宇治惣衆中

此御墨付之趣下々迄堅申触候、

三方年寄中丸印

此御墨付之趣下々迄堅申触候、

内宮年寄中丸印

山田奉行が、御師職の持ち主となつた為田・河村の旦那所を侵犯すれば処罰する旨を宇治会合・山田三方に伝えており、両組織はこれを鳥居前町（宇治・山田）に触れ出すとしている。つまり、ここで言う「先規法式」は、他の御師の旦那に対し、止宿させたり、御祓を配つたりしないことであると理解でき、このような趣旨が宇治・山田それぞれの「下々」まで触れられたという事実から、集団の別はあつても、彼らを取り結ぶ師旦関係には、区別がなかったものと考えられる。

これに関しては、千枝大志氏の成果が参考となる。同氏は、御師職の譲渡・売買について、文安四年（一四四七）から寛永元年（一六二四）までの事例を一覧表としている（29）。これによると、内宮御師と外宮御師との間で譲渡・売買が行われていたことが確かめられる。つまり、師旦関係には区別が存在しておらず、このため、両者間での譲渡・売買も可能であつたといえる。

右の事例から、寛永争論以前においては、集団の区別（内宮御師集団・外宮御師集団）はあるものの、師旦関係については集団間に明確な線引きは存在していなかったことが確認できる。

(2) 寛永争論と師旦関係

寛永争論は、外宮御師が宇治へ向かう参宮者を抑留したことを端緒とする(30)。寛永十一年六月二十一日、宇治会合は山田奉行に訴状(31)と、その「参宮衆留申仕方」を記した覚書(32)を提出した。これによると、外宮御師たちは、内宮御師のもとに止宿しようとした参宮者を打擲したり、追い返したりしたとされる。

この後、徳川家光の上洛と下向があり、幕府の年寄等が多忙であったため延引し、山田三方の年寄たちも翌年の三月まで江戸に出府しなかったため、評定(33)が始まったのは寛永十二年六月からであった(34)。宇治会合の年寄たちは事前に年寄等と御目見を行っており、また、四月五日には春日局や慶光院(35)等とともに龍頭鰯首の船を見物し、春日局から「嶋ほん・御樽」を拝領している(36)。

その審議は年寄等の屋敷で行われ【表1】、それぞれの寄合で宇治会合・山田三方の年寄たちに下問がなされた。まず、朱印状発給をめぐる議論を見てゆこう。宇治会合の年寄たちは六月八日の寄合で、
一、三十三年以前(慶長八年)にも内宮への参宮者を外宮御師が抑留したため、徳川家康に訴え、その結果、朱印状の発

【表1】寛永争論における寄合と出席者一覧

番号	月日(寛永12年)	場所	出席者
1	6月5日	松平信綱宅	加賀爪忠澄<町奉行>・堀直之<町奉行>・水野守信<大目付>・柳生宗矩<大目付>・大河内久綱<不詳>・伊奈忠治<勘定方>・(松平信綱)<六人衆>
2	6月8日	松平正綱宅	酒井忠勝<老職>・土井利勝<老職>・松平信綱・加賀爪忠澄・堀直之・板倉重宗<京都所司代>・大河内久綱・水野守信・林道春<中奥御小性次席儒者>・林永喜<不詳>・花房幸次<山田奉行>・(松平正綱)<勘定頭>
3	6月13日	松平正綱宅	土井利勝・酒井忠勝・加賀爪忠澄・堀直之・「横目衆二人」・花房幸次・林道春・林永喜・(松平正綱)
4	6月18日	酒井忠勝宅	土井利勝・松平信綱・松平正綱・大河内久綱・牧野信成<留守居>・久貝正俊<大坂町奉行>・「横目衆二人」・林道春・林永喜・花房幸次・(板倉重宗)・(酒井忠勝)
5	6月28日	酒井忠勝宅	土井利勝・酒井忠勝・花房幸次
6	7月11日	土井利勝宅	酒井忠勝・松平信綱・板倉重宗・加賀爪忠澄・堀直之・花房幸次・林道春・林永喜・(土井利勝)
7	7月28日	酒井忠勝宅	土井利勝・酒井忠勝・松平信綱・林永喜・建部昌興<右筆>・(花房幸次)

「寛永年中引留」(神宮文庫所蔵)から作成。出席者の記載順は同史料による。出席の記載がないものの、寄合の行われた屋敷の主であることや寄合における発言等から出席が確認できる人物は()とした。『寛政重修諸家譜』(続群書類従完成会新訂本)をもとに人物の比定を行い、判明する限り同書の記述から役職を<>で付した。但し、林道春・松平正綱・久貝正俊は、『柳営補任』(大日本近世史料本)をもとに補った。

給を受けた。

㊦、家康朱印状は両宮（内宮・外宮）が別個であり、師旦関係も別個であるということを前提に発給されている。

㊧、山田三方に発給された家康朱印状は没収されたため、山田三方は同朱印状を有していない。

と主張している。㊦に関しては、家康朱印状において両御師集団の関係が調整されていなかったこと（前節参照）や、山田奉行が師旦関係に関して御師集団の別を考慮していなかったこと（本節一項参照）を勘案すると、宇治会合側の潤色であると考えられる。

ここで注意しておくことが二点ある。

a、前述の山田奉行に提出された訴状と覚書によると、外宮御師たちは内宮御師のもとへ止宿しようとした参宮者を抑留したのであり、内宮への参宮者を抑留したわけではないということ。

b、内宮・外宮と称しているが、「外宮は太所、殊ニ五十町口に罷在、我まゝ成儀仕、何とも迷惑いたし御訴訟申上候」と述べているように、彼らの言う「外宮」とは外宮鳥居前町（山田）のことであって、意図的に「宇治」を「内宮」、「山田」を「外宮」と読み替えて主張しているということ。

これらから、宇治会合の年寄たちが、鳥居前町の御師集団間の問

題を両宮間の問題として訴えを行っていることは明らかであろう。具体的には、参宮者の止宿先をめぐる争いを、参拝先をめぐる争いであるかのように印象付けているのであって、これによって後述する「旦那次第」を根拠とした主張に補強を試みているのである。

宇治会合側の㊦の主張に対して、山田三方は前節で述べたように、家康から朱印状の再発給を受けたと主張したが、その証拠を提出できず、偽りと判断された。しかし、「先規法式」と記された秀忠朱印状は確かに存在しているのであって、宇治会合が有する「旦那次第」とある家康・秀忠朱印状と、この山田三方が有する秀忠朱印状との整合性が年寄等の間で問題となり、六月十三日の寄合で酒井忠勝に「外宮之台徳院様御朱印者大炊殿御存知可^レ有候」と尋ねられた土井利勝は、

何と御座候も不^レ存候、乍^レ去外宮之御朱印者

権見様旦那次第之御朱印之先規法式を相守れとの事ニ而可^レ有候、此御朱印も旦那次第之御朱印ニ而候、とかく権見様^{（マツ）}未来を御くり被^レ成候、

と発言している。つまり、整合性を重視するあまり、宇治会合の家康朱印状を基準とした強引な意見さえも出されたのである。

次に、朱印状文言の解釈をめぐる議論を確認してゆく。六月八日の寄合でのやり取りを挙げる。年寄等が「先規法式と者何と仕候事

を申候哉」と下問すると、山田三方の年寄たちは、

外宮より申上候者、先規法式と申者旦那衆外宮より内宮へもうり、内宮の旦那外宮へも買申付、両宮之間者先規法式相守候、旦那次第と御座候得者数代相伝之旦那もすたり、又者売買も御座有間敷と申上候、

とあるように、内宮と外宮の御師間で御師職の売買は可能であり、自由に売買することが先規法式であるとしている。集団の区別はあるが伊勢神宮の御師である点では同一であり、師旦那関係も同一であるという理解に基づく主張であるといえよう。

対して、宇治会合の年寄たちは、

左様二而者無^二御座^一候、内宮之内者先規法式御座候、外宮と内宮之間者旦那次第二而御座候、外宮之うち者にて売買仕、内宮へまてかけ、国を持候とて内宮へ之参宮人留申迷惑仕候、

と述べ、内宮御師集団の内（外宮御師集団の内）では「先規法式」であつて売買は自由であるが、内宮と外宮のどちらの御師を選ぶかは「旦那次第」（旦那の意向次第）であると主張した。年寄等が、宇治会合の年寄たちに「外宮より内宮へも内宮より外宮【江茂（37）】旦那売買之儀者如何候哉」と尋ねると、「此売買も旦那次第二而御座候、外宮之御師式内宮二買申候時旦那へ窺申候、旦那之御かつてん二而候へ者かい申候、御かつてんなき者かい不^レ申候」として、

旦那の意向次第で両御師間の売買が可能である旨を答えた。

すると、松平信綱が「此永喜いくらにうり可^レ申や」と下問し、「何と御座候哉」と困惑する山田三方の年寄たちに「拾枚二うり可^レ申候由申候へ」と指示したので、「左様二候ハ、拾枚二うり可^レ申」と答えた。次に信綱は「内宮衆いくらかにかい申候哉」と尋ねると、宇治会合の年寄たちは「何と御座候も不^レ存候」と述べた。信綱が「拾枚に買候へ」と申候へ⁽⁴⁴⁾と指示すると、「左様二候ハ、拾枚二かい候」と答えた。つまり、林永喜との師旦那関係を例として売買をさせてみたのである。そして、信綱は両者のやり取りを見て「左様二而候へ者お師次第二而者なきか」と指摘した。

信綱は、「旦那次第」と言ったところで内実は御師たちの都合次第であつて、旦那に断りなく自由に売買されていることを見抜いたのである。これを受けて、土井利勝は「たかや馬かい申候と同前二而候、仕合能候へ者能成申候、仕合あしく候ハ、わるく成申候」と信綱に同意したが、酒井忠勝は「大炊殿や我々うりもかわれも仕間敷候、自然遠国之百性とも之事にて有へし、旦那次第聞へ申候」と述べて、信綱の指摘した「お師次第」は「遠国之百性とも」との師旦那関係を売買するような例外的な場合として、宇治会合側の主張に理解を示した。

この後のやり取りで、

其後、志摩守殿外宮之能様に少御申被_レ成候、内宮より申候者、志摩殿能御存知ニ而御座候とて、もの次而に内宮之申分も被_二仰上_一可_レ被_レ下候と申上候へハ、志摩殿迷惑成体ニ而御ささり被_レ成候、其後、永喜外宮之能様ニ御指出被_レ成候、内宮より申候者、永喜者御存知有間敷候に能御存知にて御座候と申候得者、是も迷惑成ていニて御ささり被_レ成候、

とあるように、山田三方を擁護する山田奉行や林永喜の意見があつたことや、本節一項で示した事例を踏まえるならば、山田三方側の主張の方が実態に近いものであつたと考えられる。

しかしながら、以後の寄合においては、宇治会合側の主張が年寄等の支持を集めてゆくことになる。同主張は、師旦関係が集団ごとで別個のものであるとしておきながら、両者間で売買が可能であるとするなど矛盾を孕んだものであつたが、「旦那次第」と「先規法式」を整合的に説明しているという点で理解を得たのである。一方、山田三方側の主張は、自らの有する秀忠朱印状の「先規法式」を強弁するばかりで、宇治会合の有する家康・秀忠朱印状の「旦那次第」を組み込んだ説明を行うことができなかった。また再発給の証拠を提示できなかったことも彼らの立場を不利にし、その主張の信憑性を損ねたといえる。

最後に、両宮の関係をめぐる議論を見てゆく。七月十一日の寄合

でのやり取りを挙げる。年寄等が「内宮と外宮之神者ちかい候哉」と尋ねると、宇治会合の年寄たちは、

内宮者天照皇太神宮、外宮者とうけ太神宮ニ而御座候、其上外宮ハ四百八拾年ニ御ちんさん被_レ成候、則是ニ御りんし御座候、御覽し被_レ成可_レ被_レ下候、此御りんし者 大かうさま御遷宮被_レ成候時、内宮・外宮御神うつし跡先あらそひ御座候付、内宮理運之旨の御りんしニ而御座候、大かうさまの御判も御座候、

と答え、内宮と外宮が別であり、その鎮座や遷宮の先後の点でも相違していることを説明した。さらに「内宮は御隠居之御神ニ而者なきか」と下問すると、

神之御隠居なと、申儀者無_二御座_一候、内宮者七所之別宮八十末社、外宮者四所之別宮四十末社御座候、内宮者天照皇太神宮、外宮はとうけ太神宮、御くらい相ちかい申候、

とあるように、神に隠居という事柄は無いことを述べ、内宮と外宮とでは別宮・末社の数が異なっており、このことから「御くらい相ちかい申候」とまで言い切り、内宮の優位を強調した。これに対し、年寄等が「内宮之申ことくニ而候や」と山田三方に尋ねると、山田三方の年寄たちは「内宮の申ことくに而御座候」と答えるのみで反論を試みることはなかった。

注目すべきは年寄等の認識である。右の下問から年寄等が正宮や祭神については確かな知識を有していなかったことが窺われる。つまり、ここにおいて伊勢神宮の特色（祭神や鎮座時期の異なる二つの正宮が存在し、それぞれ複数の別宮・摂末社がある）が認識されることとなったと考えられよう。そして、このことが裁定時に発給された徳川家光朱印状において、師且関係のあり方として反映されることになるのである。

以上の議論と徳川家光による朱印状の実検を経て、七月二十八日、酒井忠勝宅での寄合において裁定が行われ、宇治会合の勝訴が言い渡された。そして、次のような朱印状が発給された。なお、検討の便宜上、宇治会合への朱印状（38）を【A】とし、山田三方への朱印状（39）を【B】とした。

【A】

- 一、伊勢大神宮領之内可_レ為_二守護不入_一事、
付、諸法度任_二先規_一年寄共可_二申付_一事、
- 一、喧嘩口論之儀堅令_レ停止_一之_一訖、若於_二違犯之族_一者双方可_レ處_二罪科_一事、
- 一、参宮之輩可_レ為_二檀那次第一_一事、
- 一、当分参宮之族者両宮之内可_レ任_二其志_一、師職之由申、不_レ可_レ留_レ之事、付、両宮之内師職無_レ之者可_レ為_二参宮人之心

次第一事、

- 一、古来相伝之檀那以_二才覚_一不_レ可_二奪取_一事、
右条々任_二慶長八年九月九日・元和三年九月三日両先判之旨_一、
且此度追加訖、弥可_二相守_一者也、

寛永十二年七月廿八日

（朱印）

内宮二郷

年寄

【B】

- 一、今度就_二内宮・外宮之訴論_一令_二穿鑿_一之處、元和三年九月六日先判所_レ載先規法式近來其旨認_二失之_一、是外宮中間之法式也、誤而内宮同事混雜用_レ之、押_二留内宮参宮之輩茂_一不届之至也、向後参宮之族者可_レ為_二檀那次第一_一事、
- 一、当分参宮之輩者両宮之内可_レ任_二其志_一、師職之由申、不_レ可_レ留_レ之事、
付、於_二両宮_一師職無_レ之者可_レ為_二参宮人之心次第_一事、
- 一、古来相伝之檀那以_二才覚_一不_レ可_二奪取_一事、
- 一、伊勢大神宮領之内可_レ為_二守護不入_一事、
付、諸法度任_二先規_一、
年寄共可_二申付_一事、
- 一、喧嘩口論之儀堅令_二停止_一之_一訖、若於_二違犯之族_一者双方可_レ處_二罪科_一事、

右任^二元和三年九月六日先判之旨^一、且此度相加畢、弥可^レ相^二守之^一者也、

寛永十二年七月廿八日

外宮

年寄

師旦關係に關係するのは、【A】の三・四・五か条目、【B】の一・二・三か条目である。文面に相違があるものの、両者の趣旨が統一されていることに気づく。

【A】の三か条目が家康・秀忠朱印状を引き継ぐものであるのに対し、【B】の一か条目では、「先規法式」と「檀那次第」（旦那次第）についての詳しい説明がなされている。ここでは、師旦關係が正宮に対応する形で把握されており、秀忠朱印状の「先規法式」は「外宮中間之法式」であるとされ、「檀那次第」が指示されている。「先規法式」を根拠に「内宮参宮之輩」を抑留することが禁じられていることから、この「檀那次第」が両御師集団に共通した規定として位置づけられていることが読み取れよう。

次に、両朱印状で共通する条項（【A】の四・五か条目と【B】の二・三か条目）をそれぞれ見てゆきたい。【A】の四か条目と【B】の二か条目では、右で見た「檀那次第」と関連付けて師旦關係について踏み込んだ指示がなされている。つまり、参宮の際、どちらの

御師を選択するかは旦那の意向に委ねることが命じられ、さらに、どちらの御師とも師旦關係を有していない参宮者の場合も同様であるとされた。これは具体的に「檀那次第」を説明するものであると指摘できる。

そして、【A】の五か条目と【B】の三か条目では、才覚を用いて他の御師の有する旦那・旦那所を奪つてはならないことが定められている。一見すると、「檀那次第」と矛盾するようにも捉えられるが、【B】の一か条目に載せるように「先規法式」が否定されたわけではなく、「外宮中間」への規定であるとされていることを踏まえるならば、この部分は御師集団内での師旦關係の承認を意味するものであると解釈できる。

従つて、家光朱印状においては、「檀那次第」が両御師集団を規定するものとして明記され、さらに「先規法式」がそれぞれの御師集団内での、個々の御師が有する師旦關係を認めるものとして説明されるところとなったのである。前述の議論を振り返れば明らかのように、これは宇治会合側の主張を色濃く反映した内容であるといえよう。

以上を小括すると次のようになる。師旦關係のあり方をめぐつて、宇治会合と山田三方が幕府の法廷で対決した。宇治会合側の主張は、師旦關係は集団ごとで別個であるとするものであったのに対し、山

田三方側の主張は、あくまで両御師集団は伊勢神宮の御師である点で同じであり、師旦関係も同一であるという立場をとるものであった。

裁定にあたった幕府の年寄等は、家康・秀忠の朱印状発給の事実だけではなく、その文言の整合性をも重視しており、このため、宇治会合側の主張が適切なものとして受け入れられることになった。

具体的には、徳川家光の発給した朱印状では、家康朱印状と秀忠朱印状との整合性をもたせることが試みられ、結果、家康朱印状の文言は、「旦那の意向を尊重せよ」という趣旨から「両宮どちらの御師を選ぶかは旦那の意向に任せよ」という趣旨に新たに解釈され、そして、山田三方の秀忠朱印状の文言は、御師集団内の師旦関係を保障するものとして解釈されるところとなった。ここにおいて、内宮御師と外宮御師とは、取り結ぶ師旦関係が、それぞれで異なることが明確化されたと考えられる。

おわりに

最後にこれまで考察した内容をまとめ、寛永争論以降の神宮御師集団の展開について述べておきたい。

徳川家康・秀忠朱印状においては、旦那の応対について定めただけで師旦関係の承認がなされておらず、両御師集団の関係も調整さ

れていなかった。加えて、秀忠朱印状では、宇治会合に発給された朱印状と山田三方へのそれとは文言に相違が発生していた。これらのため、既存の師旦関係は不安定な状況にあったといえる。そして、寛永争論以前においては、集団の区別は存在するものの、師旦関係に明確な線引きが存在していたわけではなかった。

寛永争論を端緒として、曖昧であった師旦関係のあり方が整理されることになる。具体的には、伊勢神宮の正宮に対応する形で集団ごとに別個であるとされ、さらに、それぞれの集団内で個々の御師が有する師旦関係が承認された。右には、宇治会合側の主張が反映されており、家康・秀忠朱印状の再解釈をもととした徳川家光朱印状の発給が契機となったと指摘できる。

しかしながら、この争論以降、両御師集団の争いが終息したわけではない。師旦関係が別個であるとされたことによって、内宮御師は外宮御師が有する旦那・旦那所へ、外宮御師は内宮御師が有するそれへ、それぞれ参入してゆくことが建前上では可能となり、旦那・旦那所をめぐって、両者が競合・対立するという構図が形成されることになるのである。また、寛永争論において、内宮・外宮の優劣が論じられたため、以降、内宮・外宮の禰宜たちも、「両宮御祓銘論」といった両御師集団間の争いに関与せざるを得なくなったと考えられる。

今後の課題としては、内宮御師と外宮御師との競合の様相、御師集団と伊勢神宮との関係の変化、などの諸問題が挙げられる。これらに関しては別稿を期したい。

- (1) 例えば、久田松和則『伊勢御師と旦那―伊勢信仰の開拓者たち―』(弘文堂、二〇〇四年) など。
- (2) 西川順土「両宮御祓銘論の背景」『皇學館論叢』四九号、一九七六年。
- (3) 澤山孝子「朝幕関係のなかでの伊勢神宮―寛文十年御祓銘争論を事例として―」『三重県史研究』一七号、二〇〇二年。
- (4) 西山克『道者と地下人―中世末期の伊勢―』(吉川弘文館、一九八七年) 一六四・一九九頁。
- (5) 「徳川家康朱印状」『三重県史』資料編近世1、三重県、七八九〜七九〇頁。なお、宛所に「内宮二郷年寄」とあるが、これは宇治会合を指す。宇治会合と山田三方は、御師集団の統制を行うだけではなく、それぞれ自治組織として鳥居前町とその周辺地域の支配を行った。このため、徳川秀忠朱印状・徳川家光朱印状などにおいても、宛所が「内宮二郷年寄」や「外宮年寄」とされている。
- (6) 瀧川政次郎『山田三方並に宇治会合所に就て』(神宮司庁、一九五〇年)、四三頁。
- (7) 大西源一『参宮の今昔』(神宮司庁教導部、一九五六年)、一三五頁。
- (8) 上野秀治「幕藩体制下における伊勢市域の特質」(伊勢市編『伊勢市史』第三卷近世編、伊勢市、二〇一三年)、三〇頁。
- (9) 「御師職式目」『三重県史』資料編中世1《下》、三重県、三四一〜三四二頁。
- (10) 「師職の定」『三重県史』資料編近世2、三重県、九四二頁。
- (11) 長野友秀・日向政成は、厳密には国奉行であって山田奉行ではないが、その職務内容が後の山田奉行の職務をも含むものであったことから便宜上、山田奉行とした。専任の山田奉行となつたのは寛永八年三月に就任した花房幸次からである。詳しくは、上野秀治「山田奉行の設置と統治」(前掲『伊勢市史』第三卷近世編)を参照。
- (12) 「長野友秀・日向一成連署書状(折紙)」(前掲『三重県史』資料編中世1《下》、三四三頁)。
- (13) 前掲『道者と地下人―中世末期の伊勢―』、一九九頁。
- (14) 「外宮御師連署誓約状」(前掲『三重県史』資料編中世1《下》、三四〇頁)。
- (15) 後述する寛永争論において、山田三方は抗議を行った理由を「参宮之輩旦那次第と御座候へ者両宮之売買したり、太神宮御ちんさして以来数代相伝之旦那もすたり候得者、何とも迷惑仕候」と説明している(神宮文庫所蔵「寛永年中引留」寛永十二年六月八日条、図書番号一門一七三一〇の三二四号)。なお、

「寛永年中引留」については註(34)を参照。以下、本章で使用する史料は特に断らない限り、すべて神宮文庫の所蔵である。

- (16) 国立公文書館所蔵「両宮御朱印師職古格」(請求番号一四二〇八八七号) 収録。なお、山田三方に発給された朱印状の原本はまったく現存していない。

- (17) 例えば、近年のものとして、千枝大志「三方会合成立期の様相」(前掲『伊勢市史』第三卷近世編、一八二〜一八三頁)。

- (18) 「徳川秀忠朱印状」(一門八三二二の三二二号)。この文書は前掲『三重県史』資料編近世1において翻刻されているが(七九〇頁)、脱文が看取されたため原本に拠った。

- (19) 伊勢河崎商人館所蔵「古事要覧」(書籍番号二・四) 収録。扉部分に「諸事古法書付之写 山田三方」とあり、朱印状など様々な文書が収録されていることから、山田三方が法規に関する文書をまとめたものであると考えられる。書写人は不明であるが、享保四年(一七一九)十月甲子日付で写した旨の奥書がある。秀忠朱印状の写しを載せる史料は他にも存在するが、それらには宛所を書き加えるなどの加筆が散見される。「古事要覧」はこれらに比べて最も書写年代が古く、収録する秀忠朱印状も原本に近いものと思料される。なお、この史料については千枝大志氏に御教示頂いた。

- (20) 寛永争論において、「台徳院様御朱印ニあて所なく候、何と仕候哉」という下問がなされており(前掲「寛永年中引留」七月二十八日条)、もともと宛所を欠いていたことが確認できる。これに対して山田三方は明瞭に答えておらず、その理由は不明である。

- (21) 前掲「寛永年中引留」六月八日条。

- (22) 前掲「寛永年中引留」七月二十八日条。

- (23) 前掲「三方会合成立期の様相」、一八三頁。

- (24) 「諸例綱目集成 参」(一門二九九六号)の「師職出入之事」。

- (25) 中川忠勝は厳密には山田奉行ではない。註(11)を参照。

- (26) 「御師職古文書(古文書之写)」収録(一門七四〇四号)。

- (27) 同右。

- (28) 同右。

- (29) 千枝大志「表10 中近世伊勢御師道者売買一覧(寛永元年まで)」(伊勢市編『伊勢市史』第二卷中世編、伊勢市、二〇一年)。

- (30) この抑留事件については、千枝大志氏が「参宮者抑留問題」として、地域間や自治組織間の対立という視点から論じている(「宇治郷の様相」、前掲『伊勢市史』第三卷近世編、二八四〜二八六頁)。

(31) 「参宮客をめぐる外宮師職横暴につき言上書写」(前掲『三重県史』資料編近世2、九四三〜九四四頁)。

(32) 「参宮客をめぐる外宮師職の横暴の覚」(同右、九四五〜九四六頁)。

(33) 当該期の江戸幕府の政治機構については、藤井讓治『江戸幕府老中制形成過程の研究』(校倉書房、一九九〇年)を参照。

(34) 前掲「寛永年中引留」寛永十二年六月五日条。「寛永年中引留」は、宇治会合の年寄家であった浦田氏の旧蔵で、他の写本に比べ脱字・脱文が少なく近世前期の書写であると考えられる。延享元年(一七四四)五月六日に書写された一本に載せる梅谷長政の識語(享保四年九月日付)によると、原本は宇治会合の年寄として寛永争論に参加した梅谷長重の手による記録であるとされる(「寛永十二年内外訴訟引付」、一門四〇〇〇号)。以下、特に断らない限り、「寛永年中引留」を出典とする。

(35) 慶光院については、浜口良光『遷宮上人慶光院記』(神社本庁長老慶光院少宮司を祝う会、一九八一年)を参照。

(36) この後、春日局は五月二十八日に「御内儀之御ひろしき」において、土井利勝・酒井忠勝・内藤忠重・阿部忠秋に対し、

権見様之御時も 台徳院様之御時も内宮への参宮人外宮
ニ相留不_レ申候ニ、此御代に外宮に新関をたて相留候者曲

事成儀仕候、何と被_二仰上_一候哉、何れもの不_レ被_二仰上_一候ハ、我等直ニ可_二申上_一候、左様ニ御座候ハ、御年寄御ためあしく御座有べく候、

と述べて、早く評定を開始するよう催促している。

(37) 脱字が看取されたため、前掲「寛永十二年内外訴訟引付」をもとに【一】部分を補った。

(38) 「徳川家光朱印状」(前掲『三重県史』資料編近世1、七九〇〜七九一頁)。

(39) 「内宮・外宮争論につき家光朱印状写」(前掲『三重県史』資料編近世2、九四六頁)。

第二章 山田三方と旦那争論―裁判制度の整備を中心に―

はじめに

本章は、近世前期の旦那争論について、裁定主体と裁判制度に着目する視点から考察を行うものである。

山田三方は、外宮鳥居前町（山田）の自治組織であるとともに、御師集団に対して支配・統制を行う合議機関として知られている。この山田三方に関しては、自治都市を扱った先駆的研究⁽¹⁾において取り上げられ、滝川政次郎氏⁽²⁾の研究によつて成立から廃止までの流れと組織の概要が示された。その後、西山克氏⁽³⁾や飯田良一氏⁽⁴⁾・千枝大志氏⁽⁵⁾などにより研究が深められた。ここで関心の中心となったのは、山田三方の「自治」の様相とその性格であつて⁽⁶⁾、これにより、中世後期における山田三方の実態が解明された。

また、近年、注目されるのは、千枝大志氏による近世前期を対象とした研究⁽⁷⁾である。同氏は近世前期の山田三方に対して検討を試み、「近世自治機能の確立」期は寛永年間であると指摘した。これは、従来、等閑視されてきた近世への展開に先鞭をつけたものとして高く評価できる成果であるといえる。現状としては、近世前期にかけての山田三方の動向を対象とする研究は右に限られており、中

世後期を対象とする研究に比べると、未だ緒に就いたばかりであると言わざるを得ない⁽⁸⁾。従つて、このような状況を踏まえ、本章では、旦那争論を取り上げ、中世後期から近世への展開に焦点を絞つて考察を行いたい。

中世後期以降、御師たちの活発な活動により、多くの人々が御師との間に師旦那関係を結ぶようになった。そして、これにより頻発したのが、旦那・旦那所の帰属をめぐる争いである。師旦那関係の保持が御師家の存立にとつて極めて重要な事項であつたこともあつて、この争いは激しいものとならざるを得ず、例えば、慶長年間に起きた久保倉氏と三日市氏との争論では、

一、常陸国一円久保倉御旦那二而御座候処ニ、今度常陸衆御参宮被_レ成候を三日市大夫次郎方に御宿被_レ申候間、右之御道者久保倉江御越候へと御迎に人を越候へば、御道者をハカへされず、剩大夫次郎自身長刀をぬき、其外家来之者共刀をぬき、石打、宣阿ミと申坊主之あたまを打わり理不尽成様子迷惑仕候、(後略)、

とあるように⁽⁹⁾、真偽は不明であるが、人傷沙汰さえ発生したとされる。

従来の研究では、山田三方は、右のような御師間の争いを調停する役割を果たしていたとされ、中世後期以降、彼らによつてその裁

判が間断なく実施されてきたものと考えられてきた。しかしながら、このことに關して正面から扱った研究は皆無であつて、諸制度が整つた近世のあり方から敷衍されたイメージであると言わざるを得ない。裁判の実施が「自治」の主要な構成要素であるとするならば、その展開を具体的に跡付ける必要があるように思われる。

以上をもとに、第一節では旦那争論と裁定主体の変遷について、第二節では山田三方による裁判制度の整備について、それぞれ考察してゆく。

一 旦那争論と裁定主体の変遷

本節では、旦那争論の裁判に關して、裁定主体の変遷に着目して検討を行う。【表1】は、寛永年間までの確認できる裁許状を集めたものである。「期間」とあるのは、裁定主体に基づいてその時期ごとに区分したものである。以下、それぞれ特色を見てゆくこととする。

(A) 北畠氏領国期(天正元年～天正十二年)

当該期間、織田信雄が北畠氏の当主となつた天正元年(一五七三)十月(10)から、宮川以東の地域が豊臣氏の勢力下に置かれた天正十二年六月(11)までの時期を想定している。No.1は、確認できる裁許状のなかで最も古いものである。林雅顕などの北畠氏の奉行人が発給者として名前を連ねており、裁判が北畠氏の領国支配の

【表1】旦那争論に關する裁許状一覧(寛永年間まで)						
年月日	西暦	期間	発給者	宛所	内容	出典
1 天正10 10月17日	1582	A	林備後守雅顯(花押影)・垂水越中守国定(花押影)・笠井宗右兵衛尉康正(花押影)・城戸内蔵佐元政(花押影)・水谷播磨守敬頼(花押影)・有楽斎永任(花押影)・松庵土房(花押影)	山田橋村殿	肥前国道者をめぐって橋村と上大夫が争論。橋村の勝訴。	「織田信雄奉行人連署書状」(『三重県史』資料編中世1下)「輯古帖」収録、692～693頁。
2 天正17 5月17日	1589	B	町野左近助重仍(花押)・上部越中守貞永(花押)	吉澤半入殿	尾州之内五郷所御師職堀尾并同名中をめぐって吉澤と内宮長官之内又蔵が争論。吉澤の勝訴。	「町野重仍・上部貞永連署書状」(『三重県史』資料編中世2「吉沢文書」所収、297頁)。
3 (慶長2年)10月15日	1597		大原与右衛門尉將口(花押影)・武藤彦左衛門尉吉勝(花押影)・岡部右兵衛尉忠吉(花押影)	谷帯刀丞殿	当国白子郷中御師職をめぐって谷と宇治中蔵が争論。谷の勝訴。	「大原与右衛門尉等連署書状」(前掲「輯古帖」収録、787頁)。ただし、神宮文庫所蔵「三方会合所引留」(圖書番号1門3560号)と校合し、一部、修正を加えた。また、作成年に關しては、「三方会合所引留」の記述をもとに推定した。
4 (慶長11年)午ノ卯月26日	1606	C	中村勝兵衛定成(花押)・三崎重右衛門尉正以(花押)	福井主計助殿参	三夫女房衆所持被申候紀伊国之御道者をめぐって福井と中山勝大夫が争論。福井の勝訴。	「長野友秀下代連署裁許状」(『三重県史』資料編中世2「上部文書」所収、159頁)。なお、作成年に關しては、日向政成の在職時期(慶長八年～同十三年)と、干支から推定した。
5 (慶長8～13年)12月16日	1603 ～ 1608		長野内蔵允判・日向半兵衛判	中津与兵衛殿	一志郡内宮古村御師職をめぐって中津と内宮作所が争論。中津の勝訴。	神宮文庫所蔵「御師職古文書(古文書之写)」(圖書番号1門7404号)収録。作成年に關しては、日向政成の在職時期(慶長八年～同十三年)から推定した。
6 慶長20年乙卯2月27日	1615		長野内蔵允御判・日向半兵衛御判	福岡弥五右衛門殿	但馬之國郡谷之長殿御師職をめぐって福岡と幸田孫兵衛が争論。福岡の勝訴。	神宮文庫所蔵「永禄五年道者売渡証文写」(圖書番号1門5668号)収録。
7 元和6庚申年3月26日	1620		水谷九左衛門御名乗御判・山岡圖書頭御名乗御判	幸福内匠殿参	紀伊国荒川庄嶋村并神田村旦那をめぐって幸福と慶徳主馬が争論。幸福の勝訴。	前掲「三方会合所引留」収録。
8 寛永5戊辰 10月6日	1628	D	三方判・判・判	三頭又左衛門とのへ	赤座土佐守殿御師職をめぐって三頭と西村八郎兵衛が争論。三頭の勝訴。	「赤座土佐守の師職につき山田三方裁許状写」(『三重県史』資料編近世2「山田三方宛古文書写」収録、939頁)。

もとで実施されていたことがわかる。文面に「其方と上大夫肥前国紛之儀、被_レ為_二批判_一候、其方被_レ申様尤候間」とあることから、御師の主張（被_レ申様）をもとに裁定を行っていたことが窺われる。

ただし、この北畠氏のみを裁定主体とする理解には問題が残る。

それは当該期（天正五年閏七月）に山田三方も裁判を実施していた形跡（12）が確認できるからである。従って、二通りの推測が可能である。

①北畠氏と山田三方のそれぞれが裁判を行っていた。あるいは、山田三方の裁判で解決できなかった場合、北畠氏へ上訴され、同氏の手による裁判が実施された。

②天正五年閏七月以降のある時期に、山田三方による裁判が停止され、北畠氏によって単一に裁判が行われるようになった。検討する材料が不足しており、ここでは右を提示するにとどめておく。

なお、この時期以前の裁判については、西山克氏の指摘（13）や、伊藤裕偉氏による北畠氏の都市（山田）支配に関する見解（14）から推測すると、山田三方の手によって裁判がなされていたものと考えられる。

（B）豊臣氏政権期（天正十二年～慶長八年）

当該期間は、天正十二年六月から徳川氏の影響下に入る慶長八年

五月（15）までを想定している。ただし、No. 2とNo. 3の発給者が相違していることから明らかなように、厳密には二期（前期・後期）に分けることができる。

前期は、天正十二年六月に蒲生氏が南伊勢を領するようになり、その家臣である町野重仍と、豊臣氏の御師であった上部貞永によって支配がなされた時期である（16）。その下限は、天正十八年（一五九〇）八月に蒲生氏が移封し（17）、さらに上部が没する天正十九年五月（18）までと考えられる。

注目すべきは、裁判において山田三方が果たす役割が明示されたことである。天正十二年十二月四日付で上部・町野が山田三方宛に出した「覚 条々（19）」の四か条目には、

一、可_レ被_レ相_二守故実法度_一、於_二論所対決_一者可_レ為_二三問三答_一、但於_二此上_一茂相紛義在_レ之者、秀吉様江得_二御意_一、可_レ為_二御錠次第_一事、

付、参宮之人宿等出入之儀者、猶以地下中江相尋可_レ為_二順路_一事、

とある。すなわち、旦那争論については、「地下中」つまり、山田三方に諮問する方式が定められたことがわかる。また、天正十五年八月日付の豊臣秀吉が町野・上部宛に発給した「定（20）」の四か条目にも、

一、宮川内地下人公事事等出来之時、兩人ニ申聞、於ニ相紛一者、

山田三方年寄共一同罷上、可レ致ニ言上ニ事、
付、諸座并大工、
所被ニ相破ニ事

と見えており、山田三方の意見が、「宮川内地下人公事事等」を裁定する上で重視されていたことが窺われる。

右から、山田三方は、町野と上部からの諮問に答える役割を担うことになったと考えられる。このことから、少なくとも当該期以降、山田三方は裁判権を失っていたものとみて大過ないであろう。

また、上部自身が山田三方の年寄家である上部氏の出身であり、御師であつたことを重視するならば、このように山田三方の関与が敢えて指示されたことは、上部だけでは手に負い兼ねるほど御師間の慣行が複雑であり、「参宮之人宿等出入」が煩雑な争論であつたということを実に示しているといえよう。

また、天正十七年五月十九日付で「置目条々(21)」が定められていることも見逃せない。

置目条々

一、諸国御参宮衆本宿へ者かくしをき、町方にてはたこ同ク宿仕候者、本宿被ニ聞出ニ可レ被レ仰候、急度相尋可ニ申付ニ候事、

一、諸国御檀那本宿無ニ合点ニ為ニ私とニ申合、物をかし御宿申者於レ在レ之者、改ニ嚴重ニ可ニ申付ニ、押而代物かし申候

ハ、かしそんたるへき事、

一、船江之御道者右同前之事、

以上

上部越中守

天正十七

貞永判

五月十九日

町野左近助

重仍判

一か条目に「本宿」とあるのは、参宮者と師旦関係にある御師家を指すと捉えられ、これは、その御師家が持つ権利（旦那が参宮した場合、独占的に止宿先となることのできる権利）への侵犯を禁じたものであると理解することができる。従つて、当該期より御師家の権利関係に対し、公権力が保護・統制を行うようになったといえる。

後期は、天正十九年五月以降、伊勢国内で所領を有する豊臣系大名とその下代によつて支配が行われた時期で、下限としては、徳川氏の支配下となる慶長八年（一六〇三）五月までと考えられる。

この時期に「奉行」として支配を行った豊臣系大名とその下代について比定しておく。天正二十年二月二日付で、鮎屋半四郎吉定が「今社之御師子」をめぐつて太郎衛門尉と争つた際に作成した申状の宛所をみると、「御奉行御両三人様 参」となっている(22)。こ

のことから複数の奉行が存在していたことが確認できる。「氏晴神主引付」に載せる文禄三年（一五九四）正月吉日付「内宮解」の注記をみると、岩出城主の稲葉道通・亀山城主の岡本良勝・松坂城主の服部一忠を「伊勢三奉行衆」としており⁽²³⁾、彼らが伊勢国の奉行を務めていたことがわかる。そして、それぞれの下代としては、「文禄検地沙汰文」の記述⁽²⁴⁾から岡部右兵衛尉・大原与右衛門・林助左衛門と考えられる⁽²⁵⁾。ただし、服部は文禄四年七月に豊臣秀次に連座して改易となっており⁽²⁶⁾、このため、新たに松坂城主となった古田重勝が奉行に加わったものと推定される。従って、No. 3の発給者として連署する武藤彦左衛門尉は古田氏の下代とみて大過ないであろう⁽²⁷⁾。なお、岡本は慶長五年九月の関ヶ原の戦いで西軍に与したため改易となり、その後は、稲葉・古田によって支配が行われた⁽²⁸⁾。

特色としては、法規などが制定された形跡が確認できないことが挙げられる。これは前述の前期と大きく異なる点であって、支配の面で消極的な印象を受ける。あるいは、宮川以東の地域が文禄三年十一月十六日付の豊臣秀吉朱印状において伊勢神宮の「敷地」とされ⁽²⁹⁾、神宮領と位置付けられたことが関係しているのかもしれない。

（C）徳川氏政権期（慶長八年～元和九年）

当該期間は、慶長八年五月から、山田三方へ裁判権が移った元和九年十月までを想定している。慶長八年九月九日付で徳川家康から朱印状⁽³⁰⁾が発給されていることから明らかなように、新たな政権の担い手となった徳川氏の影響下のもと支配が実施されている。実際に支配を行ったのは、江戸幕府の国奉行とその下代であって⁽³¹⁾、No. 4は長野友秀・日向政成の下代である中村定成・三崎正以、No. 5・6は国奉行の長野・日向、No. 7は同じく国奉行の水谷光勝・山岡景政が裁許状を発給している。

ここで特筆すべきは、「御師職式目之条々」の成立である。これは慶長十年十二月吉日の成立で、その内容としては、師旦関係に関する慣行を成文化したものである⁽³²⁾。長野友秀・日向政成は、同年十一月二十二日付で次のような指示を行い、山田三方に作成を命じている⁽³³⁾。

一筆申入候、仍山田諸国旦那式出入、各へ相尋候へハ、事不^レ行候間、先規より有来候通、懇ニ被^レ成^ニ式目ニ、三方衆連判ニ而、此方へ渡可^レ被^レ置候、以来、道者出入在^レ之ハ、任^ニ式目ニ可^ニ申付^一候、（後略）

つまり、（B）期で見たような山田三方に意見を諮問して裁判を行う方式が否定され、「御師職式目之条々」に基づいて裁定を行う方式への転換が図られたといえる。

この理由としては、同年七月に久保倉氏と三日市氏との間で争論が起きていることに注目したい⁽³⁴⁾。すなわち、従来の方式では、三日市氏などのように山田三方の年寄家が争論の当事者であった場合、山田三方内で意見が相違したりして、機能不全に陥ることが想定される。つまり、長野・日向が「各へ相尋候へハ、事不_レ行候間」としているように、この方式では個々の意見に頼らざるを得ず、彼らの恣意が介在する余地があったのである。

従って、江戸幕府は、山田三方に依存する不安定な裁判制度を忌避し、「御師職式目之条々」に基づき国奉行が裁定を下す安定した制度の確立を志向したと考えられる。しかし、後述するように、No. 7に挙げた幸福内匠と慶徳主馬の争論は、水谷・山岡による裁定を受けても解決しておらず、このような新たな裁判のあり方は失敗に終わったと評価せざるを得ない。

(D) 山田三方自治期（元和九年）

当該期間は、元和九年十月以降を想定している。この時期は、No. 8を見れば明らかのように、山田三方の手によつて裁判が行われている。

その開始は詳らかではないが、左で述べる「覚（五力條之窺書）」に見える「起請」を山田三方が元和九年十月六日付で行っており（次節で詳述）、これを起点として山田三方による裁判が始まったものと

考えられる。寛永元年（一六二四）十月六日付で御巫平左衛門が「長谷川左兵衛殿御舍弟忠兵衛殿」との師旦関係などをめぐって、御巫味右衛門を訴えた山田三方宛の訴状⁽³⁵⁾が確認でき、少なくとも寛永元年十月以降には、裁判を行うことが可能な体制が整っていたと見ることができる。

では、山田三方へ裁判権が委譲された経緯とその理由は如何なるものだったのだろうか。元和十年（一六一五）二月二日付で山田三方から江戸幕府の年寄に出された「覚（五力條之窺書）」⁽³⁶⁾を見ると、三か条目に、

- 一、御師職出入之義を三方として裁許可_レ仕之由、去年於_二京都_一被_二仰下_一候、無調法之者共如何_二存候_一へ共、御意難_二黙止_一、其_レ上先規法式之旨_二被_二仰付_一忝存、無_レ所_レ曲様_二各起_一請を致し御師職出入裁許仕候、起請之前かき乍_レ憚さし上申候、

とある。ここから、元和九年の徳川秀忠・家光の上洛の際に、「御意」によつて委譲が命じられたことがわかる。これに関しては、寛永元年三月六日付で年寄が、「覚（五力條之窺書）」の返書として山田三方へ与えた「覚⁽³⁷⁾」の二か条目に、

- 一、松前志摩守御師職事、去年於_二二条_一如下被_二仰出_一候上、山田三方年寄共として古来のことく弥可_二沙汰_一、紀州神田

村・嶋村御師職之儀も可_レ為_二右同前_一事、

とみえ、二つの争論が原因となっていたことが読み取れる。一方は、三日市大夫次郎と五文子屋庄左衛門の「松前殿御師職」をめぐる争論で、他方は幸福内匠と慶徳主馬の「紀州神田村・嶋村両在所」をめぐる争論であった⁽³⁸⁾。

両争論においては、裁定を行うべき国奉行が不在となっていたため、山田三方が「せんさく」を行い、その意見をもとに江戸幕府の年寄が裁定を下すという方式が採られていた⁽³⁹⁾。しかし、両争論ともに難航しており、特に後者については、慶長年間から争いが続き⁽⁴⁰⁾、No.7の水谷・山岡による裁定でも終息しておらず⁽⁴¹⁾、泥沼化の様相を呈していたといえる⁽⁴²⁾。

右のような状況を踏まえるならば、委譲の背景には、(B)期で指摘した御師間慣行の複雑さと旦那争論の煩雑さがあったと考えられる。江戸幕府は、(C)期で山田三方の排除を試みたものの、これらのために、裁判の運営に支障をきたしてしまい、結局、山田三方へ一任する方式に転換せざるを得なくなったと捉えることができよう。以降、山田三方が裁判を行うことが定着し⁽⁴³⁾、次節で検討するような制度整備が実施されてゆくことになるのである。

ここまですべてまとめておく。従来の研究では、山田三方の手による裁判が、中世から近世へと間断なく連続しているものと捉えられて

きた。しかし、本節における検討の結果から、少なくとも天正十二年六月から元和九年十月の間、山田三方が裁判権を喪失していたことが明らかとなった。そして、その間において裁判の方式に変遷があったことを浮き彫りとした。また、江戸幕府からの裁判権の委譲に関しては、御師間慣行の複雑さと争論の煩雑さが背景にあったことを指摘した。

二 山田三方による裁判制度の整備

前節では、旦那争論の裁判のあり方について裁許状をもとに考察を行ってきた。本節では、(D)期において山田三方で実施された制度整備の過程を見てゆく。

まず、山田三方への裁判権の委譲に際して、山田三方が元和九年(一六二三)十月六日付で作成し、江戸幕府に提出した「御師職諍論以上意一任二先規法式一就二理非決断一起請事」⁽⁴⁴⁾「(一)」の内容を確認しておく。

御師職諍論以上意一任二先規法式一就二理非決断一起請事
一、於二理非裁判一者不_レ可_レ有_二親疎一、不_レ可_レ有_二好悪一、所_レ寄_二存知一之理非、不_レ殘_二置心中一可_レ出_レ詞事、

一、愚暗之身依_二分別之不_レ及旨趣相違之儀申出者非_二心之所_レ曲事、

一、裁断之旨叶^二道理^一則一同之憲法也、又誤雖^レ行^二非道^一一同之越度也、然者相^二向訴人并其縁者等^一自身者雖^レ存^二其方道理^一、会合之中其人^一之申様致^二違乱^一申儀不^レ可^レ有^レ之事、
一、雖^レ為^二誰之親類・縁者・知音・従者^一、若有^二曲事^一則可^レ為^二其沙汰^一、向後不^レ可^レ有^二遺恨^一事、
一、裁判之日不^レ参^二之事、難^レ去依^二所用^一、且於^二病氣^一者可^レ為^二免除^一矣、雖^レ然或少用号^二大儀^一或構^二虚病^一、自由之不^レ参不^レ可^レ有^レ之事、

右之條々雖^二一事^一公事致^二裁判^一間、若令^二違犯^一者、
梵天・帝釈・四大天王・惣日本國中六拾余州大小神祇・
八幡大菩薩・春日大明神・熊野三所権現・天満大自在天神部類眷属、神罰・冥罰各可^二罷蒙^一者也、仍起請文如^レ件、

敬白

元和九 癸亥 年拾月六日

旦那争論について、先規法式に則り裁判を行う旨が誓約されたことがわかる。下敷きとなっているのは、「御成敗式目」の「起請」部分(45)であつて、いずれも公正な裁判を行つてゆく上で不可欠な事項が挙げられているといえる。

注目すべきは一・四か条目である。前節の(C)で述べたように、江戸幕府は、年寄たちの恣意が裁判に介在し、裁定に影響を及ぼすことを警戒しており、この二つの箇条はその自制を誓うものであると考えられる。この起請によつて、裁判を運営し、裁定を行う上で準拠すべき規範が確立されたと評価できよう。

第二に、寛永三年(一六二六)六月七日付で山田三方が作成し、山田奉行の中川忠勝から承認を得た「覚(46)」「(四)」を挙げる。

覚

一、旦那公事穿鑿の場にて対^二三方人^一悪口之事、
付、あいて双方悪口申、穿鑿のさハリニなし我まゝ申者之事、

一、公事落着之上非分の者旦那まハリいたし、又者神物取候事、
付、公事落着三方より申付候処、承引不^レ仕とかく申ものゝ事、
敬白

一、公事落着不^レ申内ニ三方相談の下知を得ず為^レ私旦那まハリいたし、又者神物取候事、但公事の様子ニより相談可^レ有^二事^一、

一、公事落着無^レ之内ニ非分を存候ニよつて御道者と調略いたし、借金させ内宮へつけ候事、

一、出入の御道者参宮之時俄落着難^レ成ニ付、三方より先当座

の異見にてしつめ候を承引不_レ申者之事、

一、出入之道者参 宮之時、三方より異見申内二道者を下向させ申候事、

一、人数を出シ御道者をとめ候事、

一、一向いはれさる公事申かけ候者の事、

但、軽重可_レ有事、

一、公事人何かとかこつけを申、批判場へ不_レ出ものゝ事、

一、御道者はたこ致し候事、

一、此外旦那公事法度をそむき候者の事、

以上

寛永三

六月七日

三方印

進上

中川半左衛門様参

右之条数之者於_レ在_レ之者、從_二其人_一其科之從_二輕重_一、或籠者或所を払、又者過錢急度可_レ被_二申付_一候、以上、

六月七日

中川半左衛門御判

この「覚」は十一か条から成っており、すべて公事人に関する内容となっている。これにより、裁判当事者に対する規定が整備され

たものと捉えておきたい。特に重点が置かれているのは、争点となっている旦那と御師との往来の禁止であつて(三〇七か条目)、裁判中は師旦那関係が一時的に停止されたことがわかる。二か条目において、裁定後に敗訴となつた御師による「旦那まはり」と「神物取」の禁止が敢えて明記されていることを考え合わせると、御師と旦那との結びつきが極めて強く、裁判中は、これに対して注意が払われたことが窺われる。

また、十一か条に「旦那公事法度」と見える。これが如何なるものであるのか定かではないが、その名称から、旦那争論に関する内容であると推定され、寛永三年六月以前に、既にこのような法規が存在していたことになる。

第三に、寛永十八年(一六四二)九月二十六日付の「起請事(47)」(目)を挙げる。

起請事

一、三方会合諸事評定事、不_レ存_二依怙_一不_レ構_二臆_一宜_レ任_二道理之旨_一也、雖_レ然為_レ世為人、各以_二吟味_一隨時之宜可_レ有、加_二了簡_一義是亦可_レ為_二憲法_一之條更非_二心之所_一曲事、付、愚闇之身依_レ不_レ及_二分別_一旨趣相違之儀者最_レ不_レ苦事、一、三方相談之事、強雖_レ顯_二誰人之惡事_一敢不_レ可_レ存_二遺恨_一、是所_二以無_一好惡也、縱雖_レ及_二何程之荒言_一聊不_レ可_レ有_二

宿意^一、是以無^二親疎^一也、但互可^レ慎^二過言^一事、

一、三方密談之事、聊不^レ可^二他言^一矣、但令^レ聞^二他人之口上^一所用有^レ之時、或自身伝舌之^(ママ)、或使者免^二許之^一、是等最可^レ為^二各別^一事、

一、三方評定之趣縱雖^レ叶^二道理^一一同之憲法也、誤雖^レ有^二僻事^一一同之越度也、然則相^二向外人^一而、或云^二他人糺謬^一或云^二自身之名譽^一、是既非^二一味之義^一甚以黒心也、堅不^レ可^レ出^二言之^一事、

一、三方と他所相論事并若蔑^二如三方^一者出来之時、旁不^レ勞^二親類・縁者^一不^レ顧^二知音・從者^一、三方之儀可^レ然之思案・助成之才覺頗可^レ励也、但相談之上依^レ人随事加^二用捨^一、又以^二了簡^一調^二無為^一者可^レ為^二各別^一事、

右之條々若令^二違犯^一者辱

上者梵天・帝釈・四大天王・炎魔法王・五道冥官・秦山府君、下界者王城鎮守稻荷・祇園・加茂・春日・八幡大菩薩、別而熊野三社大権現・富士白山妙理大権現・伊豆箱根両所権現・三嶋大明神、惣日本國中六拾余州大小神祇・天満大自在天神、神罰・冥罰部類眷属可^二罷蒙^一者也、仍起請文如^レ件、

敬白

于^レ時寛永十八^{辛巳}年九月廿六日

付、依^二裁断^一会合之密談尤不^レ可^レ有^二他言^一、雖^レ然令^レ聞^二他人之口上^一有^二取用^一者可^レ随^二其相談^一事、

元和九亥年拾月六日

右起請前書之内也、

これは、山田奉行である石川正次の着任に備えてまとめられたものと考えられ⁽⁴⁸⁾、山田三方の評議について詳しく取り決められている。末尾の「付」の部分は、元和九年十月六日付の「御師職諍論以^二上意^一任^二先規法式^一就^二理非決断^一起請事^一」へ追加する箇条として記されたものであろう。従って、この評議も裁判に関連するものとして理解しておきたい。

第四に、寛永十八年年十月八日付で成立した「当地御奉行所江就^二申上儀^一起請之事⁽⁴⁹⁾」(LV)を挙げる。

当地御奉行所江就^二申上儀^一起請之事

一、訴訟人之儀、縦雖^レ為^二親類・縁者・知音・從者之事^一、無^二依怙・量負^一万事有様之旨可^二申上^一、但依^レ事随时宜^レ令^二遠慮^一、不^二出言^一義者格別之道理也、最不^レ苦事、

一、誰之善惡雖^二申上^一、親疎・好惡之差別無^レ之上者、毛頭不^レ可^レ有^二遺恨^一事、

一、愚暗之身不^レ及^二分別^一故、亦依^二失念^一旁旨趣相違之義者勿論非^二心之所^レ曲事、

右之條々雖^レ為^二一事^一、令^二違犯^一者

敬曰天起請文之事、

上者梵天・帝釈、下者四天王・惣者日本国六拾余州大小神祇、
別者王城鎮守・熊野三所權現・春日大明神・住吉・日吉・賀
茂下上・松尾・平野・伊豆・箱根兩所權現・三嶋大明神・八
幡大菩薩・天満大自在天神部眷屬、若雖^二一事^一存^二曲事^一令^二
違犯^一者、神罰各々可^二罷蒙^一者也、今生成^二白癩・黒癩^一受^二
短命・七難^一、尤於^二來世^一者可^レ墮^二無間地獄^一者也、仍而起
請文如^レ件、

于^レ時寛永拾八年^{辛巳}年拾月八日

つまり、

①訴訟人については、たとえ親類・縁者・知音・従者に関する
ことであっても、依怙最負せず有りのままに申し上げるべき
である。ただし、内容によっては適宜それを慎み、上申しな
いことも格別の道理である。

②誰の善悪を申し上げることになっても、親疎・好悪の差別は
あつてはならないことなので、遺恨を持つてはならない。

③考えが及ばないことや、失念によって上申の内容が相違して
しまつても、それは悪意によるものではない。

となる。従つて、山田三方が公正に山田奉行所へ上申を行うことが
取り決められたことがわかる。

ここまで裁判制度の整備について概観してきた。それぞれの成立
時期をみると、(一)が元和年間の末年で、それ以外の(二)～(五)
が寛永年間であることに気付く。従つて、制度整備は、裁判権の委
譲後、寛永年間に集中して行われたと指摘できる。

最後に裁判制度の水面下で機能していた内済に関しても触れてお
きたい。前節では旦那争論の裁判のあり方について裁許状をもとに
検討を行った。改めて気づかされるのは、確認できる裁許状の少な
さである。これは元和九年十月以降も同様であつて、残存状況の問
題を勘案しても少なく、やはり裁判自体が実施されなかったことを
意味していると考えざるを得ない。そして、その理由として想定さ
れるのが、内済(50)による解決である。

左の証文は、元和元年十一月六日付で大主宗勝が作成したもので
ある。

越前之国一乗之山崎殿御師職之儀、貴殿と我等出入雖^レ有^レ之、
福嶋出雲守・谷左馬助殿・三頭源兵衛殿御あつかひを以、山崎
殿御師職ハ其方へ相渡し申候、然上者御一類共ニ末代ニ至リ我

等申分無^二御座^一候、仍為^二後日^一如^レ此候、

大主又左衛門尉

元和元年十一月六日

宗勝（花押）

（切断のため後欠）

大主と某氏との間で「越前之国一乗之山崎殿御師職」の帰属をめぐる争論となっていたが、福島出雲守・谷左馬助・三頭源兵衛の「御あつかひ」によって内済が成立したことが読み取れる（51）。

次に寛文元年（一六六一）閏八月の三頭近周と為田家政との争論の例を挙げておく。これは「越前之国之御道者」をめぐるもので、三頭は同月六日付で山田三方への訴状を作成した。しかし、二見勘三郎・幸田源内・谷弥一右衛門・谷一郎大夫の「御口入」によって内済となった（52）。

さらに、外宮長官（松木満彦）の「異見」によって解決した例も存在する。これは延宝七年九月から十一月にかけて広田正令と中西常貞の間で起きた争論で、論点となったのは「信州旦那所夜交・うき・横倉三ヶ村」の帰属である。「旦那出入二付起請仕三方会合へ差遣之由」を聞いた外宮長官は、「当月九月と申於^二当地^一ヶ様之義不^レ宜儀」と考え、両者へ「祭礼過迄延引之旨」を申し入れ、起請を延期させた。すると、「此末も何卒双方へ御異見被^レ仰被^レ済候様」と山田三方から願ってきたので、外宮長官は両者に「異見」を行い、

それに基づく形で落着した（53）。

このように、第三者の調停を受けて内済を図るという解決方法が確認でき、鳥居前町において広く一般化していたものと推量される。

おわりに

本章では、近世前期の山田三方と旦那争論について、裁判権の所在と裁判の制度整備を中心に考察を行ってきた。内容を簡潔にまとめておきたい。

第一節では、確認できる裁許状への検討から裁定主体に変遷があることを明らかにした。そして、これにより判明したのは、山田三方による裁判が実施されていない時期があり、裁判を行う権限は江戸幕府から委譲されたものであったという事実である。また、いくつかの時期において、裁判の方式に関して、様々な形が模索されたことも浮き彫りとなった。そこで課題となったのは、旦那争論の特殊性であり、このことが江戸幕府から山田三方への裁判権の委譲をもたらすことになったと考えられる。

第二節では、裁判権が委譲された後における裁判制度の整備過程について検討した。この結果から、制度整備が、委譲以降、寛永年間に集中して行われていることを示すとともに、公正な運営の実現に主眼が置かれていたことを明らかにした。冒頭で触れた千枝氏の

「近世自治機能の確立」期を寛永年間とする指摘は、裁判制度の整備面からも裏付けることができるといえる。また、裁判制度の水面下においては、内済という解決方法が存在し、広く機能していたことを指摘した。

残された課題としては、宇治会合の制度整備が如何なるものであったか、という問題が挙げられる。このことに関しては、近世前期における宇治の御師集団の動向を踏まえ、他稿を期したい。

- (1) 例えば、豊田武『増訂 中世日本商業史の研究』（岩波書店、一九五二年）など。ただし、同書は増訂を加えたもので、初出は『中世日本商業史の研究』（岩波書店、一九四四年）。
- (2) 瀧川政次郎『山田三方並に宇治会合所に就いて』（神宮司序、一九五〇年）。
- (3) 西山克『道者と地下人―中世末期の伊勢―』（吉川弘文館、一九八七年）。
- (4) 飯田良一「中世後期の宇治六郷と山田三方」『三重県史研究』七号、一九九一年）。
- (5) 千枝大志「伊勢山田における地域特性の形成とその変容」『中近世伊勢神宮地域の貨幣と商業組織』所収、岩田書院、二〇〇一年）。
- (6) このように「自治」の様相とその性格に関心が集中したのは、網野善彦氏によって『無縁・公界・楽―日本中世の自由と平和―』（平凡社、一九七八年）が発表され、その中で「公界」の事例として山田三方が取り上げられたことによるところが大きい。
- (7) 千枝大志「三方会合成立期の様相」（伊勢市編『伊勢市史』第三卷近世編、伊勢市、二〇一三年）。
- (8) 近世の山田三方については、太田未帆「会合所の機能」（前掲『伊勢市史』第三卷近世編）に詳しい。
- (9) 「申上候条々」（神宮文庫所蔵、図書番号一門一八六〇五号）。以下、本章で使用する史料は、特に断らない限り、すべて神宮文庫の所蔵である。
- (10) 西山克氏は、天正元年十月には、織田信雄は既に北畠氏当主の地位にあったと指摘している（前掲『道者と地下人―中世末期の伊勢―』、二二六―二二七頁）。
- (11) 藤田達生「織豊期の北畠氏―南伊勢支配を中心に―」（藤田達生編『伊勢国司北畠氏の研究』所収、吉川弘文館、二〇〇四年、五二―五三頁）。
- (12) 閏七月六日付で「今度相論下地之義」について北友親・蔵田国貞など六名が榎倉新九郎・同弥平次宛に出した「北友親等連署裁許状」（『三重県史』資料編中世1《下》「輯古帖」収録、三重県、七七六頁）が存在する。西山克氏は、これを天正五年（一五七七）に発給されたものとし、「三方に繫属された訴訟に対し、公式に調停案を提示する公文書」であるとしている（前掲『道者と地下人―中世末期の伊勢―』、九六頁）。
- (13) 西山克氏は、山田三方が「民事を含む在地裁判の権限」を確保した時期を「遅くとも文明十年代の前半」と推測し、さらに、三方黒印状への検討から「文明末年から明応初年にかけて、三方は戦国期の都市行政の担い手として、十二分な強権とともに

立ち現れた」と指摘している（前掲『道者と地下人―中世末期の伊勢―』七七〜八五頁）。

（14）伊藤裕偉氏は、北畠氏が「山田在住商人と個別の関係を形成していたこと」をもとに、「山田という都市を直接支配するのではなく、内部構成員の一部を人頭支配して間接的に関わっていた、と見られる」としている（『地域構造における領域支配と拠点の位相―北畠氏領域と多気の場合―』、前掲『伊勢国司北畠氏の研究』所収、九六頁）。

（15）高木昭作氏は、慶長八年五月吉日付世古坊護状に長野友秀・日向政成が奥印を加えていることから、「両者ともに慶長八年には、神宮ないしは伊勢の訴訟を担当する地位にあったことが推測される」としている（『幕藩初期の国奉行制』、『日本近世国家史の研究』所収、岩波書店、一九九〇年。初出は『幕藩初期の国奉行制について』、『歴史学研究』四三一号、一九七六号）。従って、少なくとも慶長八年五月には、鳥居前町とその周辺地域は、徳川氏の影響下にあったものとみて大過ないであろう。

（16）町野重仍と上部貞永について、窪寺恭秀氏は「近世の山田奉行の前身と位置付けても良いのではないだろうか」と指摘している（『伊勢御師の成長』、伊勢市編『伊勢市史』第二卷中世編、伊勢市、二〇一一年、六八七頁）。

（17）『国史大辞典』の高木昭作執筆「蒲生氏郷」項（国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』三卷、吉川弘文館、一九八二年）。

（18）『考訂度会系図』の「上部越中家系」（神宮古典籍影印叢刊編集委員会編『神宮古典籍影印叢刊』⁵⁻¹ 神宮禰宜系譜）所収、皇學館大学）。

（19）『御師職古文書（古文書之写）』収録（一門七四〇四号）。

（20）『豊臣秀吉朱印状』（『三重県史』資料編中世2、三重県、四四頁）。

（21）前掲『御師職古文書（古文書之写）』収録。

（22）『鮮屋吉定申状』（前掲『三重県史』資料編中世1《下》「輯古帖」収録、七一九頁）。

（23）『氏晴神主引付』（『三重県史』資料編中世1《上》、三重県、九九五頁）。稲葉道通・岡本良勝・服部一忠については、高木昭作監修・谷口克広著『織田信長家臣人名辞典』（吉川弘文館、一九九五年）を参照。

（24）『文禄検地沙汰文』（『三重県史』資料編近世1、三重県、五七〜三七七頁）。

（25）例えば、天正二十年二月五日付で大原与右衛門・岡部右兵衛尉・林助左衛門が北監物に「今度かまや善左衛門と浦田地下中と借錢之申事」について「其方被_二申分_一」理運_二被_二聞召分_一候」

旨を伝える裁許状が存在する（「京都大学所蔵来田文書一《写真版》」収録、一門一五〇九〇号）。

（26）前掲『織田信長家臣人名辞典』。

（27）直接の証左は確認できないが、寛文六年（一六六六）三月七日に七十九歳で没した外宮権禰宜松木盛彦の談話集である「松木盛彦細談」（一門七四七八号）において、「一、両宮奉行」の項に、稲葉道通とともに「古田兵部 松坂 下代彦左衛門」とみえる。「松木盛彦細談」については、『二宮叢典 前篇』（吉川弘文館、二〇一三年）の「貞次話記抄・盛彦細談抄」解題を参照。

（28）「今度成願寺定福院跡目之義」を「りやうこん」と太郎館氏が争った一件について、岡部右兵衛尉と武藤彦左衛門尉が太郎館氏に発給した慶長七年十二月二日付の裁許状が確認できる（「太郎館家旧蔵資料」所収「（定福院跡目之儀に付裁許状）」、一門二〇五六五の四二三号）。

（29）「豊臣秀吉朱印状」（前掲『三重県史』資料編中世1《下》、九八六頁）。

（30）「徳川家康朱印状」（『三重県史』資料編近世1、三重県、七八九〜七九〇頁）。

（31）近世前期の国奉行制については、前掲「幕藩初期の国奉行制」

を参照。国奉行による鳥居前町とその周辺地域に対する支配については、上野秀治「山田奉行の設置と奉行所機構」（前掲『伊勢市史』第三巻近世編）を参照。

（32）詳しくは、前掲「近世三方会合の確立」（一八四〜一八八頁）を参照。

（33）「長野友秀・日向一成連署書状（折紙）」（前掲『三重県史』資料編中世1《下》、三四三頁）。

（34）前掲「申上候条々」。当史料は、慶長十年七月五日付で久保倉氏の内衆である丹藏次郎兵衛ら二名の名前で長野友秀・日向政成宛に作成されており、その内容から三日市氏に対する返答書（写し）であると考えられる。

（35）「輯古帖」収録（一門一〇七五三号）。当史料は、写真版（一門一五〇四七号）を閲覧した。

（36）「古法書」収録（一門一五三一一号）。当史料は、内題に「御代々様御朱印之写・御朱印御文言ニ附差上候書面写・御神領伊勢山田古法旧例後鑑書面写」とあって、歴代將軍からの朱印状や、鳥居前町（山田）に関する法規・先例などを集めたものであると考えられる。その内容から山田三方の内部で作成されたものとみて大過ないであろう。安政二年九月十一日付の徳川家定の朱印状を「御当代様御朱印写」としていることから、家定

が將軍であつた嘉永六年（一八五三）～安政五年（一八五八）の間に成立したものと推定される。ただし、「御神領伊勢山田古法旧例後鑑書面写」の部分は、山田三方年寄であつた久保倉弘毅が寛政十一年（一七九九）四月に著した「諸例綱目集成」（一門二九六号）において、「子細ハ古法旧例後鑑ニ委有レ之」などといった形で言及しており、成立が寛政十一年四月以前に遡る可能性がある。

- (37) 「山田の支配につき幕府老中奉書写」（『三重県史』資料編近世2、三重県、九三八頁）。なお、本紙裏の継目には、酒井忠世・土井利勝・井上正就・永井尚政の印が捺されていたとされる（「日向一成書状」、前掲『三重県史』資料編中世1《下》、三四二～三四三頁）。

(38) 前掲「古法書」収録「覚（五力條之窺書）」。

(39) 同右。

(40) 日向政成が三月二十四日付で幸福内匠に対し、「貴殿と慶徳主馬助出入之儀」について、「無_二別条_一相済候間、可_二御心易_一候」旨を報じた書状が確認できる（「三方会合引留」収録、一門三五六〇号）。日向の在職期間が慶長八年～慶長十三年であることから（前掲「山田奉行の設置と統治」、八三頁）、この間に争論が起きたものと考えられる。

(41) 土井利勝・嶋田利正・板倉重宗は元和九年八月二十九日付で幸福内匠へ「先年於_二江戸に_一聞候けいとく主馬と其方公事之儀、可_二申付_一候間、早々可_二罷上_一」旨を命じている（前掲「三方会合引留」収録）。

(42) 三日市大夫次郎と五文字屋庄左衛門との争論においても、敗訴した五文字屋が裁定を不服として再び訴訟を試み、闕所・追放処分となっている（前掲「諸例綱目集成」の「師職出入之事」項）。

(43) ただし、寛政九年二年十二月に山田奉行の野一色義恭が行った町政改革によって、山田三方は裁判を行う権限を剥奪されてしまったとされる（太田未帆「寛政改革」、前掲『伊勢市史』第三卷近世編、一〇六～一二二頁）。なお、旦那争論以外の裁判についても山田三方が権限を有していたと考えられるが、これがいつ委譲されたかに関しては詳らかではない。或いは、旦那争論に対する裁判権と前後して委譲されたのかもしれない。

(44) 「三方起請之写一 旦那公事裁断付起請」（一門七九五三の一号）。

(45) 「校本 御成敗式目」（佐藤進一・池内義資編『中世法制史料集』第一卷、岩波書店、二八～三一頁）。

(46) 前掲「古法書」収録「覚」。

(47) 「三方起請之写二 三方会合諸事評定ニ付起請文」(一門七九五三の二号)。

(48) 花房幸次が寛永十八年四月十二日に没して以降、山田奉行は不在となっていたが、石川正次が寛永十八年十月に新しく山田奉行として赴任した(「外宮引付^{天明}」寛永十八年十月条、一門四一四四号)。

(49) 「三方起請之写三 御奉行所江申上候ニ付起請文」(一門七九五三の三号)。

(50) 近世の内済については、大平祐一「内済と裁判」(藤田寛編『近世法の再検討―歴史学と法史学の対話―』所収、山川出版社、二〇〇五年)を参照。

(51) 「元和元年師職讓状」(「退蔵文庫旧蔵道者田畠屋敷沽券類」所収、一門一一五四五の四一号)。ただし、宛所の部分以降が切断されており、後に何らかの事情で反故となった可能性が高い。

(52) 「越前国道者ニツキ三頭文左衛門訴状」(「足代文書」所収、一門七九五八の一七号)。

(53) 「神宮編年記 満彦記」延宝七年九月四日条〜十一月二十六日条(一門一五九一三の一五八九号)。

第三章 神宮御師の連帯意識の萌芽について―「内宮六坊出入」を素材に―

はじめに

本章は、近世前期に争われた「内宮六坊出入」と呼称される一件の意義について、神宮御師集団に与えた影響という視座から考察するものである。

神宮御師に関する研究は、荻原龍夫氏⁽¹⁾や新城常三氏⁽²⁾が実態を素描した廻旦などの活動面を中心に進められており、近年では、久田松和則氏⁽³⁾・内田鉄平氏⁽⁴⁾・千枝大志氏⁽⁵⁾などによって、地域ごとの個別研究が着実に積み重ねられつつある。しかしながら、近世の御師集団のあり方の問題に限っては、多くの検討の余地が残されている。そこで以下を課題として設定したい。

伊勢神宮の鳥居前町(宇治・山田)に居住する御師たちは、神宮御師と一括りにいうものの、厳密には内宮御師と外宮御師に大別され、それぞれ別個の集団を形成し、両者の間には潜在的な対立も存在していた。そしてそれは、中世後期以降、個々の御師同士の争論を端緒として、度々表面化したとされる⁽⁶⁾。これについて西川順士氏は、内宮御師と外宮御師の争論が内宮・外宮を巻き込むものであったことを述べた上で、特に寛文年間の御祓銘をめぐる争論(両

宮御祓銘論)に注目し、当該期の御師をも包括した内宮・外宮の「集団の個性化」が、争いの背景となっていることを指摘している。そして、「師職争論やお祓銘論は内宮側外宮側双方から提起された問題点について、互にその個性を明らかにする、即ち両宮の本質を説明し、かつ批判し合った場であった⁽⁷⁾」と評価している。

ただ、斯かる関係が近世を通じて変化なく継続したという理解は正確ではない。例えば、天和年間(一六八一―一六八四)の帯刀をめぐる一件においては、両宮の御師たちが協力して帯刀の格式を希望し、結果、伊勢神宮の神職(祠官)として位置づけられ帯刀が許可された事例⁽⁸⁾が存在する。この事実を重視するならば、両宮の御師たちが連携して行動する場合があったと考えられ、また、その前段階においての、別個の集団であった内宮御師・外宮御師が御師であることを以って連帯し、自らを一つの集団として意識する契機があったことが想定される。しかしながら、このような視座からの検討は未だ行われていないのが現状であり、御師集団への理解を深めてゆくためには、右に挙げた同集団が伊勢神宮のなかに位置づけられる上での前提を探る作業が不可欠であると考ええる。

次に、考察の対象について述べておく。対象とするのは、「内宮六坊出入⁽⁹⁾」と総称される一件である。同一件は、伊勢神宮の膝下で生成した宗教者間(御師と山伏)の対立であるといえ、詳しくは

後述するが、慶安元年（一六四八）の三日市兵部と六坊との争いと、承応三年（一六五四）～明暦元年の宇治会合・山田三方と三か寺との争い、の二つの争論から成る。寛延二年（一七四九）に、駿河国駿東郡須走村の富士山御師たちと同村の百姓たちとが御師活動をめぐって争い、その過程で富士山御師たちが「仲間化Ⅱ集団化」を遂げ、身分確立を志向するようになったことを考慮すると（10）、同一件の経過をみてゆくことは前述の課題を考える上で有効であるように思われる。

この内宮六坊出入を扱った研究としては、上相英之氏と塚本明氏の論考が挙げられる。前者は、六坊の一つに数えられる明慶院の勸進活動の実態を探るなかで、その活動が御師集団の活動と衝突するものであったことを指摘するものであり（11）、後者は、近世の伊勢神宮領における神仏関係を考えるなかで、同一件で主張された内容をもとに、「仏家の者が神宮の御師として活動することを否定する論理を、神宮神官たちは持ち合わせていなかった（12）」という事実を指摘するものである。対して本章は、特に争論の経過に注目し、前述の視座から検討を行うことに主眼を置く。

以上をもとに、神宮御師の連帯意識の萌芽という問題について考察を進めてゆきたい。

一 六坊と三日市兵部との争論

ここでは、慶安元年（一六四八）に起こった山田（外宮鳥居前町）の御師三日市兵部（秀満）と宇治（内宮鳥居前町）に存在した六坊（明慶院・清水寺・法楽舎・明王院・成願寺・地蔵院（広厳寺））との争論を検討する。なお、六坊それぞれの所在は、明慶院が内宮宮域内の風日祈宮橋（以下、「風宮橋」と記す）の橋詰、清水寺が浦田町、法楽舎が中之切町、明王院（法楽舎の別院）が同じく中之切町、成願寺が浦田町、地蔵院が中之地蔵町、であったとされる（13）。

慶安元年十月十七日、三日市兵部は成願寺とその願人である南覚坊を山田奉行所へ訴えた。その際、左の内容の訴状が提出された。

一、古来相伝の旦那所である上野国へ成願寺の使僧と称する南覚坊という山伏がやってきて、当初の二・三年は「仏家祈禱之札」を配っていたが、その御札を「太神宮之御祓」に直して配るようになり、当年などは御祓や土産等を取調べ、私の旦那所へ残さず配ってしまった。この件については、旦那所の旦那衆も迷惑しており、辞退したけれども、脅し賺され、結局、山伏は御祓を配り、帳簿を付け、旦那衆に帳簿へ判をさせて、私の旦那をほとんど奪ってしまった。

二、寛永十二年（一六三五）に与えられた「御朱印」で「古来

相伝之旦那以^ニ才覚^一不^レ可^ニ奪取^一事」と両宮(内宮・外宮)へ定められ、両宮の御師はその旨を守ってきた。しかし、南覚坊の今回の所為は、古来相伝の旦那を奪い取るものであり、「御朱印」の趣旨に背くものである。また、これでは伊勢神宮の古法も破滅してしまい、私一身に限らず、「惣御師共」が迷惑することになる。

三、この「御朱印」に「当分参宮之族者両宮之内可^レ任^ニ其志^一」とあるが、これはあくまで当座の参宮者の事であって、山伏は、古来相伝の旦那をも奪い取っても差し支えないと邪まに考え、どのようなことを行っても、外宮の御師は文句を言わないとの存念でこのような驕った振舞いをしている。少々のことならば成願寺が考えるように堪忍するところもあるうが、「旦那職」のことは御師にとっての「懸命之所領」であるから許すわけにはゆかない。

四、先年も出羽国の私の旦那所へ法楽舎または成願寺の勧進の山伏がやってきて、御祓を配り、旦那を作ろうとしていたところに、私より吟味し、何連も証跡を取って旦那所を追い出したこともある。しかしながら、何方からも今まで一言の申し訳もない。

五、両宮の御師でさえ、互いに旦那を奪い取るような工夫はし

ないのが道理であるのに、成願寺の勧進の山伏がむやみに御祓を配り、御初尾を申し請け、他の旦那を心任せに奪い取るような作法が許されるべきことだろうか。これは偽山伏だろうと考えていたところ成願寺の使僧に紛れない旨を成願寺より聞かされ、驚き入るばかりである。

すなわち、三日市兵部は、自らの旦那所へ成願寺の山伏が御祓を配ったこと、その行為が朱印状(14)によって定められた内容に反するものであること、を訴えたのである。四・五において述べられているように、旦那との師旦那関係の安定・維持は個々の御師にとつての死活問題だったのであり、これを山伏に侵されたと三日市兵部は判断したのである。とりわけ、四において、「御師全体への損害にもつながる」と言及されていることに留意しておきたい。

山田奉行の石川正次は、この訴えを受理せず「両宮年寄江取扱可^レ申様被^ニ仰付^一(15)」として、宇治・山田それぞれの住民組織である宇治会合・山田三方(16)が争論を決するよう命じた。これは、この訴訟が御祓配りを焦点とするものであったため、相手方が山伏であるとはいえ、御師同士の争論の仲裁・裁決を行ってきた両組織(17)に任せるのが妥当であるという山田奉行の判断であると考えられる。

三日市兵部の主張に対して、成願寺を援護する六坊は同年十一月

二十三日付で左のような反駁する内容の口上書（18）を作成している。

一、六坊は、聖武天皇が南都の東大寺を創建してより後、神宮寺と号している。そして、この六坊は上古以来の法水を汲むものであり、日々、護摩供を修し、毎月の三句日の護摩供と御祓を捧げて再拝し、国家安全・五穀成熟の祈りを行う神宮倍增の法灯を掲げている。しかしながら、六坊は「無縁所」であるため、諸国へ僧を廻すことで、花灯明の助けとし、万民の施物を受けることで修造を行っている。このことは、往昔から今に至るまで私事ではない。

二、徳川家康の時代に、京都において伊勢の偽山伏が多くあるので、六坊より板倉勝重へ訴訟し、吟味の上、願人として勧進を許可する「判形」の発行が、一か寺につき三十三枚までと定まった。その後、徳川秀忠の時代に、老中より伊勢の「真似勧進」の山伏が多くあるので吟味するよう山田奉行の長野友秀・水谷光勝へ命ぜられ、穿鑿の結果、古法に任せて改めて「判形」の発行が三十三枚に決められた。ただ、以降、検使として年寄たちが発行に立ちあうこととなった。また、山田奉行が花房幸次であった時にも、「判形」の前書・諸法度が先規のままに認められている。

三、今回、六坊の内の成願寺の願人が上野国において勧進を行ったところ、外宮の御師である三日市兵部が、その願人の勧進を押しとどめ、さらに、諸道具や六坊が発行した「判形」まで没収した。その後、去十三日、三日市方より使者が来て、「偽山伏と思ったので諸道具を没収した。しかし、そちらの願人に間違いなく、願人に子細がないのなら返却する」旨を伝えてきたので、「勧進が法度に背くものではなくて安堵した」と返答した。これら一連のことを早々に注進するべきであったが、沙門の身がこのような沙汰を申し上げるのも如何と考えて遠慮していたところ、三日市方が目安を提出したことを聞いた。どうか古法の如く仰せ付けて頂きたい。

ここから、六坊が、古来より勧進を行って来たことを主張し（19）、そのなかで論点となっている御祓も配って来たことを仄めかしていることが窺われる。ことに、二に關しては詳しいことは定かではないが、『台徳院殿御実紀』元和四年正月二十日条に（20）、

又山田奉行水谷九左衛門某（水谷光勝）に諸老臣より。伊勢の神号をかりて諸国勧進するものあまたありと聞ゆれば。山田の神宮その外寺院に令し。かゝるひがふるまひする者を。厳に禁すべきむねつたふ。

とある事柄を受けてから後の、山田奉行による一連の施策を指すと考えられ自らが行う勸進が、禁じられているような伊勢神宮の神号を偽って称し、無認可で行っている偽の勸進ではないことを強調していると捉えられる。

つまり、右に挙げた三日市兵部と六坊の主張は、三日市兵部が御師としての論理を用いているのに対して、六坊は、勸進を行う山伏としての論理を用いているのであり、この点において、まったく噛み合わないものであった。

同年十一月二十九日、次のような形で和睦が成り、山田奉行所へ報告された。

今度三日市兵部且那所上州へ成願寺之願人札ニ御祓を添賦申ニより兵部御目安を指上候、然共力様之出入於^三御奉行所^一御聞候義にて無^レ之段、前々両宮年寄可^レ為^二批判^一之旨被^二仰渡^一候ニ付、吟味仕相済候覚

一、三日市兵部申分ハ前方者仏家之札斗にて勸進仕候へ共、近年ハ御祓ニなをし賦り申ニ付、今度相改御訴訟申上候由申候、六ヶ寺之申分ハ雖^レ為^二誰之且那所^一修造勸進之願人ハ札ニ御祓を添、古来より勸進仕来候旨申候事、

一、両宮年寄存候者縦六ヶ寺之被^二申分^一之通ニ候共、寺修造之勸進ニ御祓賦り候儀不相応ニ候間、六ヶ寺修造勸進之願人

之山伏者其寺々之札を以可^レ被^レ請^二施物^一候、向後伊勢山伏之願人ニ曾而御祓くはらせ申間敷旨六ヶ寺へ申定候事、
一、六ヶ寺ニ持分之且那所へハ尤御祓賦り可^レ被^レ申候、同持分之外願人之勸進所へ御祓くはり被^レ申間敷候事、

右三カ条為^二後日^一如^レ件、
年寄中印判

慶安元^戊年十一月廿九日
山田

三方印判

進上御奉行所様

注目すべきは二か条目と三か条目である。まず、二か条目では、寺の修造の勸進において御祓を配ることは不相応であり、願人の山伏は寺の御札で施物を受けるべきであるとして、勸進での御祓配りが禁止されている。そして三か条目では、六坊が御師たちと同様に保持している且那所に限り、御祓を配っても良いと取り決められている。この二点から一か条目にある「御師の且那所であっても御札に御祓を添えて勸進を行ってきた」という六坊の主張は斥けられたことがわかる。ただ、このような処置は、二か条目にあるような六坊の勸進方法の不相応によるものであり、山伏が御祓を配ることを完全に否定するものではなかったのである。

また、両組織は、

一、六ヶ寺伊勢山伏之似セ勸進諸国ニ曾而無^二御座^一様ニ被^レ成可^レ被^レ下候事、

と(21)、六坊が行う勸進を模倣した偽の勸進が諸国に横行することがないよう山田奉行に願っている。それに対する山田奉行の解答は「被^レ仰候ハ、六ヶ寺伊勢山伏にせ勸進之義ハ大隅守江戸へ参次第ニ江戸御老中へ被^二仰上^一、諸国へ御触渡し様ニ可^レ被^レ成との事(22)」という両組織の要望を承諾し、その徹底を約するものであった。従って、六坊による勸進への便宜を図るため、その活動を阻害する偽の勸進の取り締まりが企図されたといえる。

また、次のような書状(23)の存在が確認される。

尊墨拝受、青海苔一折并海鼠腸曲物一饋給、誠遠路御心付令^二祝着^一候、然者旦那所上州之儀其方勝手ニ落着之由紙面之通得^二其意^一候、一段之義候、尚期^二後音之時^一候条不^レ能^レ詳候、恐々謹言、

極月廿二日

松伊豆守信綱丸印

三日市兵部殿

眼氣以後之間印判を用候、

返状

これは、同年の十二月二十二日付で老中であつた松平信綱から三日市兵部へ出されたものである。信綱が「青海苔一折」と「海鼠腸曲物一饋」の贈与の礼を述べ、六坊との争論について、三日市兵部

の勝訴を祝していることがわかる。この書状から、三日市兵部が老中などへも何らかの働きかけを行い、その後押しを受けていたことが窺われる。従って、同争論は宇治会合・山田三方の扱いとなったとはいえ、その裁定の実質は、三日市兵部の主張を支持する幕府の意を踏まえたものであったと考えられる。

小括すると以下のようなになる。三日市兵部と六坊の間で、山伏が勸進において御祓を添えて配ることを焦点とする争論が起きた。両者の主張は、それぞれ個々の立場からの論理を用いたものであり、正面から噛み合うものではなかった。山田奉行に代わって争論を扱った宇治会合と山田三方は、六坊が主張する山伏の「寺の修造のための勸進で御祓を配る」という勸進方法が不適當であることを理由として六坊の事実上の敗北を裁定した。これは、幕府の意を踏まえたものであったが、あくまで個々の御師が保持する旦那所を侵さないことに主眼が置かれており、山伏の御祓配り自体を否定するものではなかったのである。

二 三か寺の再訴

次に、承応三年(一六五四)く明暦元年にかけて宇治会合・山田三方と明慶院・清水寺・地藏院(広厳寺)の三か寺との争論を検討する。

承応三年正月十一日、山田奉行のもとへ宇治会合・山田三方の年寄たちが訪れ、年頭の御札を行った。その際、同じく御札に来ていた六坊が御札に御祓を添えて献上したため、山田奉行の家老であった岩代半之丞は、宇治会合の年寄たちに「先年三日市兵部と内宮成願寺出入之時、六ヶ寺持分旦那之外御祓くはりさるやうニ両宮年寄被_レ定候処ニ、今又加様ニ有_レ之事はいかゝ候はんや」と、自身の旦那所の他には配ってはいけなはずであるにもかかわらず、六坊が御祓の献上を行っていることについて尋ねた。しかし、その時の年寄たちの返答は「何ともわからざる」ものであったため、山田奉行は御祓を返却し、六坊は御札のみで御札をすることとなった。

この処置を受けて六坊内で話し合いが行われたが、明慶院・清水寺・地藏院の三か寺は納得せず、同月二十二日に、「如_二古来_一国々所々江御祓致_二持参_一、勸進仕候様被_二成下_一度」と、自由に御祓を持参して勸進したい旨を山田奉行へ願い出た⁽²⁴⁾。この三か寺が翌二十三日付で山田奉行所へ提出した訴状をみると、

一、内宮六ヶ寺神宮寺にて御座候、持統天王御宇風宮之住持道登法師大化戊子年、四十一代桓武天王御宇水性山清水寺延暦十八己卯、又十年仁明天王御宇長峯山広厳寺承和元年^(マ)甲丑年五十四代右之時代より穀屋寺々にて御座候へ共、知行一円無_レ之故不如意成寺ともに御座候ニ付、古来より御

祓札を賦り、六十余州之旦那之請_二他力を_一香花灯明等之供具を調、神法樂の護摩供を修し、捧_二御祓_一再拝シ、天下国家之御祈禱仕候事、

一、如_二古来_一御年頭之御祓札上ヶ申候処、御祓無_二御頂戴_一上者六ヶ寺大破ニ罷成迷惑仕候、全新法を申上候ニ無_二御座_一候御事、

とあることが注目される。つまり、

a、六坊は神宮寺であったが、古代より寺を維持する知行がなかったため、古来より御祓札（御祓と御札）を諸国へ配ることで、寺の維持と天下国家の祈禱を行ってきた。

b、古来のように年頭に御祓札を献上してきたのに、この御祓の授受を認めて頂けなければ、六坊は大破してしまう。

と述べているのである。bは、去十一日の山田奉行の処置への抗議であるが、その前提として、aにあるように六坊が自由に諸国へ御札とともに御祓を配って来たことを主張していることがわかる。すなわち、前回の三日市兵部との争論においては、あくまで御祓は寺の御札に添える副次的なものとしてしか扱われていなかったのに対し、今回の争論では、御札と一對となった勸進を行う上で不可欠な品と位置づけられているのであり、御祓と御札を配ることが勸進の主要な行為とされているのである。これは御師たちの行っている御

祓配りと真つ向から衝突する主張であったといえる。

これを受理した山田奉行は、同訴状を内々に山田三方の年寄たちに見せた。そして、山田三方年寄の堤刑部から依頼された与村弘正・出口延佳・岩出末清⁽²⁵⁾によって返答書が作成され山田奉行へ上申された。またこの時、宇治会合から「三ヶ寺へ之返答可^レ仕候へとも、自然三ヶ寺理運二成候ハ、両宮共二御師之ため悪敷候ハん間、両宮一味二申度由」と、「三ヶ寺が勝訴することになったら、内宮・外宮の御師にとって良くないだろうから両組織で協力して三ヶ寺に對してゆきたい」旨を伝える使者が到来し、二月九日には、両組織と三ヶ寺の間で会合がなされたが、三ヶ寺が承知しなかったため、翌十日、山田三方は山田奉行所へ訴訟を行った。應對した岩代半之丞・加藤弥五郎左衛門は、「此度之儀ハ大隅殿御聞可^レ被^レ成も又御聞有間敷候ハんも難^レ斗候、左候ハ、江戸公事二成可^レ申候、山田惣中之雜作可^レ參候間、下にて相済候様」として、山田奉行が下す判断の見通しが立たず江戸での審理に発展する可能性もあるため、出来る限り、山田奉行の扱いにならないよう示唆した。

二月十五日、大宮司⁽²⁶⁾が山田奉行所を訪れ、

内宮三ヶ寺訴訟申候由承候、訴訟之儀者兎も角も先以僧之身として祓を修し、其上太神宮神法楽之護摩を修するなど訴状二書上候由神慮無^ニ勿体^一候、惣而僧尼同座にてハ祓修する事忌事二

て候、それを我職のことく申なす子細、太神宮を仏家ニうはい取へきの企敷、将又風宮の橋つめニ山伏居住仕、宮中をけかし、五十鈴川ニ不浄を洗、無^ニ勿体^一候、先年より有来候といへとも、それハ中古乱世の時諸国を勧進いたし風宮の橋をかけ、其砌よりわつかなる座をかまへ諸参宮人ニ施をうけ、其後次第二作広け、近年ハ風宮となりの諸国を勧進仕事無^ニ勿体^一候、早々御追出し可^レ被^レ下候、大隅守殿仰をも承引不^レ仕候者致^ニ奏問^一破却可^レ仕御申候、

と述べた。大宮司が、

A、三ヶ寺の訴訟の件はともかくも、僧の身でありながら祓を修し、その上、「太神宮神法楽之護摩」を修するなど訴状に書き上げていることは、神慮を踏みにじるものであり恐れ多いことである。僧尼が同座して祓を修することは忌事である。それを自分たちの職能の如く述べる子細は、伊勢神宮を仏家に奪い取る企てなのではないか。

B、内宮の風宮橋の橋詰めニ山伏(明慶院)が居住しているが、宮域内を汚したり、五十鈴川で不浄を洗ったりすることは不届きである。これは以前からのことであるが、それは中古乱世の時に諸国を勧進して風宮橋を架け、その頃よりわずかな勧進の座を構え、諸参宮人に施しを受けていたから

であつて、その後、次第に拡張して、風宮と名乗つて諸国を勧進していることは不届きである、早々に追い出して頂きたい。山田奉行の指示をも聞かないのならば朝廷へ奏聞して居宅を破却する所存である。

の二点を問題視していることがわかる。Aは、三か寺の主張が偽りであることを伊勢神宮の先例の立場から批判するものであり、Bは山伏の存在自体を内宮の宮域内から排除しようと企図するものであると理解できる。対して、山田奉行は、①右の内容を訴訟するならば早々に三か寺へ申し聞かせる旨、②自分も明慶院の存在は宮中には「不相応之者」と考えていた旨、③大宮司が表向きより訴訟をするのは不適當であるからまず内談で命じられるべき旨、を申し入れた。このやり取りから、神宮側と山田奉行の認識が、山伏が主張する彼らと伊勢神宮との関係を否定する方向で一致していたことがわかる。そして、翌十六日、河村勘兵衛と与村弘正が相談し、前述の返答書を再び書き直し、同二十一日、山田三方は山田奉行所へ「返答書并勘文」を提出した(27)。まず、返答書をみてゆくと、

今度内宮三ヶ寺より指上候御目安ニ付乍レ恐御訴訟申上候
条々

一、内宮三ヶ寺之威光誠ニことくしき体ニ書上申候、然共皆
無ニ正体「儀と奉」存候、勘文長々敷御座候間、別紙ニ指上

申候、たとへ者神宮寺にて御座候とても惣御師中之古来相伝之旦那へ自由ニ御賦り可レ申との三ヶ寺之御訴訟尤理不尽之至と奉レ存候御事、

一、御奉行所江御年頭之御礼之時、札ニ御祓相添不レ申候へ者六ヶ寺大破ニ罷成候とハ先以難ニ心得「申上様ニ而御座候、但三ヶ寺者御奉行所江さへ御祓上候と申たて諸国旦那之才覚之便りニて可レ仕との内存と察し申候、自然左様ニ六十余州江御祓賦り申事ニ成申候者惣御師職中之家者悉大破ニ可ニ罷成」候事、

(中略)

右之条々被レ為ニ聞召分一、永代相違無ニ御座一様ニ急度被ニ仰付「被」下候者惣御師中辱可レ奉レ存候、以上、

山田

承応三^甲年
午月日

三方 丸印

進上御奉行所様

とある。整理すると、

(1)三か寺が述べている由緒は偽りである。たとえ三か寺が主張するように神宮寺であつたとしても「惣御師中」の古来相伝の旦那へ自由に御祓を配するというのは理不尽なことである。

(2)奉行所への御年頭の御礼の際、御札に御祓を添えてはならないのならば六坊が大破してしまうという主張は理解できない。おそらくこれは、「三か寺は奉行所にさえ御祓を献上している」と言い立てて、諸国の旦那を奪う糸口にしようとの魂胆であると推察される。もしそのように諸国へ御祓を配るようになつたら「惣師職中」の家々は悉く大破してしまう。

となる。ここでは、三か寺の主張の内容が「惣御師中」すなわち、御師全体にとつての危機的問題であると捉えられているのであり、御師が山伏に相對する一つの集団として意識されていることが読み取れる。次に「勘文」の内容をみてゆくと、

持統天皇御宇風宮之住持道登法師大化三_子戌年四十一代

との事、

一、是者人王四十一代之帝持統天皇御宇大化三_子戌年風宮之住持に道登と申僧有_レ之候との事と聞え申候、皆是相違なる儀共二候、先以持統天皇御宇に大化と申年号ハ無_二御座_一候、大化之年号ハ持統天皇より五代以前孝徳天皇之年号にて御座候と日本紀ニも見え申候、其上支干も相違仕候、大化三年ハ丁未ニ而戊子にてハ無_二御座_一候、又大化三年風宮之住持と申上候事言語道斷之事にて候、風宮号ハ伏見院御宇正応六年三月廿日子細有_レ之両宮同時ニ風宮と御宮号を宣下被_レ成

内人を定おかれ候、彼内人と申役人にて御座候而神役を勤申候、中々寺之やうに僧・山伏などの住持に成申事に而ハ曾而以無_二御座_一候、又右如_二申上候_一風宮と申御名ハ三百六十余年以前ニ始り候ニ、千年ニあまり候大化三年に風宮之住持道登と申法師有りし由ハ殊之外なる相違にて御座候、又明慶院ハもとハ宇治橋之外ニ在_レ之候へとも乱世之比風宮之橋勸進之ためにかり小屋をかけ、後々ニハ勸進所之うしろニまきれ入住居仕候由承及候、寔ニ忝も内宮七所之別宮之御号ををのか名にかり風宮となりの申候て、五十鈴の川上ニの鳥居之内に寺をたて男女住居し、朝夕不浄を河水にてあらひ流し、其なかれの末を自国他国之参宮人之手水ニむすばせ、殊ニハ太神宮之大事之御神事場并瀧祭の宮又ハ八百万神之祓所、皆此河下なればそれをも悉けかし申事、寔ニ勿体なく奉_レ存候、惣而太神宮之四至之内ニハ山伏などの類をは退ける事、これ神託_(マコト)ニ而御座候、其上彼居住之地ニハ神官之館などもさへたて申事難_レ成所ニ寺をたて山伏居住仕候儀神慮難_レ測候、といったように、三か寺の主張を一つ一つ批判するものであることがわかる。ここでは大宮司が述べた神宮側の見解を踏まえ、明慶院の主張する由緒が不正確であり、その存在が内宮の宮域内に相応しくないことを指摘している。注目すべきは、山田三方が明慶院の存

在を非難している点である。反論を行うためであるとはいえ、外宮の御師集団が内宮の「神慮」を慮っているという事実は、先に指摘した御師全体を一つの集団として捉える意識が内宮・外宮の区別を超えたものあることを如実に示しているといえよう。

右の「返答書并勘文」から、三か寺の主張に対抗するなかで「御師」という枠組みが浮上し、一つのまとまりとして意識されたことが指摘できる。

では、この争論は如何なる形で終結したのであろうか。経過の詳細は定かではないが、四月の段階で三か寺が江戸への出訴を試みていることが確認でき⁽²⁸⁾、「三方会合記録」の明暦元年五月条には左のようにある⁽²⁹⁾。

内宮三カ寺之山伏江戸表江罷下り候而、寺社御奉行所江目安差上、御訴訟奉^ニ申上^一候処、山伏仏家之札^ニ御祓を添、諸国配候義不相当之旨被^ニ仰渡^一、重而御訴訟申上候ハ、曲事可^レ被^ニ仰付^一旨^ニ而、両宮之年寄理運被^ニ仰付^一事、

三か寺が江戸へ赴き、実際に寺社奉行へ訴訟を行ったことが窺われ、寺社奉行は、山伏が寺の御札に御祓を添えて配ることは相応しくないとの裁定をし、宇治会合・山田三方が勝訴したことがわかる。また、この裁定は御祓配りが山伏ではなく御師の職分に属するといふ幕府の判断を示すものであるといえよう⁽³⁰⁾。

そして同年八月朔日、上部越中などの両組織の代表の年寄が江戸に参着し⁽³¹⁾、翌日には、左のように山田奉行へ御札を行っている⁽³²⁾。

一、二日晴、今日大隅守殿へ越中・我等一同^ニ罷越、今度願人山伏之義^ニ付、三ヶ寺僧等罷下御訴訟申處^ニ、前方両宮年寄書付指上候通^ニ被^ニ仰付^一候、其上両宮年寄をも不^ニ召寄^一落着仕候事偏^ニ忝奉^レ存候間、其御札^ニ罷下候と申上候へハ、大隅守殿其時之様子具^ニ被^ニ仰聞^一候事、

ここから、寺社奉行の裁定が宇治会合・山田三方の主張を全面的に支持するものであったことが窺われる。また、八月十一日付で山田奉行から山田三方へ出された書状⁽³³⁾を挙げると、

以上

芳札披見候、然者今度内宮山伏六ヶ寺之内三ヶ寺罷下、寺社御奉行所へ及^ニ訴訟^一候處、両宮年寄中理運^ニ相済、皆々難^レ有被^レ存候旨尤之事候、依^レ之上部越中方被^ニ罷下^一口上之趣承候、委細越中方可^レ被^ニ申達^一候、恐々謹言、

石大隅守

八月十一日

御判

山田

三方中

とあり、やはり宇治会合・山田三方の勝訴で終結したことが確認できる。

小括すると以下になる。明慶院・清水寺・地蔵院の三か寺によって再訴が行われた。それは、勧進における諸国への自由な御祓配りを希望するものであり、御師たちの活動と正面から衝突するものであった。それに対して山田三方が行った反駁は、内宮御師・外宮御師の区別を超えた御師全体の立場からの主張であった。その後、三か寺は寺社奉行への訴訟を行ったが、寺社奉行は、山伏が寺の御札に御祓を添えて配ることは不相応であるとの判断を下し、宇治会合・山田三方の勝訴を決定した。しかも、その裁定は両組織の主張を反映したものであった。

おわりに

本章では、神宮御師の連帯意識の萌芽について御祓配りをめぐる山伏との争論を素材に考察してきた。明らかとなったことをまとめておく。慶安元年の三日市兵部と六坊の間の争論では、両者の主張は正面から噛み合うものではなく、争論を扱った宇治会合と山田三方も、勧進方法（寺修造の為の勧進で御祓を配る）が不適当であることを理由として、実質的な六坊の敗訴を決した。しかしそれは、他の御師が有する旦那所への侵害を認めないという点で、あくまで

六坊をも含む個々の御祓配りの安定を目的とするものであって、山伏の御祓配り自体を否定するものではなかった。その後、承応三年から明暦元年にかけて明慶院・清水寺・地蔵院の三か寺によって再び訴訟が試みられた。これは、御祓と御札を勧進において一對の物（御祓札）として自由に配ることを願うものであり、すべての御師たちの活動との衝突・競合が明白に予想されるものであった。このような主張に対して反駁を行った山田三方は、御師全体の立場からの主張を展開し、結果、最終的に寺社奉行から、山伏が寺の御札に御祓を添えて配ることは不相応であるとの判断が下され、三か寺の敗訴と宇治会合・山田三方の勝訴が決定した。

以上から、内宮・外宮それぞれの御師たちは山伏たちと争うことで、利害を共有する一つの集団として意識し始めるようになったと指摘できる。同意識は、明確な競争相手が出現するかもしれないという危機感に触発されたものであり、近似した活動を行う集団と対決する過程を通じて芽生えたものであった。このように考えると、内宮・外宮の別を超えた「御師」という枠組みのもと両集団の御師たちが連携する素地を形成した点において、山伏との争論は御師集団の展開上、意義があったと評価できる。

(1) 荻原龍夫『中世祭祀組織の研究 増補版』(吉川弘文館、一九七五年)。

(2) 新城常三『新稿 社寺参詣の社会経済史的研究』(塙書房、一九八二年)。

(3) 久田松和則『伊勢御師と旦那―伊勢信仰の開拓者たち―』(弘文堂、二〇〇四年)。

(4) 内田鉄平「近世後期、豊前・豊後国における伊勢御師の活動―橋津家大庄屋日記を参考として―」(『史学論叢』三五号、二〇〇五年)。

(5) 千枝大志「伊勢御師の動向と山国」(坂田聡編『禁裏領山国荘』所収、高志書院、二〇〇九年)。

(6) 例えば、澤山孝子「朝幕関係のなかでの伊勢神宮―寛文十年御祓銘争論を事例として―」(『三重県史研究』一七号、二〇〇二年)などに詳しい。

(7) 西川順土「両宮御祓銘論の背景」(『皇學館論叢』四九号、一九七六年)、一四頁。

(8) 詳しくは、本稿第二部六章を参照。

(9) 「内宮六坊出入并雜記」(神宮文庫所蔵、図書番号一門四六六三号)。以降、断らない限り当史料を出典とする。奥書によると、原本は、内宮六坊出入に関わった橋村正満が記したものである

とされ、当史料は文政五年(一八二二)七月に足代弘訓が広辻光恒から借りて書写したものである。弘訓は光恒の本を橋村正満の自筆本(原本)と推定している。以下、本章で使用する史料は特に断らない限り、すべて神宮文庫の所蔵である。

(10) 高埜利彦「移動する身分―神職と百姓の間―」(朝尾直弘編『日本の近世』七卷、中央公論社、一九九二年)、三五九〜三六二頁。

(11) 上相英之氏「伊勢神宮風宮家と『風宮橋支配由来覚』」(『御影史学論集』三二号、二〇〇七年)、一二三〜一二四頁。

(12) 塚本明「近世伊勢神宮領における神仏関係について」(三重大学人文学部文化学科『人文論叢』二七号、二〇一〇年)、一七〜一九頁。

(13) 『神宮典略』三十七卷「六坊」(神宮司庁編『神宮典略 後篇』所収、臨川書店、六三六〜六三九頁)。なお、同書の作者である藺田守良は広厳寺と地藏院を別個のものとしているが、山田奉行所へ提出するため元文五年(一七四〇)八月日付で宇治会合が宇治六郷の寺社の分布・概要をまとめた調書の控である「宇治六郷神社寺院改帳」(二門六五〇四号)の上中之地藏町の項に「真言宗無本寺 長峯山広厳寺 地藏院」とみえ、広厳寺と地藏院は同一の寺を指すと考えられる。

(14) 寛永十二年七月二十八日付で徳川家光から宇治会合・山田三方へ朱印状が与えられている。詳しくは大西源一『大神宮史要』(平凡社、一九六〇年、三九七〜三九八頁)を参照。同朱印状には、

一、参宮之輩可_レ為_二檀那次第_一事、

一、当分参宮之族者両宮之内可_レ任_二其志_一、師職之由申、

不_レ可_レ留_レ之事、付、両宮之内師職無_レ之者可_レ為_二参

宮人之心次第_一事、

一、古来相伝之檀那以_二才覚_一不_レ可_二奪取_一事、

という箇条がある(徳川家光朱印状、『三重県史』資料編近世1、一九〇〜一九二頁)。

(15) 「三方会合記録」二巻、慶安元年十月十七日条(一門三五五八号)。なお、当史料は十六冊からなる山田三方の記録で、宮中・寺院といった項目ごとに編年体で記されている。その記載されている期間は文亀元年(一五〇一)から嘉永六年(一八五三)までであり、長期間にわたって編纂された可能性がある。最終的な形が整ったのは幕末の頃であるとされる(平井誠二『御朱印師職古格』と山田三方―豊臣秀吉のキリシタン禁令をめぐる―、『古文書学研究』二五号、一九八六年、六九〜七二頁)。

(16) 宇治会合・山田三方は、有力な御師家で構成されており(前

掲『大神宮史要』、三九二〜三九三頁)、山田奉行の監督のもと、それぞれ住民組織として宇治・山田とその周辺地域の支配を行ったとされる。両組織に関しては、両組織から鳥居前町へ賦課された一種の租税である「貫^{つなぎ}」の実態と寛政改革の影響について考察した中橋未帆氏「寛政改革と宇治・山田―町入用節減政策を中心に―」(『三重県史研究』二五号、二〇一〇年)に詳しい。

(17) ただし、内宮御師と外宮御師の間で争論が起き、両集団を代表する宇治会合と山田三方が対立してしまった場合は、幕府が最終的な裁定を行った(前掲「朝幕関係のなかでの伊勢神宮―寛文十年御祓銘争論を事例として―」、四五頁)。

(18) 「浦田家旧蔵資料 内宮六ヶ寺地方勸化口上書」(一門一七三一〇の一七号・一六〇九)。同史料には宛名がなく、六坊が三都市兵部の主張に反駁する目的で作成した案文の写しであると考えられる。

(19) 特に六坊とその山伏は勸進に関して、幅広いネットワークを駆使していたことが想定される。例えば、根井浄氏は、備前国邑久郡下笠加村(現岡山県瀬戸内市)の大楽院(現斎藤家)に、内宮風宮橋の勸進札の版木が伝わっている事実を紹介し、「中世の大善院(大楽院) 山伏が伊勢風宮橋勸進にかかわって

いた」と推定している。版本は「片面は青面金剛仏と猿（猿田彦像）を彫り込んだ庚申札であり、その片面が伊勢神宮風宮の橋勧進札」という形状であり、その図柄は、上部左右に日輪・月輪、下部に橋を配し、中央部には「本願賢（欠損）□坊 伊勢内宮風宮橋 □□延命所」と彫られている（熊野本願と諸国定着の熊野比丘尼―備前国邑久郡下笠加村定着の比久尼を中心として、豊島修・木場明志編『寺社造営勧進 本願職の研究』所収、清文堂出版、二〇一〇年、二二二～二二四頁）。また、西山克氏が「中世末期の宇治―朝熊嶽の線上にはおびただしい勧進聖の群れが集結しており、主に『宇治六坊（内宮六ヶ寺）』に帰属しながら、事実上の御師的機能を果たしていた」と指摘しているように（『道者と地下人―中世末期の伊勢―』、吉川弘文館、一九八七年、二一九～二二〇頁）、御師のように御祓を配するという勧進方法は、内宮六坊出入において問題が顕在化する以前から六坊によって行われていた可能性が高い。

（20）『台徳院殿御実紀』巻四十八、元和四年正月二十日条（『新訂増補国史大系 徳川実紀』第三十九、一四六頁）。また、同年二十九日条に「老臣連署もて。宇治山田の神官并に年寄等へ厳に命じ。諸勧進の者を禁ずべき旨。山田奉行に令し。また京職板倉勝重にも。諸老臣より令せしは。愛宕勧進といつはり。諸方

募縁する山伏あまた徘徊する聞えあり。さる者を厳禁すべき旨寺家へ令すべし。真の愛宕山伏は牌をもてまぎれざらん様定め。そのほか江戸にをいて査検せしむべしとなり」とある。

（21）「浦田家旧蔵資料 日記」慶安元年十一月二十九日条（一門一七三・一〇の三二〇号）。表紙に「浦田藏人藤原長次自筆也（印）」とあることから、同史料は、宇治会合年寄の浦田長次によって記された日記であると推定される。

（22）同右。

（23）「御師職古文書」上巻（一門七四〇四号）収録。

（24）前掲「三方会合記録」二巻、承応三年正月二十二日条。

（25）与村弘正・出口延佳・岩出末清は、山田の住人で、三者ともに古典神籍に通じ博学で知られた人物である。豊宮崎文庫の創立にも深く関与したとされる（中村英彦編『度会人物誌』、度会郷友会、一九三四年、三〇四・一七三～一七四・三五頁）。このように、三か寺の主張に対する返答書を作成したのは、鳥居前町でも有数の博識者たちであった。

（26）当時の大宮司は河辺精長である（『内宮禰宜年表』《神宮司庁編『神宮典略 二宮禰宜年表』所収、臨川書店、一〇三頁）。

（27）「内宮六坊出入并雑記」の内容をみる限り、この「返答書并勘文」を作成するに際して宇治会合へ相談した形跡は確認できない。よって、「返答書并勘文」は、山田三方が独自に内宮・外

宮の御師を代表する形で提出したものであると考えられ、協力する方向で一致しながらもまとまりきれない両集団の様相が窺われる。

(28) 「浦田家旧蔵資料 承応四年未日記」(一門一七三一〇の三二八号)。なお、同史料はその内容から「浦田家旧蔵資料 日記」

(前掲)と同じく浦田氏の日記記であると考えられる。

(29) 前掲「三方会合記録」二卷、明暦元年五月条。

(30) このことについては、本稿第二章を参照。

(31) 前掲「浦田家旧蔵資料 承応四年未日記」八月朔日条。

(32) 同右、八月二日条。また、同月五日には、寺社奉行の松平勝隆などのもとへ御礼に訪ねている(同月五日条)。

(33) 「伊勢山田三方御裁許書写」所収「明暦元_二年八月内宮山伏六ヶ寺之内三ヶ寺寺社御奉行所江御訴訟申上候儀両宮年寄理運ニ相済候ニ付石川大隅守様より御状写」(一門一五六九八号)。

第二部 神宮御師集団と近世社会

第四章 伊勢神宮外宮宮域支配と山田三方―「宮中之定」をめぐる―

はじめに

本章は、寛永年間に起きた争論を素材として、外宮宮域支配と山田三方との関わりについて考察するものである。

近世の寺社参詣を扱った研究は、参詣の諸相と特徴を提示した新城常三氏の成果⁽¹⁾を一つの到達点として、以降も一定の蓄積がなされ、近年では、参詣者を受け入れる側からの視点を導入した青柳周一氏の成果⁽²⁾を踏まえ、原淳一郎氏によって本格的な体系化が図られた⁽³⁾。これを受けて、多様な切り口による新たな成果が続々と生みだされつつある。

このような状況の中で興味深いのは、「名所化」という現象に着目する視点である。これは、「名所」を「前代までの宗教的・歴史的・文化的伝統を継承しつつ、大量の参詣者を実際に招き寄せるだけの魅力と能力を備えた場所」とした上で、寺社の「名所化」を「寺社が中世後期から近世にかけての時期において、政治的・社会的な諸変化に適応するなかで生じた現象」と理解するものであり⁽⁴⁾、寺社それ自体の変化を参詣との関係から読み解き、議論の俎上に載せ

た点で、従来の研究を大きく深化させるものであるといえる⁽⁵⁾。

本章は、右の視点を念頭に置きつつ、伊勢神宮外宮を対象として、同宮の宮域（境内）において参宮者（参詣者）の保護を主眼とした法規が制定されるまでの過程を浮き彫りにし、さらに、このような法規が整備されたことの意義について考察を行うものである。具体的には、寛永十八年に外宮宮域の支配をめぐる山田三方（外宮鳥居前町の住民組織）と外宮の一部の禰宜たちとの間で起こった争論を検討する⁽⁶⁾。この争論は、「宮守」と「宮人」との諍いから発展したもので、焦点となったのは、山田三方が作成し、外宮長官（榎垣常晨）に承認を迫った「宮中之定」（後述）と呼ばれる宮域支配に関する法規の可否であった。

近世における伊勢神宮の宮域支配を対象とした研究は、部分的に扱われているに止まっているのが現状であり⁽⁷⁾、管見の限り、まとまったものとしては中西正幸氏の成果⁽⁸⁾が挙げられるのみである。同氏は、宮域に関する法規が整備されてゆく過程を検討することを通じて、制度面での拡充の様相を明らかにしており、今後の研究の立脚点となる成果であるといえる。

ここで注目されるのは、中西氏が宮域支配をめぐって外宮と鳥居

前町（山田）の住民とが対抗関係にあったことを指摘した上で、「宮

中をめぐる諸法度の成立には、そのような宮域内外における両者の抗争と和解のあとを窺うことができる」とし、その事例の一つとして「宮中之定」の制定を挙げている点である⁽⁹⁾。これに関しては、

瀧川政次郎氏が山田三方と宇治会合の形成と展開を論じた研究の中で、山田三方の勢力の伸長⁽¹⁰⁾として位置づけて以降、同評価が支持され、中西氏は「山田三方が宮中干渉の挙にいでた初例⁽¹¹⁾」とし、千枝大志氏も山田三方の「自治機能の拡大⁽¹²⁾」としている。

しかしながら、何故この時期に、何を目的として、どのような経緯を経て制定されたのか、といった諸事項については論じられておらず、その意義に関しても等閑に付されたままとなっている。瀧川氏や中西氏・千枝氏が提示した評価のように、この法規の制定が山田三方の動向と密接に関係するのであるならば、これらについて検討することは外宮宮域と鳥居前町住民との関わりのある方を考える上での一助となる。従って、本章では、新たな法規が外宮宮域において成立する過程を、外宮と山田三方の動きに着目する視点から

捉えることを目指したい。

一 近世前期の外宮宮域内の状況

本論に入る前に、外宮とその鳥居前町、そして、外宮宮域に関して整理しておく。外宮は、伊勢国度会郡山田（現 三重県伊勢市豊川町）に鎮座する伊勢神宮の正宮で、正式名称は豊受大神宮である（外宮は通称）。主祭神は、近接する内宮（外宮と同じく伊勢神宮の正宮。

正式名称は皇大神宮）に祀られている天照大神の「御饌都神」と位置づけられ、広く崇敬を集める豊受大神である⁽¹³⁾。外宮の膝下に広がる山田は、中世以来、参宮者を迎える鳥居前町として発展し、寛永二十年三月の時点で戸数が八四三八家、人口が三〇九一〇人（五歳以上）であったとされる⁽¹⁴⁾。また、御師数は、承応二年八月の時点で三六五家であった⁽¹⁵⁾。この鳥居前町の支配は、江戸幕府から派遣された山田奉行の監督の下、二十四の有力な御師家で構成される住民組織（山田三方）によって担われており、基本的には外宮が関与することはなかったとされる⁽¹⁶⁾。

宮域内の支配については、外宮長官（一禰宜）がその権限を握り、

さらに、二禰宜と十禰宜が協力する形で、社殿・草木の管理や祠官の統制などがなされていた。しかし、近世に入ると、山田三方が独自に制札（寛永四年正月二十日付）⁽¹⁷⁾を宮城内へ建てるなどの明白な介入を試みるようになり、山田奉行も制札（寛永十四年二月十八日付）⁽¹⁸⁾を建てるようになる。従って、本章で対象とする時期においては、外宮長官による一元的な支配は動揺をきたしていたと考えられる。

とりわけ、この支配をめぐっては、参拝に訪れた参宮者への応対が案件として含まれていたことが重要である。そもそも古代においては、伊勢神宮は私幣が禁じられており、内宮・外宮ともに、その宮域は祠官たちが神を祭る「祭祀の場」であった。しかし、中世以降、減少した神領からの収入に代わる新たな財源の模索と伊勢信仰の普及によって、次第に諸国から参宮者が訪れるようになり⁽¹⁹⁾、多くの人々が祈りを捧げる「信仰の場」という性格を併せ持つようになる。この変化の端的な証左として、櫻井勝之進氏が指摘し⁽²⁰⁾、岩間宏富氏が実態を明らかにした子良館の変化（宮城内の齋館である子良館で、祈祷や御祓の授与といった参宮者を対象とした活動が

行われるようになる）を挙げることができよう⁽²¹⁾。また、近世になると、戦乱の終焉により、参宮に訪れる人々の範囲も拡大することとなり、寛永年間の末には、「ぬけまいり之子共」や「ぬけ参と相見へ候六十余之男并わらんへ」といった人々の姿が確認できるようになる⁽²²⁾。

つまり、宮域内に「信仰の場」としての性格が加わったことにより、外宮は、多数かつ多様な参宮者の存在を意識しなければならなくなつたのであり、「祭祀の場」だけではなく、現出した「信仰の場」にも対処する必要に迫られたと考えられる。そして、この動向の一つの帰結として、特に法制面での整備が推し進められることとなつたのが近世前期であつたといえる。

例えば、外宮長官（檜垣常晨）は寛永十二年極月二十八日付で左のような「掟」を定め⁽²³⁾、宮域内の制札としている⁽²⁴⁾。

掟

一、諸国参宮人於_レ宮中_二若口論有_レ之時、宮人出合早無事之旨
双方可_レ申_二宥之_一事、付、諸宮守・宮人等对_二参宮人_一少茂
不_レ可_レ致_二無礼_一事、

一、参宮人於「宮中」被^ニ忘置^一「物在^レ之者、宮人急度遂^ニ穿鑿^一、其主江可^ニ相渡^一事、

一、東者一之鳥居之橋・北者小宮之橋・西者藤社限、從^ニ豊川^一内江乗輿等昇入、乗馬牽通儀不^レ可^レ有^レ之事、付、木履・革草履不^レ可^レ着^レ之事、

右之條々任^ニ古例^一「弥堅相定之状如^レ件、

(ママ)

寛永十二^{乙未}年極月廿八日

外宮長官

家司大夫

一・二か条目は、参宮者同士や参宮者と宮守・宮人(後述)間のトラブル防止を目的とするものであり、三か条目は、参宮者が参拝を行う上での注意事項を提示している。つまり、宮城内の秩序が参宮者によって乱されることが無いように定められた法規であると理解することができる。

このように、外宮にとって参宮者への対応は、「祭祀の場」の秩序を参宮者が乱す可能性があるという点で重大な案件だったといえ、それは参宮者によって成り立つ鳥居前町に居住する御師以下の住民たちにとつても、参宮者に悪印象を与えるわけにはいかないという点で同様であった。従つて、参宮者への対応が深く関わる宮城内支

配を論点とした外宮と山田三方(鳥居前町の住民の利害を代表)との摩擦の発生は当然の事態だったといえよう。

次に、宮城内の「宮守」と「宮人」と呼ばれる人々に関して概説し、この争論の発端となった宮守と宮人との諍いの背景について指摘しておきたい。

宮守とは、宮城内の特定の場所(社殿など)に伺候し、その管理・警衛を行う者たちで、延宝六年(一六七八)四月の時点では、正宮(「大宮宮守」)など七か所に宮守が置かれていたことが確認できる⁽²⁵⁾。ただし、元禄十年(一六九七)四月に成立した「外宮神宮法例⁽²⁶⁾」には記載されておらず、職制上、非公式な存在であったと考えられる。この宮守を勤めたのは、鳥居前町の住民たちで、寛永年間以前においては、運上金を納入することで宮守に任命され、管理・警衛の報酬として、その伺候する社殿に納められた賽銭や初穂料を取得していたとされる⁽²⁷⁾。

例えば、寛永二十年ごろに、岩戸⁽²⁸⁾に伺候していた宮守(岩戸宮守)は八名で、その運上金は二百九十両であった。なお、このようにして得られた運上金は、「御蔵入」として外宮長官のもとへ納

められた。

寛永年間以前における宮守たちの行状は悪質だったらしく、

一社に小板を廿斗つゝすへならへ、老若男女子共をつれ、二百四五十人ほと宮中へ出入をそしたりける儀、其内に乞食の体成者おほかりけり、或ハ子をおふつ、或ハちのミ子をふところニいだきつ、或ハ手を引つ、又ハけいせいのようなるものも有、又ハはらミたるも有、

とあるように、伺候する社殿に賽銭を募る「小板」を据え並べ、また、宮守以外の、乞食体の者・子ども連れの者・傾城のような者・妊婦、などといった様々な人々を自由に出入りさせていたとされる。さらに「若さかりのあらけなき大おとこハ、参宮人に悪口を云、あらけなくあたり、銭をむりにとりたる」といったように、参宮者に悪口を言い、強引に金銭を奪い取る者まであった。

宮人について述べる。宮人とは、宮引とも呼ばれ、前掲の「外宮神宮法例」には、

一、宮人、七十余家、

宮人と申者ハ、不_レ断宮中に出入仕、諸国参宮人之案内を

仕、代参を被_レ頼候而、初穂を申請候、此宮人之内にて長官心望足者共を撰ひ、荷用・人長・昼番・十六人方と申役人に申付候事、

とある。彼らは、宮城内において、参宮者の案内や代参の請負を行い、その初穂料を取得していた者たちであり、なかには、外宮長官から任命されて荷用・人長・昼番・十六人方といった「諸神事之下役人（29）」を勤める者もあった。彼らも、宮守と同じく鳥居居前町の住民であったと考えられ、寛文二年（一六六二）九月の時点では、「毎日数百人斗宮中江相詰申事に御座候（30）」とあるように、数百人もの宮人が宮城内の各所に詰めていたとされる。

右のように両者をみてゆくと、

①宮守は、伺候する社殿への賽銭・初穂料を収入としており、なかには、そのために参宮者に危害を及ぼす者まであった。

②宮人は、案内や代参の初穂料を収入としており、案内という形で参宮者と親しく接する立場にあった。

という実態が浮き彫りとなる。つまり、両者は、収入・職務ともに参宮者の存在を前提としており、創設時期は不明であるが（31）、少

なくとも「信仰の場」が現出したことによって設置された職である
と考えることができる。

しかしながら、宮守・宮人間の利害が必ずしも調整されていたわけではなく、両者の収入はともに参宮者からの初穂料であったため、この取得と参宮者への対応をめぐって、両者は競合する関係にあったといえる。

とりわけ、寛永十八年の前後は、寛永飢饉の兆候⁽³²⁾により参宮者の数が減少しつつあったと推測され、翌寛永十九年には、「諸国より之御参宮人つねのとしの百分一ほとみなきにより宮廻之道ハ草茂り垣もかへもなし」という様相を呈していた。さらに、前述したように宮守たちの行状も悪質なものとなっていたのであって、このような状況下によってもたらされた両者間に潜在する対立の顕在化が、次節で詳述する諍いの背景となったと考えられる。

二 宮守と宮人の諍いと宮城内の法規

寛永十八年（一六四一）三月二十一日、古殿宮守の岩戸屋弥一郎の子長次郎と宮人の扇館七郎兵衛が争った。外宮長官はこのことに

「腹立」し、七郎兵衛と居合わせた者五人、そして、その親兄弟、計十四・五人を宮城内から追放した。

同月二十三日、宮人たち（宮人中）は外宮長官に次の内容の訴状を提出した。

① 今月二十一日に、吉ノ三左衛門のもとから参宮者二十人ばかりが参拝に訪れ、七郎兵衛が案内を行っていたところ、古殿地に居た長次郎が参宮者を押し留め、悪口を言い、からかった。

② 七郎兵衛が①を聞き、「大切な参宮者に対し、粗暴に接するのは謂れ無いことだ」と述べると、長次郎が現れ、七郎兵衛の顔を平手で叩いた。其時、即座に争闘するところであったが、参宮者の案内をしている最中であつたため、案内を最後まで遂げて、荷用に参宮者を引き合わせ、七郎兵衛が長次郎に叩かれた旨を届けた。

③ 同日の夕方に、長次郎が宿へ向かっていたところを七郎兵衛が発見し、争闘をしようと考えて追いかけたので、そこに居合わせた数名の宮人は、宮城内で軽率なことをさせてはいけないと思い、後から駆けつけて二人を引き離れた。

④ 以上のような事情にもかかわらず、弥一郎・長次郎が偽って

申し上げた「造意の由」との言葉を信じ、理不尽な処置を仰せ付けられたのは迷惑である。

右から、長次郎の参宮者に対する粗暴な言動が原因で、諍いが発生したことが窺われる。また、「七郎兵衛が争闘に及ぼうとした」との認識に基づいて、外宮長官が宮人を処罰したことが確認できる。

訴状を受けて、外宮長官は、「扇館七郎兵衛から岩戸屋弥一郎方へ謝罪をして落着させるように」との裁定を行った。しかし、宮人たちは承知せず、同日、山田三方に訴状を提出するとともに、山田の町々の月行事へ宮守を糾弾するべき旨の廻文を出した。宮人たちは、あくまで宮守の肩を持つ外宮長官に反発し、鳥居前町の御師たちに訴えることで解決を試みたのである。

この山田三方への訴状には、近來の宮守による参宮者への粗暴な振舞い(悪口や乱暴、賽銭の無理強いなど)が書き上げられており、さらに、これが宮人ばかりではなく、御師たちにも関わる事柄であることが強調されていた。つまり、宮人たちは、宮城内での参宮者保護が徹底されていない事実を暴露し、宮城内支配が参宮者の保護と直接に関わるものとして訴えることにより、御師たちを宮城内支配の問題へと引きこみ、彼らの圧力によって、外宮長官の裁定を覆すとともに、宮守たちの行状を是正しようと試みたのである。

さらに、宮人たちは、落着しなかった場合、上京して祭主に訴え

ることを決め、訴状を以て「祭主様江御状一通被_レ遣被_レ下候様二」との旨を大宮司へ願ったとされ、大宮司は祭主への具申を約し、宮人への支持を表明したとされる。

しかしながら、外宮長官は、あくまで宮人は「長官之まゝ二なる者共」であり、自身の命に従うべきであるとの旨を山田三方へ内々に申し入れ、裁定を変更するつもりはないという姿勢をとった。

以上の経過で注目されるのは、

A、古殿宮守の岩戸屋弥一郎の子である長次郎が参宮者に対して危害を加えても、外宮長官は処罰を行わず、宮人のみが争闘に及ぼうとしたことを理由に処罰された。

B、宮守は参宮者に対し、悪質な行為を繰り返していた。

という二点である。Aからは、外宮長官は、あくまで「祭祀の場の秩序を維持することを第一としており、参宮者の保護は管掌外として認識していたことが窺われ、Bからは、そのような認識により、参宮者に危害を加えても外宮からは処罰がなされなかったことがわかる。

このように、この時点における参宮者に対する外宮の方針は、前述した寛永十二年極月二十八日付の「掟」の内容からも窺われるように、宮守・宮人へ一任するというものであつて関知しないことを旨としており、宮城内における参宮者の保護は不完全な状態にあつ

たのである。

四月十一日、山田三方は会合を開き、宮人たちから子細を聞いた上で、外宮長官へ「宮域内から追放した宮人を復帰させるように」と申し入れることを決定する。また、山田の月行事五十余人が欣浄寺で相談を行い、十三か条から成る「宮中之定」を作成した。そして、同日の夕刻、山田三方は、河村勘兵衛を使者として外宮長官へ追放した宮人を復帰させ、「宮中之定」に裏書を行い承認するよう迫った。この「宮中之定」は次のようにあった。

宮中之定

一、宮山領内顛倒之外諸木を伐、土石を御掘採候義有^レ之間敷事、

付、道之外之篠草御からせ有^レ之間敷事、

一、参宮人之心さし之外の散銭貪取へからさる事、

付、白石持同前之事、

一、宮守参宮人にたいし悪口を云、又者すかり付義有^レ之へからさる事、

一、にせ道者を仕、色々致^ニ調略^一候義有^レ之へからさる事、

一、大社・小社ニよらず、宮守烏帽子・素袍にて座ニ居、一切参宮人に立むかひ申間敷候、惣而少茂不礼ケ間敷義有^レ之間敷候、

一、外宮領内之外之者ニ宮御請させ有間敷事、

付、女を宮ニ置間敷事、

一、法体之者を礼物ニ而神前近ク参らせ候義有^レ之間敷事、

一、神前にて燈明銭を取、又者帳ニ付候義有^レ之間敷事、

一、岩戸之口にて関のことくニ銭を取、又燈明銭を押而取候義すへからさる事、

付、無理ニ植木をさせ候義有^レ之間敷事、

一、宮中并岩戸道ニ古来無^レ之新宮・同小板置候義有^レ之間敷事、

付、無理ニ宮廻りさせ候義有^レへからさる事、

一、道ニ注連をはり垣を仕、幣祓等を足本ニてふり、参宮人を通し不^レ申候義有^レへからさる事、

一、宮中内御池ニきたなき物を捨置、又者大小便をむさと仕義有^レへからさる事、

一、火之用心悪敷仕義有^レへからさる事、

付、宮之外ニ小屋を作り飯を焼へからさる事、

右之十三ヶ條之趣不^レ残於^ニ御合点^一者可^レ為^ニ御神忠^一候、以上、

山田

寛永十八年卯月十一日

三方判

外宮

官長殿

山田三方が参宮者の保護と宮城内の引き締めを企図していることがわかる。それぞれを整理すると以下になる。一・七・十・十二・十三か条目は、宮城内の景観に関する内容であり、宮山の草木・土石の保護、僧体の者の排除、社殿・小板を新設することの禁止、清浄の維持、火災への注意などを通じて、宮城内の保全が目指されている。そして、二・三・四・五・八・九・十(付)・十一か条目は、参宮者に金銭などを要求したり、迷惑をかけたりするような行為が禁止されている。

いずれも参宮者へ悪印象を与える事柄が対象となっており、「宮中之定」が、参宮者の保護の徹底と、その「信仰の場」としての宮城の保全を強く意識したものであることは明らかであろう。また、草木の管理や宮守の任命といった外宮長官の権限を制限する箇条が存在することも注目される。つまり、山田三方は宮守の行状の改善を目的として、宮城内の支配への干渉を試みたといえる。

翌十二日早朝、外宮長官は追放した宮人の復帰を許可したが、この宮人たちは、「宮中之定」を外宮長官が承認しなければ復帰しない旨を主張して抵抗した。しかし、山田三方が「かまはず早々罷出よ」と命じたため、宮人たちは十四日より宮域に復帰した。ただ、「長官

江ハ一礼も不_レ云」とあるように、外宮長官への不満が解消されることは無かったのである。

この「宮中之定」の諸否をめぐることは、外宮内で議論が巻き起こったとされる。外宮長官は承認するつもりであったが、他の禰宜たちに相談したところ、「是ハ末代神宮之きす」や「いや、是ハ長官一代之きす」といったように、この「宮中之定」を認めることによって、禰宜たちや外宮長官の名誉が損なわれるとの意見が出され、結果、一部の者たちの間で、「神宮之きす」と云立、長官を流罪ニせんと云合、一代之悪き事を祭主江申上_ン」ことが話し合われるという事態にまでなった。禰宜たちは、「宮中之定」の内容を妥当なものとして認識していたが、宮城内の支配を山田三方から指図した先例は無いとして強く反発したのである(33)。

そして、十七日(34)、三禰宜(松木信彦)・五禰宜(松木全彦)・六禰宜(松木満彦)・七禰宜(檜垣常和)・八禰宜(松木集彦)・九禰宜(檜垣貞和)と権禰宜たちは、「宮中ノ掟ハ從_ニ祭主_ニ可_レ有_ニ事成_ニ」と考え(35)、「三方よりの十三ヶ條ほんごせせん」ため、京都へ使者を派遣し、「三方ヨリ宮中之掟新義迷惑候間、掟被_レ遊被_レ下候様ニ」として(36)、祭主に新しく法規を定めてくれるよう願った。この際、三禰宜以下の禰宜たちは、祭主に「長官一代之悪行」を訴えたとき、山田三方の「宮中之定」を承認する姿勢をとった外宮

長官を処罰によって排除することすら試みられたのである。

すると、祭主から左に挙げた「宮中掟」が与えられた。

宮中掟

一、宮山領内顛倒之外伐_レ採諸木_一、穿_二土石_一荒_二宮山_一事者、
自_レ古被_レ載_二大科式目_一之條今以堅可_レ令_二禁止_一者也、次
宮道之外篠草一切為_レ刈申間敷事、

一、於_二宮山_一殺生禁斷之事弥可_レ相_二守旧法_一事、

一、自_二往古_一相定宮地之内雖_レ為_二寸地_一不_レ可_二押領_一事、

一、至_二宮社・神木・御池・石地形等_一迄上古之風儀今更不_レ
可_二作改_一事、

一、僧尼・俗人に不_レ寄法体之者、如_二古法_一神前近不_レ可_レ

有_二参入_一事、

一、宮中・同御池江物を捨不_レ淨仕儀堅可_レ制事、付、從_二先規

一相定殿舎之外小屋を作り、火を焼、酒食を拵、自由之

働仕間敷事、

一、宮中諸役人并宮守・宮人以下迄他所之者を不_レ可_二成置_一、

其上子良館居住女子之外宮社に女子を置間敷事、

一、神前_二而帳を付、灯明錢を取、於_二宮中・岩戸辺_一從_二先

規_一無_レ之新宮を【立_二37_一】、板をかまへ、宮道に垣を作、

曳_二注連_一、幣祓をふりかけ、参宮人を不_レ可_二押留_一事、

一、於_二宮中_一宮守・宮人・白石持種々企_二謀略_一、惱_二参宮人

一散錢を貪取、剩対_二参宮人_一致_二狼藉_一之由前代未聞曲事

沙汰之限候、向後堅可_レ令_二停止_一事、

右之趣為_二神慮_一候條於_二末代_一各堅可_レ被_二相_一守此

旨_一候、若違犯之輩於_レ有_レ之者早可_レ被_二注進_一者也、

仍如_レ件、

寛永十八年四月廿七日 祭主神祇権大副判

宮司

外宮

禰宜中

同 権任中

「宮中掟」が山田三方の「宮中之定」を九か条に書き改めたものであることがわかる。祭主は、「宮中之定」を修正し、自身の名で新たに定めることで、参宮者の保護を徹底したいという山田三方の要望と、支配関係の先例を守ろうとする三禰宜以下の禰宜たちの要望

との両立を図ったと考えられる。また、外宮長官の処罰に関しては何ら指示がなく、この「宮中掟」が「宮中之定」を書き改めただけの同趣旨の法規であることを勘案すると、祭主は外宮長官の姿勢を支持したと考えられる。

これを受けて、大宮司と長官以下の禰宜たちは、この法規を守る旨を奥書し、連判して祭主に提出した。ただ、山田三方の諾否は考慮されず、山田三方へ連絡されることは無かった。

以上を小括しておく。参宮者への応対をきっかけとして、宮守と宮人が諍いを起した。これに対する外宮長官の裁定を不服とした宮人たちは山田三方に訴状を提出した。訴えを受けて、山田三方は、「宮中之定」の承認を外宮長官に迫った。その内容は、参宮者の保護を主眼としており、従来の外宮の方針に転換を促すものであった。この法規に関しては、外宮長官は承認の姿勢をとったが、大多数の禰宜たちは、先例が無く彼らの名誉を損なうものとして反発した。そして、京都の祭主へ新たな法規の作成を願うとともに、外宮長官を訴えるという強硬な手段さえ試みられた。これを受けて、祭主から新たな法規が与えられた。山田三方の「宮中之定」は妥当なものと認識されたが、先例が無いとして禰宜たちの反発を招いたのであ

る。そして、祭主が定めた「宮中掟」が正当な法規として期待された。しかしながら、この「宮中掟」は山田三方に知らされることはなかった。

三 宮域内の法規をめぐる対立とその決着

寛永十八年の五月に入ると、山田三方は外宮長官に、「拾三箇条之趣御合点候哉、左候者、三方次第との墨付可_レ有」と、留保されていた「宮中之定」の諾否を訊ね、承認を迫った。外宮長官は返答に詰まり、「宮中之定」に反発する禰宜たちに相談したが、「我々は知らない」との返事が来たため、外宮長官は再度、禰宜たちに返答を求めた。すると、「祭主殿江連判之老通指上候上ハ、墨付被_レ成三方へ御渡候へとハ不_レ被_レ申候、乍_レ去御分別次第」との返事が来た。

つまり、祭主からの「宮中掟」を受け入れていることを理由に、「宮中之定」の承認に反対したのである。このため、外宮長官は「どのようなにもするところではあるが、他の禰宜たちが無用と言っている」と山田三方に伝えた（38）。

五月十二日、山田三方は、河村勘兵衛を使いとして、反発する禰宜たちへ「長官ハ御合点候処、神宮衆之コタハリ殊勝ニ不_レ存候、向後三方中絶可_レ仕候、左様ニ相心得可_レ申」旨を申し入れ、「宮

中之定」を承認しないのは感心しないとして、彼らと絶交することを表明した。これに対し、禰宜たちから断りを行ったが、絶交が解かれることはなく、翌十三日には、山田三方から山田の町々へ「神宮拾三人江出入、其上売物仕間敷」と触れが出された⁽³⁹⁾。山田三方は、鳥居前町の住民に対しても、禰宜たちとの絶交を命じたのである⁽⁴⁰⁾。この絶交は徹底されており、例えば、

一、五月十三日、八日市慶徳三郎左衛門酒を檜垣河内方よりかい二遣候処、三郎左衛門被_レ申候ハ、郷内よりうり申間敷候由申候、

とあるように⁽⁴¹⁾、慶徳三郎左衛門のところへ檜垣貞次方から酒を買いに行ったところ、販売を断られている。

十四日、六・九禰宜は大宮司に、

今度三方中より山田中上中十三人を不通仕、うり物以下迄相留られ候、殊ニ宮人以下まで右之内へ出入不_レ仕様ニ申ふれ、又不礼をも仕候様ニとふれ申候へ者、何角無自由なる事ニ御座候者諸神事も難_レ勤候間、左様ニ御心得被_レ成候へと申、

として、神事を勤めがたい旨を申し入れた⁽⁴²⁾。同日、大宮司は、「今度之義万事無自由候まゝ理り不_レ及⁽⁴³⁾」と返事をしている。一部の禰宜たちは、山田三方の絶交処置によって、神事への参加もままならないという状況に陥ったのである。

さらに、絶交された禰宜たちは、大宮司からの了承を得た上で、「三方企_二徒党_一」、天下御法度之一味仕、神宮拾三人之者共江売物迄相留申候由⁽⁴⁴⁾」を祭主に訴えることを決した。これにより、外宮長官は山田三方へ「宮中之定」の諾否に關して「うら書すこし御待候へ」と、承認の延期を申し入れたとされる。この後、「宮中之定」の諾否は、外宮長官の子である四禰宜（檜垣貞晨）の「預り分」になったとされ、その結果、四禰宜が「宮中之定」に「うら書・判」をすることとなったとされる。

十五日、使者となった権禰宜の松木修理は、大宮司からの使者である川辺喜左衛門を伴って京都に向けて発足した。しかし、同日の夕方、久志本弥四郎から「何とて可_レ有候間、先罷帰候へ」旨の書状が届いた。松木と川辺は、津に戻って逗留し、久志本による数度の説得を受けて、結局、京都に向かわずに引き返してしまう⁽⁴⁵⁾。

実は、松木修理が京都へ向けて発足したことを知った山田三方は、十六日に「拾三人へ出入仕候共、売物仕候共心持次第」との旨を山田の町々に触れ直しており、町々からの絶交は形式上では解かれていたのである⁽⁴⁶⁾。ただし、山田三方との関係が修復されたわけではなく、また、町々の住民の中にも絶交を継続する者があったため、禰宜たちを取り巻く状況が改善したわけではなかった。

同月二十一日、山田三方は、

一、今度宮中作法之事、長官江申届候へとも不_二相済_一子細候ニ付、未町々江も申渡候義無_レ之候、其内自然宮を請申度存候もの有_レ之候者、三方より書出し之十三ヶ條之趣以来毛頭無_二相違_一可_二相守_一と存候て、其通能々心得候て宮を請可_レ然候、相済次第二町々江急度可_二申渡_一候、末代少も十三ヶ條之通ハ猥ニさせ申間敷候、若以来者ゆるかせにも可_レ成なと、頼ヲ仕候而ハ可_レ為_二曲事_一候間、能々心得可_レ然候、已上、

五月廿一日

三方

として、宮守を勤仕するならば「宮中之定」を遵守するべき旨を町々に触れた。これは、山田三方が「京之九ヶ條之義、京ハ程遠く候間、定相背候はん（47）」と、祭主が京都に居住しているため、祭主の「宮中掟」では、法規として効力がないと考えたからであるとされる。

「宮中物語」によれば、ここで言う「不_二相済_一子細」とは、「神宮衆祭主殿江又申さんとひしめける」という状況を指しているとされ、この触れが祭主への訴訟を引き続き計画している禰宜たちの動きを牽制する狙いがあることは明らかであろう。また、「宮中掟」は町々に触れられておらず、「誰不_レ聞」という有様であったとされる。つまり、山田三方は、宮守を勤める町々の住民に「宮中之定」を守らせることで、効力が疑わしい「宮中掟」の破棄と、既成事実化に

よる「宮中之定」の発効を狙ったと考えられる。

二十三日、久志本弥四郎の使者である中野吉左衛門が絶交された禰宜たちのもとを訪ね、説得を行ったが効果はなく、二十四日には、再び松木修理が京都に向けて出発し、さらに、後日、権禰宜の檜垣三河と檜垣主馬も上京した（48）。

この檜垣三河と檜垣主馬は祭主へ同年六月五日付の訴状を提出している（49）。その内容は、山田三方の処置を「山田惣中江以_二権威_一悉之触を廻し、禰宜・権任等を撥し万事買物迄とめ候、（中略）、其上山田地下中下々之者迄に不儀を可_レ働之旨申付候」とし、「天下御祈祷神事」の妨げと成る行為として非難するものであった。つまり、町々からの絶交が事実上、未だ継続しているとの認識のもと、この山田三方による無法な処置を訴えることによって、山田三方が「宮中之定」を強要しようとしている事実を祭主に知らせ、状況の好転を図ったといえよう。

同じく五日、外宮長官はすべての宮守たちに対し、次の法規を守るよう命じた。

宮中御掟御請申條々

一、宮山諸木ヲ剪、土石を掘採、宮山を荒し、篠草ヲ刈取等之義仕ましき事、

一、宮山にて弓ヲ射、鉄砲ヲ放并殺生仕ましき事、

一、僧尼・俗人ニよらす法体之者ヲ古法のことく神前近ク参入させ申しき事、

一、神前ニて帳ヲ付、灯明錢ヲ取申しき事、付、岩戸ノ口にて関のことく二錢を取、押テ灯明錢をとり、無理に植木ヲさせ候義申しき事、

一、宮中并岩戸道ニて先規無^レ之新宮ヲ立、小板ヲかまゆる義申しき事、

一、参宮人之心さしの外散錢貪取申しき事、

一、参宮人ニ対し悪口ヲ云、又ハすかり付、狼藉成義ヲ申しき事、

一、にせ道者ヲ仕、種々ノ調略ヲ企義申しき事、

一、大宮・小宮ニよらす宮守烏帽子・素袍を着し、座ニ居て一切参宮人ニ立むかひ申し候、惣テ不礼かましき義を仕、参宮人を悩ス義申しき事、

一、宮守他所之者ニ下請させ申し候、并女を置申しき事、

一、宮道ニ垣ヲ仕、注連ヲ曳、幣祓ヲ足本ニてふりかけ参人ヲ押留申しき事、付、無理ニ宮廻させ候義申しき事、

一、宮中御池江不浄之物を捨、大小便ヲむさと申しき事、

一、先規より相定殿舎の外小屋ヲ作り、火を焼酒食を拵、自由ノ働申しき事、

一、火之用心堅仕、宮守里江かへる時弥念を入、火を仕廻可^レ申事、

一、宮守面々之宮之前ヲ掃、地寄^(タヤ)麗ニ可^レ仕事、

右十五ヶ條之通被^ニ仰付^一、慥ニ御請申候上者、自今以後自然相背候ハ何様之事曲事ニ成共可^レ被^ニ仰付^一候、其時一言之異義も往々御侘言も申上間敷候、仍為^ニ後日^一御請状如^レ件、

六月五日

この法規が山田三方の「宮中之定」と祭主の「宮中掟」を踏まえたものであることがわかる。従つて、外宮長官は、「宮中之定」の欠点(山田三方が定めた法規であるため、支配関係上、正当ではない)と、「宮中掟」の欠点(外宮から遠く離れた京都に居住する祭主が定めた法規であるため、効力が疑わしい)を克服するため、自らの手による法規の制定を試みたと考えられる。しかし、「宮中物語」によると、宮守たちは、四名が押印したのみで、その他は山田三方の「宮中之定」を支持し、連判を拒否したとされる。宮人に引き続き、宮守も外宮長官の命を聞かず、ここに外宮長官の定めた法規であつても、宮人・宮守に対しては拘束力を有さないことが明白となつたといえる。思わぬ反発に遭つた外宮長官は、「請宮もふちニ給たる宮もとりあけもなし給ハす、掟ノさたもなし」とあるように、宮守たち

を処罰することはせず、その発効を諦めてしまったようである。

同月十六日、禰宜たちの訴訟を受けて京都の祭主から次のような外宮長官・二禰宜宛の書状が到来した。

態令_レ申候、然者 宮中下知法度山田三方年寄共申付候儀自_二先規_一其例在_レ之事候哉、弥被_レ正_二旧法_一具可_レ被_二申越_一候、次山田三方中方より禰宜・権任中各別撰出之由、是又如何様之子細候哉、其旨趣以_二墨付_一可_レ承候、為_レ其如_レ此候、恐々謹言、

六月十四日

友忠判

外宮

一禰宜殿へ

同

二禰宜殿へ

この書状で、祭主は外宮長官・二禰宜に、①「宮城内の法規を山田三方が定めた先例はあるのか、旧法を調べて報告しなさい」、②「一部の禰宜・権禰宜が町々から絶交されているが、その事情を説明しなさい」との指示を行っている。これに対し、外宮長官は、

一、御書中令_二拜見_一候、然者 宮中下知法度山田三方年寄中被_二申付_一候様ニ被_二仰越_一候、今度宮中之義三方より異見被_レ申候段ハ如_二先書_一申達候、宮守とも我等申付候作法共相背候由我等ハ不_レ存候而居候處ニ、從_二三方中_一より被_二聞出_一、

其趣を書立、此通於_二合点_一者可_レ為_二神忠_一と被_二申越_一候間、右之紙面神宮中江相談申、宮中宮守作法之義任_二旧例_一我等申付候、其後從_二京都_一九ヶ條之掟被_レ下候、御下知之上ハ無_二異儀_一領掌之書判仕上申候、將又、禰宜・権任之内各別ニ被_二撰出_一之義三方年寄中より此方へハ様子不_レ被_二申聞_一候故、意趣分明不_レ存候、委細ハ宮司殿江申入候、恐惶謹言、

六月廿日

常晨

進上祭主殿

と返答し、二禰宜も、

一、尊書致_二拜見_一候、仍 宮中下知法度從_二山田三方年寄中_一被_二申付_一候様ニ蒙_レ仰候、此頃宮守共對_二参宮人_一無作法之事有_レ之由ニ付而、從_二三方中_一以_二書付_一長官江被_二申越_一候處ニ、則宮中之仕置長官より被_二申付_一候、次ニ三方中より禰宜・権任之内各別に被_二撰出_一候趣以_二墨付_一可_レ申上_一候蒙_レ仰候へとも、子細分明不_レ存候間難_二申上_一候、此旨御披露所_レ仰候、恐惶謹言、

六月廿一日

外宮二禰宜朝雄

沢地民部殿

とあるように、二十一日付の書状で同趣旨の答申を行っている。その内容をみると、両書状ともに、祭主の②の指示には明白に不明である旨を説明しているにもかかわらず、①に関しては、求められた先例には言及せず、その内容も要領を得たものではないことに気付く(50)。

とりわけ注目したいのは、祭主の①の指示に対して、「祭主から、『宮城内の法規は山田三方が申し付けるように』との命を受けた」と述べている点である。ここから、一・二禰宜ともに、祭主の書状に「弥被^レ正^二旧法^一具可^レ被^二申越^一候」とある文言を「旧法を改正し、報告するように」と解釈して回答を行ったことが判明する。

つまり、一・二禰宜は、山田三方の「宮中之定」を採用すること企图し、祭主の指示とすることで押し切る方法を選んだと考えられる。これは、これまでの曲折を踏まえると、鳥居前町の住民で構成される宮人・宮守に対しては、山田三方の定めた法規の方が拘束力を有するという判断に基づく処置であろう。そして、この後、祭主が異議を唱えるような動向はみられず、祭主は右の処置を認めたといえる。従って、ここに「宮中之定」は、宮城内の法規としての地位を獲得したと指摘できる。

これ以後、禰宜たちは、祭主への働きかけを続けたようであるが、祭主が動くことはなく、祭主は山田三方が五月十六日付で町々へ絶

交を解くように触れていることを根拠に在京中の三名に下向を勧め、八月十日には松木修理が帰り、九月三日には、残りの檜垣三河と檜垣主馬も京都を後にした(51)。

さらに、十月に入り、不在であった山田奉行に石川政次が着任すると(52)、禰宜たちは訴訟を試み、十一月二十二日には山田奉行所へ訴状を提出している。その内容は、「山田惣中年寄共、次二月行事ニ至迄^レ今^(虫損)□堅一味仕候故、此上ニも又如何様之取存をかまへ、如何様之あたを心中ニさしはさみ居候哉らんも不^レ存」という状況であるから、「向後無異ニ而山田居住仕、弥 天下泰平・国家安全之御祈祷無^二懈怠^一勤申候様」に仰せ付けて欲しいというものであった(53)。山田三方との絶交が継続していることを問題視していることがわかる。しかしながら、この訴えを山田奉行が取り上げることは無く、絶交は以降も続き、和解が成ったのは慶安五年(一六五二)七月六日のことであった(54)。

ここまですを小括しておく。山田三方は、再び「宮中之定」の承認を外宮長官に迫った。一部の禰宜たちは、祭主の「宮中掟」があることを理由として反対を表明する。対して山田三方は、絶交を宣言し、山田の町々へも同調を命じた。禰宜たちは、京都の祭主のもとへ再び訴えることを決し、使者を派遣する。これを受けて、山田三方は、町々へ絶交を解くように指示を行ったが、彼ら自身が態度を

改めることは無かった。さらに、町々へ「宮中之定」を守るように触れを廻し、既成事実化を試みた。このため、禰宜たちは、祭主に訴状を提出した。また、外宮長官は、自らの手による法規によって事態の收拾を模索したが、宮守たちの反発により断念することとなる。結局、山田三方の法規を採用することに決した一・二禰宜の意向と祭主の黙過によって、山田三方の「宮中之定」が宮城内の法規として、その地位を獲得することとなった。

おわりに

本章では、寛永十八年の外宮宮域支配をめぐる争論を対象に検討を行ってきた。最後に、明らかとなった内容と成立した法規の意義についてまとめておく。

外宮長官の宮城内支配が動揺するなか、参宮者層の拡大と当該期の参宮者数の減少、そして、宮守の行状の悪質化によって、宮守と宮人との対立が顕在化し、両者は諍いを起こした。この諍いにより、宮城内における参宮者の保護が不十分であることが露呈してしまう。このため、宮守と宮人との対立だったものが山田三方も巻き込んだ宮城内の支配を焦点とした争いへと発展することとなった。

宮城内の支配をめぐる山田三方と禰宜たちが対立を深めてゆく。前者は、参宮者の保護を実現するため強引に「宮中之定」の発効を求め、後者は、先例の堅守を望んだ。ここで争点となったのは、山田三方の、ひいては鳥居前町の影響力が宮城内に及ぶことの是非である。山田三方にとって、参宮者の保護を徹底するためには、これは不可欠なことであるといえ、禰宜たちとしては先例に反する避けたい事柄であった。禰宜たちは、山田三方からの要求に対して支配関係面での問題を理由として対抗を試みた。これにより、両者の対立を解消する意図のもと、祭主の「宮中掟」、そして、外宮長官の「宮中御掟御請申條々」がそれぞれ定められた。しかしながら、これらは鳥居前町の住民で構成される宮守・宮人たちに対しては拘束力に疑問が残るものであったため、発効に至ることはなかった。

右の結果、法規としての有効性を鑑みた一・二禰宜の判断と、祭主の黙過により「宮中之定」が法規として地位を得ることとなった。このことは、現出した「信仰の場」に対応する新たな法規の成立として評価でき、今後の制度・法規面での整備がなされる上での起点となったと考えられる。特に、山田三方の主導のもと、禰宜たちの

主張する先例を押し切る形でこの法規が制定されたことは重大で、以後、「信仰の場」の保全を目的として、山田三方はこれらに関連した宮城内の事柄に干渉を試みるようになるのである（承応二年九月に実施された横目の設置など）。

本章の冒頭で触れた寺社の名所化の議論に関わっては、当事例から、①参詣者（参宮者）を受け入れる寺社内部の仕組みの整備、②その整備において門前町（鳥居前町）の住民たちが果たした役割、の二点にも目配りが必要であることを指摘できよう。

しかし、このような山田三方による干渉は、外宮の支配関係上、変則的な事態であつたため、禰宜たちの間に根強い反発を残すこととなった。また、これ以降も、宮城内と参宮者をめぐる問題は止むことが無く、近世前期に限って例を挙げれば、承応年間・寛文年間、そして延宝年間に法規の再確認・再制定が実施されることとなる。特に、延宝年間のそれは、山田三方ではなく外宮長官松木満彦の名のもとに法規が定められており、外宮長官を頂点とした支配関係を再構築する試みとして位置づけられる。これらに関して、山田奉行、そして内宮とその鳥居前町（宇治）の動向も踏まえ、他稿を期すこととしたい。

- (1) 新城常三『新稿 社寺参詣の社会経済史的研究』(塙書房、一九八二年)。
- (2) 青柳周一『富嶽旅百景―観光地域史の試み―』(角川書店、二〇〇二年)。
- (3) 原淳一郎『近世寺社参詣の研究』(思文閣出版、二〇〇七年)。
- (4) 西田かほる・青柳周一「地域のひろがり」と宗教」(青柳周一・高埜利彦・西田かほる編『近世の宗教と社会1』所収、吉川弘文館、二〇〇八年)。
- (5) このような視点から検討を行った研究として、青柳周一「近世における寺社の名所化と存立構造―地域の交流関係の展開と維持―」(『日本史研究』五四七号、二〇〇八年)・同「近世の「観光地」における利益配分と旅行者管理体制―近江国下坂本村を事例に―」(『ヒストリア』二四一号、二〇一三年)・白井哲哉「近世鎌倉寺社の再興と名所化―十七世紀を中心に―」(前掲『近世の宗教と社会1』所収) などがある。
- (6) この争論については、大西源一『大神宮史要』(平凡社、一九六〇年)で既に紹介されている。
- (7) 近年の成果として、山田三方の自治機能の問題から検討を行った千枝大志「宮中の肅正問題と近世三方家」(『伊勢市史』第三卷近世編、伊勢市、二〇一三年)が挙げられる。
- (8) 中西正幸「近世における神宮の制規(一)」(『神道宗教』一二二〇号、一九八五年)。
- (9) 同右、五五頁。
- (10) 瀧川政次郎『山田三方並に宇治会合所について』(神宮司庁、一九五〇年)、七一頁。
- (11) 前掲「近世における神宮の制規(一)」、五八頁。
- (12) 前掲「宮中の肅正問題と近世三方家」、一九〇～一九一頁。
- (13) 阪本廣太郎『神宮祭祀概説』(神宮司庁、一九六五年)、三二～三三頁。
- (14) 大西源一『参宮の今昔』(神宮司庁教導部、一九五六年)、二三三頁。
- (15) 「三方会合記録」二卷、承応二年八月二十九日条(神宮文庫所蔵、図書番号一門三五五八号)。なお、本章で使用する史料は特に断らない限り、すべて神宮文庫の所蔵である。
- (16) 塚本明「山田奉行の裁許権」(『三重大史学』二号、二〇〇二年)。
- (17) 前掲「三方会合記録」一巻、寛永四年正月条。
- (18) 「外宮引付^{天正}_{明暦}」寛永十四年二月条(一門四一四四号)。当史料は、天正から明暦までの出来事や文書類を記した引付である。「松木氏之蔵書」との蔵書印が確認できることから、外宮禰宜

家の松木家で伝わったものであると考えられる。

(19) 前掲『新稿 社寺参詣の社会経済史的研究』、九二～九四頁・三七五～四三二頁。

(20) 櫻井勝之進「大物忌」(『伊勢神宮の祖型と展開』、国書刊行会、一九九一年)、一九三頁。初出は、「大物忌について」(『社会と伝承』六卷五号、一九六二年)。

(21) 岩間宏富「中世における神宮物忌の活動について」(『神道史研究』四九卷三号、二〇〇一年)。なお、このような子良館の變化がいつ起きたかについては、市村高男氏の指摘を目安としておきたい。同氏は、「中世都市研究会二〇〇六・三重大会」の全体討論において、伊勢神宮で多数の参宮者を受け入れる「態勢」が整ってくるのは天文年間であるとしている(『全体討論』都市をつなぐ)、伊藤裕偉・藤田達生編『都市をつなぐ——中世都市研究13——』、新人物往来社、二〇〇七年、二二二頁)。

(22) 「宮中物語」(二門一〇八〇七号)。当史料は、近世前期に外宮宮域内で起きた出来事をまとめたもので、高宮守見物忌を勤仕し、寛文元年(一六六一)四月十八日に七十二歳で没した御巫清弘が書き留めた記録である。多くの文書や法規を載せている点に特色がある。奥書によると、その清弘の孫にあたる清集の蔵書を西村高義が享保十九年七月八日付で書写したものである

るとされる。以下、断らない限り、当史料を出典とする。

(23) 前掲「外宮引付天正明暦」寛永十二年極月条収録。

(24) 「皇継年序記」寛永十二年条(『二宮叢典 前篇』所収、吉川弘文館、一〇二五頁)。

(25) 「廿八箇条沙汰文」延宝六年四月条(一門七一六号)。

(26) 「外宮神宮法例」(二門二九八七号)。奥書によると、これは外宮権禰宜であつた河崎延貞が、新たに着任した山田奉行(久永重高)へ提出する目的で、外宮の職制などについてまとめたものである。

(27) 寛永二十一年正月に山田奉行の指示を受けて、運上金制は廃止されている(前掲「宮中物語」)。

(28) 「岩戸」とは、現在の高倉山古墳を指す。近世においては、この「岩戸」は天岩戸と見做され、多くの人々が参拝に訪れる場所であつたとされる。詳しくは、佐古一洌「高倉山・天岩窟信仰について」(『瑞垣』一〇七号、一九七五年)を参照。

(29) 前掲「外宮神宮法例」。

(30) 「宮人沙汰文」寛文二年九月条(一門三五五七号)。当史料は、寛文二年九月から十二月にかけて起きた「子良館神楽御供料」の賽銭の「口まへ取」をめぐる宮人と物忌父との争論についての記録である。

(31) 宮人に関しては、管見の限り「外宮子良館旧記」延徳四年（一四九二）五月十三日条にその姿が確認でき、このころには既に存在していたものと考えられる（前掲『二宮叢典 前篇』所収、九五八頁）。

(32) 寛永飢饉については、藤田覚「寛永飢饉と幕政」（『近世史料論の世界』所収、校倉書房、二〇一二年）を参照。初出は「寛永飢饉と幕政」（『歴史』四九・五〇号、一九八二・一九八三年）。

(33) 前掲「外宮引付天正明暦」寛永十八年四月条。

(34) 同右。

(35) 前掲「皇継年序記」寛永十八年条。

(36) 前掲「外宮引付天正明暦」寛永十八年四月条。

(37) 脱字が看取されたため、【】の部分は「外宮引付天正明暦」（前掲）寛永十八年四月条に収録の「宮中掟」をもとに補った。

(38) 前掲「外宮引付天正明暦」寛永十八年五月条。

(39) 同右。

(40) 絶交された禰宜・権禰宜に関しては史料によって若干の異同がある。前掲「外宮引付天正明暦」では、松木信彦（四禰宜）・松木全彦（六禰宜）・松木満彦（七禰宜）・檜垣常和（八禰宜）松木為彦（九禰宜。別名集彦）、檜垣内膳（常幸）・檜垣三河（貞光）・檜垣主馬（宣尚）・檜垣五郎兵衛（常内）・松木修理（盛彦）・松

木主計（慶彦）・松木弥六郎（雅彦、別称長作）・檜垣河内（貞次。別称主馬）、の十三名としている。対して、前掲「宮中物語」

では、絶交されたのは、松木信彦（三禰宜）・松木全彦（五禰宜）・松木満彦（六禰宜）・檜垣常和（七禰宜）・松木集彦（八禰宜）・檜垣貞和（九禰宜）、檜垣内膳・檜垣三河・檜垣主馬・檜垣五郎兵衛・松木修理・松木主計・松木長作・檜垣全左衛門（不詳）・檜垣作之丞（不詳）、の十五名とする。試みに、『外宮禰宜年表』（神宮司庁編『神宮典略 二宮禰宜年表』所収、臨川書店）をもとに、寛永十八年五月における禰宜の序列・補任を確認すると、「外宮引付天正明暦」の記述は誤っており「宮中物語」の記述が正しい。従って、絶交された禰宜・権禰宜も「宮中物語」が記す十五名の方が正確である可能性が高い。なお、同年十一月二十二日付で禰宜たちが山田奉行所へ提出した訴状には「山田惣中、舟江・川崎迄以二権威一悉触廻し禰宜六人・権任七、八人を撥し出し、万事之買物迄相留候」とある（前掲「外宮引付天正明暦」同年十一月条）。

(41) 「神宮引付」寛永十八年五月条（二門四一五〇の二号）。当史料は、寛永十四年から元禄二年までの記録で（枝番号一〇二二号）、外宮禰宜職を勤仕した檜垣貞和とその子の常方（常副）の日記記（一部）と考えられる。常方が禰宜に就任する寛文年間

までのものは、貞和の手による日次記であると推定される。

(42) 前掲「神宮引付」寛永十八年五月条。

(43) 同右。

(44) 前掲「外宮引付」天正
明暦寛永十八年五月条。

(45) 同右。

(46) 同右。

(47) 前掲「神宮引付」寛永十八年五月条。

(48) 前掲「外宮引付」天正
明暦寛永十八年五月条。

(49) 同右、寛永十八年六月条。なお、この訴状においては、外宮三禰宜・五禰宜・六禰宜・七禰宜・八禰宜・九禰宜が名前を連ねている。

(50) なお、祭主からの下問は山田三方に対しても行われており、山田三方は明瞭に回答している（前掲「神宮引付」寛永十八年六月条）。

(51) 前掲「外宮引付」天正
明暦寛永十八年八月条。

(52) 山田奉行の花房幸次が寛永十八年四月十二日に没したため『寛政重修諸家譜』巻九十、『新訂 寛政重修諸家譜』二、続群書類従完成会、二〇七頁）、山田奉行は不在となっていた。その後、

一、(寛永十八年)同年十月、石川八左衛門殿両宮御奉行二被_レ為_二仰

付_一候而御越也、（後略）、

とあるように、十月に石川正次が山田奉行として赴任している

（前掲「外宮引付」天正
明暦寛永十八年十月条）。

(53) 前掲「外宮引付」天正
明暦寛永十八年十一月条。

(54) 同右、慶安五年七月条。

第五章 山伏から御師への転身―内宮御師風宮兵庫大夫家を例に―

はじめに

本章は、山伏から御師への転身とその背景について考察するものである。

中世後期、伊勢神宮の膝下で生活する山伏たちは、勧進を行うとともに、各地からの参宮者を迎えていた。彼らの活動は、御師たちの行う活動(特定の旦那・旦那所に御祓を配る廻旦那など)と類似したものであったとされ、山伏の属する寺院と御師との間での旦那・旦那所の譲渡さえも行われていたことが明らかにされている⁽¹⁾。他方、近世においては、このような山伏による「御師活動」が次第に確認できなくなることとも周知の事実である。

従来の研究では、中世・近世の御師による廻旦那の実態に関心が集中し⁽²⁾、右のような活動の断絶が存在していることについては、塚本明氏によって断絶の時期が指摘されている限りで(後述)、踏み込んだ考察はなされて来なかった。両者の活動が競合するものであった事実を重視するならば、山伏たちの御師活動が断絶し、御師たちによる活動の独占へと向かうまでの過程を跡付ける必要がある。

そこで本章では、もともと山伏であったとされる内宮御師の風宮兵庫大夫家(以下、「風宮家」と記す)を対象に、同家が如何なる過程を経て、御師

へと転身することになったかを浮き彫りにしてみたい。この転身の事例に着目することにより、山伏による御師活動が断絶に至るまでの道筋と、山伏が御師へと転身した要因を具体的に明らかにすることが可能であると考ええる。

では、山伏からの御師への転身の要因として何が想定されるのだろうか。関連する成果として最初に挙げられるのは、近世の伊勢神宮と鳥居前町における神仏関係について考察した塚本明氏の研究である⁽³⁾。同氏は、伊勢神宮とその鳥居前町において、神と仏とが区別されつつ併存していたことを論じた上で、この「分離」を推し進めた「動力」として「神宮の神官たちが、諸国を巡回する神宮御師としての立場から、活動が共通し利害が対立しかねない山伏らを排除しようとした点」と、「伊勢神宮を保護し、その本来あるべき姿を維持する」役割を担っていた山田奉行による「行政的な容喙」の二点を指摘している。この見解は、同地域における近世を通じた神仏を「分離」する動きの主要な「動力」を説明するものとして極めて説得力を持つ。

ただ、これらの「動力」は、近世全体を通じて確認される動きを総括して導き出されたものであり、本章で扱う限られた期間(近世前期)での事例の説明に用いるには不適當であろう。従って、近世前期に焦点を絞り要因を考える必要がある。

ここで注目したいのは、神社とその宗教者に関する近世前期の二つの動向である。第一に、神社内の仏教的要素を排除しようとする主体的な動きが挙げられる。例えば、出雲大社では、中世以前に遡る同社の「鰐淵寺との徹底した神仏隔離と相互補完関係の上に成り立っていた」という「特異な歴史的伝統」が一つの背景となって「本願の追放・廃止と大社境内からの仏教施設の撤去」が実施されたとされる⁽⁴⁾。伊勢神宮においても「仏教忌諱の伝統」が存在していたことを考慮すると⁽⁵⁾、同大社と同様の動きが起きたことが想定されよう。

第二に、宗教者の職分を明瞭にする動きが挙げられる。高埜利彦氏によると、近世前期は「社会全体にわたった多様な職分の分化」が進行した時期であるとされ、とりわけ、「宗教者すなわち僧侶・山伏・神職・陰陽師のそれぞれの職分は、一七〇〇年前後の元禄期頃、相互に侵し合わないよう境界が格段に明確化された⁽⁶⁾」とされる。

近世前期に焦点を絞ると、右に示した二つの動向が転身の要因として考えられるのであり、本章では、このような動向による変化が風宮家の前身とされる山伏（後述）の前にどのような形で立ち現われたのか、という視点から論考を進めてゆくこととする。

また、今回、対象とするのは風宮家である。近世の同家は、鳥居

前町（内宮側）の宇治に居住し、御師であるとともに、内宮の別宮である風日祈宮（かさひのみみや）の参道に架かる風日祈宮橋（別称 五十鈴川橋）の管理を行う「風宮橋支配人⁽⁷⁾」であった。同家は、近世前期に風日祈宮橋（以下、「風宮橋」と記す）の袂にあった穀屋⁽⁸⁾の山伏から御師へと転身したとされており⁽⁹⁾、この問題に関して上相英之氏は、「万治元年（一六五八）には、宮中の火事により風宮橋の穀屋も焼失し、これを機に穀屋は廃止され、明慶院は宇治郷の岩井田に遷され、風宮兵庫大夫と名乗るようになる⁽¹⁰⁾」として、万治元年の宮城内での火災に伴う穀屋の廃止と転居を転身の直接的原因に求めている。しかしながら、後述するように、万治元年以降も山伏としての称が使用され続けていたことを考えると、上相氏の指摘のみでは不十分であり、他の理由を検討する必要があるように思われる。

以上をもとに、風宮家の事例を取り上げ、その転身の過程を考察してゆきたい。

一 内宮宮域と穀屋・山伏（近世初頭）

ここでは、近世初頭の風宮橋と穀屋の山伏との関わりについて検討する。中世後期においては、伊勢神宮は神領からの収入の途絶という事態に直面し、宮城内の社殿や橋の造替にすら支障をきたすに至る。そのため、内宮の風宮橋造替などに、勧進を行うといった形

で山伏などの仏家が関与することとなる⁽¹¹⁾。しかし、近世に入ると、伊勢神宮の造替に関する費用は、統一政権から安定して支弁されるようになり、それに伴い勧進を行っていた山伏たちの関与は徐々に削減され、さらに、宮域内から仏教的要素が排除されてゆくこととなった⁽¹²⁾。

このような中で問題として浮上したのが風宮橋の袂に位置する穀屋の存在である⁽¹³⁾。元和五年（一六一九）八月二十二日、宇治の住民組織である宇治会合から内宮に対し左のような願書⁽¹⁴⁾が出された。

乍^レ恐申上候

風宮橋之こく屋之儀御やすめ可^レ被^レ成之儀ニ付御理申候へ共、御かつてんなき之由宇兵衛殿御申候、諸事神慮儀、大日於^レ背ニ御意ヲ一者何やうニも郷内より可^ニ申付一候、但こく屋之儀ハむかしより有^レ之儀ニ候間、いくへにも御理可^ニ申上^一候、以上、

元和五年

内宮

八月廿二日

上両郷（印）

家司大夫殿

内容をみると、①大日が神慮に背く場合は宇治会合（上両郷）より申しつける、②穀屋は昔よりあるものであるからその廃止はお断りする、旨の二点を内宮長官（一禰宜）の被官である家司大夫を通

じて内宮へ伝えており、①にみえる「大日」とは、風宮家の先祖とされる大日を指すと考えられることから⁽¹⁵⁾、内宮が穀屋とその山伏を宮域内から除こうと迫ったことが読み取れる。「宮奉行沙汰文⁽¹⁶⁾」には、この願書に関して、

(1)風宮橋の穀屋は、文明年間に十穀聖である乗賢⁽¹⁷⁾が現れて以来、風宮橋の北詰に一丈四面の規模で建てられており、穀屋の山伏たちは参宮者の幣物を以て、橋の掃除や参道の修繕などを行っていた。

(2)慶長年間の末より大日が穀屋の近くに居宅を建て、住むようになった。

(3)内宮が穀屋の廃止を迫った理由の第一は、穀屋の山伏が、居宅に妻子を置き、奴婢・僕従を抱え、橋の川上で下着を濯いだり、魚肉等を洗ったりするからである。

(4)廃止を迫る理由の第二は、山伏が錫杖を振ったり、鈴を鳴らしたりして、寺院のように振る舞うからである。

(5)これら(3)・(4)のことに關して、内宮よりたびたび異見を加えたが、奴婢・僕従たちは内宮からの命も聞き入れず、宮域内で不浄ばかりを行っている。

(6)当時、内宮長官であった藺田守基は、山伏の宮域内での居住をやめさせ、他所へ穀屋を移転させようとしていたが、大日

は宇治の人々からの篤い帰依を受けていたため、宮奉行⁽¹⁸⁾も手を出し兼ね、実現しなかった。

(7) 穀屋は宇治会合の会合場所としても使用されており、宇治会合はこのためもあって内宮からの命を断った。しかし、内宮長官は、宮域内のことは内宮長官の支配であり、穀屋は宮域内に不適切な存在である、として穀屋の移転または破却を迫った。

という説明がなされている。

まず、(1)と(2)から穀屋の山伏が風宮橋の袂に住むようになっていったことが窺われる。そして、穀屋とその山伏を排除しようとする動きは、(3)と(4)の点において、「穀屋とその山伏は宮域内に似つかわしくない」という内宮の意向によるものであったことがわかる。具体的には、山伏が宮域内で生活を営み、寺院が存在するかのような様相を呈していたことが問題視されたのである。

この後、同年八月吉日付で宮奉行から内宮長官に対し、八月二十六日に至っても穀屋と大日が立ち退かなければ宮奉行が穀屋を取り壊す旨の怠状⁽¹⁹⁾が提出された。前掲の「宮奉行沙汰文」には、

右宮奉行中より大日坊方へ雖^レ令^ニ催促^一、廿五日ニ至迄穀屋をも取不^レ毀、方々奔走而雖^ニ佗申^一、取持人も無^レ之、年寄会合より之荷担も依^レ無^レ之、元和五年八月廿六日宮奉行惣中出合、穀

屋ヲ取こほし、于^ニ其後^一大日坊下畑村今之仙松庵之寺屋敷ニ穀屋を令^レ建^ニ立^一之、

とある。すなわち、怠状にある通り、宮奉行によって元和五年八月二十六日付で穀屋は取り壊され、穀屋と大日は「下畑村⁽²⁰⁾」へと移ることになったのである。

その後、元和十年(一六二四)二月二十一日に、慶光院の周清や法楽舎の光秀などの口入れを以て、大日から左のような詫状⁽²¹⁾が内宮へ提出される。これにより穀屋が風宮橋の袂へ戻されるとともに、大日も同所へ還住した⁽²²⁾。

風宮穀屋御佗事申^ニ付^一一書之事

- 一、仏絵をかけ、りんをならし、錫杖をふり申間敷事、
- 一、女子ををき、万むさき物を川上にてあらいて申間敷事、
- 一、屋敷勧進所ともに北へ五間、同西東九間也、

右穀屋屋敷代々之御長官様依^ニ御徳^一、此度御上人様・法楽舎以^ニ御肝煎^一被^ニ借置^一上、右之旨於^ニ相違仕^一何時成共可^レ為^ニ御意次第^一候、仍如^レ件、

内宮風宮穀屋大日坊

貞熙(花押)

元和十年二月廿一日

同使法楽舎

光秀（花押）

（印）

内宮

御長官様

同

御神主中

参

この詫状から、大日が元和五年の立ち退きの際に問題となった諸点を行わない旨を誓約していることがわかる。さらに、穀屋とその山伏の居宅が宮域内に存在することは、内宮長官の特別の計らいによるものであることが改めて確認された。つまり、穀屋とその山伏は、①寺院と認識されるような言動をやめる、②宮域内での生活を慎む、③内宮の統制下に入る、といった掣肘を加えられた条件下のもとで、風宮橋の袂に戻るようになったのである。特に①は、内宮が穀屋の山伏の活動を、勧進で浄財を募ることに、風宮橋の管理維持を行うことに抑制しようとしたと捉えられる。

以上をまとめると次のようになる。中世後期、風宮橋の造替には山伏が関与していた。しかし、近世に入ると、造替の安定化に伴い、穀屋とその山伏は、宮域内に似つかわしくない存在として立ち退きを迫られた。交渉の結果、両者は故地へ戻ることを許されたが、寺

院としての活動が制限されることとなった。すなわち、中世後期において造替を支えていた山伏という仏家の存在は、近世への移行の中で、内宮にとって異質な存在として認識されるようになり、排除の対象へとなっていたのである。

二 山伏から御師へ（近世前期）

ここでは、穀屋の山伏の御師への転身について、「寺」としての穀屋の機能・山伏の職分・宮域外への転居という三点に焦点を絞り検討する。

（1）「寺」としての穀屋

まず、風宮橋の穀屋がいつの時点まで、公的な「寺」としての機能を有していたか、という問題について考えてみたい。楠部村の宗門改帳（作成年不詳）の断片には、左のようにある（23）。

しんこん

後家

宇治風のミヤ

般若坊（花押）

子三人 男中之坊・六兵衛

女上り、下人二人

これは、宇治近郊の農村である楠部村に居住していた般若坊一家の記載である。風宮橋の穀屋が真言宗の寺院であったと伝えられていることを考慮すると（24）、「宇治風のミヤ」とあるのは、内宮別

宮の風日祈宮を指すのではなく、穀屋を指すと捉えるのが妥当であろう。従って、穀屋は近世前期の一時期、檀那寺としての役割を果たしていたと理解できる。

しかし、寛永二十年（一六四三）三月十一日付の同所の宗門改帳（25）をみると、

中之地藏

一、真言 不動坊檀那

男女七人

般若坊（印）

同母親

男子中之坊

同六兵衛

女子上り

下人与作

下女さふ

となっており、般若坊一家の檀那寺が穀屋から不動坊に変更されていることがわかる。試みに、同年三月十八日付の宇治の宗門改帳（26）をみると、穀屋とその山伏の存在は、まったく確認できない。ここで注目されるのは、宇治の今在家町に居住する重右衛門という人物である。

（禪宗）
同

一、恵日寺旦那

男女合五人

重右衛門（印）

同女房

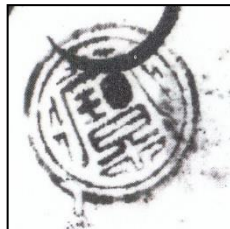
同母親

子同次郎介

同下女一人

重右衛門が禪宗の恵日寺を檀那寺としていたことがわかる。その印形をみると、【写真1】のようになっている。さらに、寛永十六年（一六三九）八月十五日付で穀屋の山伏である三位（27）が山田奉行宛で作成した書付（案文）の印形部分を挙げると、【写真2】のようにある（28）。

【写真1】「上岡郷寛永二十年宗門改帳」印形部分



【写真2】「風宮橋之目録 花房志摩守宛」印形部分



写真1・2を見比べると、印形が一致することに気づく。つまり、重右衛門と三位は同一人物であったと指摘でき、寛永二十年の時点で、穀屋の山伏は俗家として宗門改を受けていたことが明らかとなる。

すなわち、少なくとも寛永二十年においては、穀屋の山伏は公的には俗家として把握されていたのであり、穀屋も「寺」として数えられておらず宮城内に存在しないことになっており、「寺」としての機能も喪失していたと考えられる。

(2) 御祓配りをめぐる争論

次に、穀屋の山伏の御祓配りについて、慶安元年と承応三年（明暦元年の二度に亘って争われた「内宮六坊出入」と称される一件が穀屋とその山伏に与えた影響からみてゆく。この一件は、宇治の六坊（明慶院・清水寺・法楽舎・明王院・成願寺・地藏院（広嚴寺）の一つである成願寺の願人（山伏）が山田（外宮側の鳥居前町）の御師三日市兵部の旦那所へ御祓を配ったことを発端とするもので、六坊の諸国勧進のあり方が焦点となった争論である⁽²⁾。同一件は、三日市兵部や宇治会合・山田三方（山田の住民組織）と六坊との間で争われることとなった。六坊のうちの明慶院が穀屋の山伏であり、風宮家の先祖に数えられる明慶院定清である⁽³⁾。

この争論における三日市兵部の主張は、もともと六坊は寺の御札

のみで勧進を行っていたが、近年、それを御祓に直して配るようになったので六坊を山田奉行へ訴えた、というものであり、対して、六坊の主張は、どの御師の旦那所であっても、修造勧進のために遣わした願人は、古来より寺の御札に御祓を添えて勧進を行ってきた、というものであった。

慶安元年（一六四八）十一月二十九日、両者の間で次のような形で和睦が成る⁽³¹⁾。

(1) 六坊の主張の通りであったとしても、寺修造の勧進に御祓を配るのは相応しくない。よって、修造のために派遣した願人は、その寺の御札をもって施物を受けるべきであるから、以後、御祓を配らせてはならない。

(2) 六坊が有している旦那所に限っては、御祓を配ってもよい。つまり、六坊は勧進において御祓を配ることが禁止され、御師のように御祓を配ることは、自らが持分として有する旦那所への廻旦のみに限定されたのである。

その後、六坊のうち、明慶院・清水寺・地藏院の三か寺は、承応三年（一六五四）正月二十二日、「如^二古来^一国々所々江御祓致^二持参^一、勧進仕候様被^二成下^一度旨」を再び山田奉行所へ訴えた⁽³²⁾。さらに、明暦元年五月、江戸へ下り寺社奉行に訴訟を行ったが、その結果は、

内宮三カ寺之山伏江戸表江罷下り候而、寺社御奉行所江目安差上、御訴訟奉_レ申上_一候処、山伏仏家之札ニ御祓を添、諸国配候義不相當之旨被_レ仰渡_一、重而御訴訟申上候ハ、曲事可_レ被_レ仰付_一旨ニ而、両宮之年寄理運被_レ仰付_一事、

とあるように(33)、山伏が寺の御札に御祓を添えて配ることは相応しくないとして、三か寺の全面的な敗北に帰する結果となった。ただ、寺社奉行の裁定のよって山伏の御祓配りが完全に禁止されたわけではなく、裁定以降も保有する特定の旦那所に限って、山伏の廻旦が認められていた(34)。

以上から、この一件を通じて、御祓を配るという行為が、基本的には御師の職分に属するものとして割り振られ、御師の行う廻旦と山伏の勧進とが峻別されたことがわかる。これにより、六坊の山伏たちは生計のあり方を、①寺院としての勧進、②保有する旦那所への廻旦、に限定されることになったのである。とりわけ、穀屋とその山伏(明慶院)に関しては、当時、穀屋が寺院としての実態を失いつつあった事実(一節・本節一項参照)を勘案すると、①から得られる浄財は僅かなものであったと考えられる。つまり、穀屋とその山伏の主要な生計は、事実上、②に限られてしまったと指摘できよう。

(3) 宮城外への転居と御師への転身

最後に、穀屋の山伏から御師への転身の具体的様相をみてゆく。万治元年(一六五八)十二月晦日、内宮の宮域を火災が襲い、穀屋と山伏の居宅はすべて焼失してしまう【図1】。

【図1】「所炎上図」部分(「万治元年内宮炎上記」所載)



これを受けて、同年閏十二月四日には大宮司が「彼山伏寺も焼失仕候間作事不_レ仕、以前二他所江うつし候様ニ仕度」として、翌年正月十日には禰宜たちが「宮中之住居停止可_レ仕」として、穀屋と

その山伏を宮城外へ立ち退かせるよう山田奉行に要請し（35）、同年二月には、宇治岩井田の新屋敷町への立ち退きが実施される運びとなった（36）。

前述したように、上相英之氏は、この転居を転身の原因としている。しかしながら、この見解には問題が残る。【表1】は、「風宮家文書（37）」の所収する案文などをもとに、火災の起こった翌年から「風宮兵庫大夫」という御師として称が定着する元禄二年までの作成文書の差出部分を一覧にしたものである。

一見して、万治二年の転居以降も、山伏としての称が使用され続けていることが読み取れ、転居が転身の直接的な原因ではないことがわかる。注目すべきは、延宝二年（一六七四）と延宝八年の間に、明確な名称の変化が存在する点である。この変化を重視するならば、転身は延宝二年と延宝八年の間に起こったと考えることができる。

ここで参考となるのは塚本明氏の指摘である。同氏は、延宝三年九月に山田奉行によって、寺院や仏家が御祓を配る「御師活動」が禁止されたことを指摘し、『仏家』の者が神宮の御師として活動すること」が否定された事実に着目している（38）。転身との関連を探るため、この政策の具体的な内容をみておきたい。

「神宮編年記 守秀記」の明和七年（一七七〇）七月十一日条に左のようにある（39）。

【表1】作成文書にみる山伏（明慶院）から御師（風宮兵庫大夫）への呼称の変化（万治2年～元禄2年）						
番号	史料名	作成年	年月日	差出	宛名	神宮文庫図書番号
1	風宮古橋並鳥居建立の儀	1659年	万治二己亥年二月三日	風宮橋穀屋別当明慶院	進上 御奉行所様 石川大隅守様・岡田将監様	1門17669-162
2	風宮御橋古材納先 御奉行所宛	1659年	万治貳歳二月三日	風宮橋穀屋別当明慶院 定清（花押）	謹上 御奉行所様	1門17669-182
3	乍恐言上申上候 奉行所宛	1660年	万治三年九月廿一日	風宮橋穀屋別当明慶院 定清（印）	御奉行所様	1門17669-21
4	乍恐御口上申上候	1661年	万治四年辛丑年二月十三日	風宮穀屋明慶院 定清（印）	進上御奉行所様	1門17669-30
5	乍恐言上 御奉行所宛	1674年	延宝貳年寅九月廿二日	内宮風宮明慶院	御奉行所様	1門17669-44
6	風宮御橋何角入用之目録	1680年	延宝八申年閏八月五日	風宮穀屋兵庫大夫	なし	1門17669-109
7	風宮橋御入用何角目録 石川大隅守・八木但馬守・岡田豊前守宛	(1687年)	(貞享四年力)	風宮穀屋兵庫之大夫	寛永年中 石川大隅守様 万治年中 八木但馬守様・岡田豊前守様	1門17669-159
8	風宮橋造替之節諸料物之覚	1689年	元禄二己巳年正月廿五日	風宮兵庫大夫	進上御奉行所様 橋奉行 大嶋豊前守様・岡田駿河守様	1門1705

すべて神宮文庫所蔵。特に、8以外の1～7は「風宮家文書」所収の案文をもとに作成。なお、7の作成年は同文書の端裏書の記載から推定した。

寛文六年寺院より諸国江御祓賦り候義指留候、引留致^二吟味^一候
処、寛文六年之留書ニ右等之義相見不^レ申候、六ヶ寺為^二修造^一
願人御祓賦り候義ニ付、慶安年中六ヶ寺内三ヶ寺江戸江罷下り
御訴詔申上候、其節山伏之御祓賦り候事不相応之旨御差留被^レ
成候、乍^レ然其後迎茂延宝之頃迄者御祓賦り候儀有^レ之様相見候、
延宝三年之留書ニ九月五日ニ六ヶ寺祓銘之事ニ付差留申候得者
致^二承知^一、或者旦那をゆすり、或者俗名ニ相改、仏家之御祓
賦り不^レ申答ニ罷成、則同七日 御役所江茂六ヶ寺召連御
届申上候事、ヶ様之順合ニ相見候得者、急度相止り候義者延宝
三年と相見申候、

これは、当時、問題となっていた「慶光院内院拝礼一件（4）」に
関して、先例調査の一環として同年七月七日に内宮が行った下間に
対する宇治会合からの答申である。内宮からの「寛文六年に寺院・
仏家から諸国へ御祓を配ることが禁止されたのか」という質問に対
して、宇治会合は、記録の内容をもとに「禁止された寛文六年では
なく延宝三年である」と回答しており、延宝三年の九月五日に、宇
治会合から六坊へ申し入れを行い、これによって、或者者は旦那所
を他へ譲り、或者者は俗名に改めて俗家になった、ということが確
認できる。

さらに、山田の事例も挙げておく。「三方会合記録」延宝三年九月

条に（41）、

寺方道者持候義有^レ之ニ付、何方江成共俗家ニ相譲師職之勤相
止可^レ申様御奉行所より被^二仰渡^一候ニ付、会合より町々江申渡
事、右ニ付岡本町文殊寺・同町南之坊道者者此後祓遣申間敷旨
申渡、一札取置候旨同町より申出、一之木町越坂恩一坊旦那
義ハ二本杉左兵衛江相譲候旨同町より申出、岩淵町称一坊旦那
之義ハ久保倉右近方江相譲候旨同町より申出、世義寺坊中より
ハ向後祓納候義相止候旨申出候事、

とあり、山田では、寺院の旦那所は、すべて俗家に譲り渡すことにな
ったことがわかる。

つまり、山田奉行の指示を受けて、旦那所を有する宇治・山田の
寺院・仏家は、①旦那所を俗家の者に譲る、②俗名に改め俗家にな
る、という①・②のどちらかへの選択を迫られたと考えられる。で
は、穀屋の山伏が②を選んだ証左はあるのだろうか。

元禄四年二月八日付で風宮家の隠居である風宮定清が宇治会合に
対して「風宮」を称することの正統性を説明する目的で作成した訴
状の案文（42）をみると、二三か条目に

（以下、抹消の上、修正）
一、慶光院殿御祓御停止之由、夫仍而先之年寄衆中私ニも旦那

方御祓配候ハ、俗家ニ罷成候様との下知ニ付俗家ニ罷成候
へ者次第く迷惑仕候御事、今度御訴訟被^二仰上^一何事前々

之通ニ成シ被^レ下候様奉^レ願候、以上、

とある。この箇条は、全文抹消され、新たに書き直されているのであるが⁽⁴³⁾、ここで風宮定清は「慶光院の御祓配りが停止されたという」ことで、私もそれによって、宇治会合の年寄たちから『御祓を配るのであれば俗家になるように』と命じられたので俗家になった」と述べている⁽⁴⁴⁾。ここから、穀屋の山伏が廻旦を続けるために②を選択した⁽⁴⁵⁾ことが確かめられる。

従って、穀屋の山伏が風宮兵庫大夫という御師へと転身した直接的原因は、穀屋とその山伏の居宅の焼失とそれに伴う宮域外への転居だったのではなく、山田奉行が寺院・仏家の御師活動を禁止したことに求められると考えることができる。

以下、(1)・(2)・(3)をまとめる。前節でみたように、近世に入ると、穀屋とその山伏は、宮域内に似つかわしくない存在として認識され、寺院としての活動の制限を求められた。そのような状況下のなかで、穀屋は「寺」としての機能をも失ってゆき、少なくとも寛永二十年においては、穀屋とその山伏の存在は、公的には存在しないものとして扱われていた。そして、万治二年二月には、穀屋と山伏の宮域外への立ち退きを余儀なくされる。また、山伏が穀屋を維持する上で不可欠であった御祓配りも、慶安から承応年間に起こった争論の結果、山伏は御師たちと同質の廻旦の形でしか行え

なくなつた。そして、延宝三年九月には、山田奉行によって、この廻旦さえも完全に禁止され、穀屋の山伏は御師への転身を行った。この処置の背後には、寺院・仏家が御祓を配ることは相応しくないという幕府の認識(本節二項参照)があつたと理解でき、俗家であることが御師として必要な条件となつたと考えられる。

おわりに

本章で明らかとなつた内容をまとめる。中世後期において、風宮橋の造替には山伏が関与していた。しかし、近世に入ると、穀屋とその山伏は、宮域内に似つかわしくない存在として立ち退きを迫られ、結果、寺院としての活動が制限されてゆくこととなつた。そして、万治二年二月の火災の際に、大宮司や禰宜たちの要請によって、穀屋と山伏の宮域外への立ち退きが決定する。また、穀屋の山伏は、御祓を用いた勧進を主要な収入源としていたが、慶安から承応年間に争われた「内宮六坊出入」を機に、御祓を自由に配ることが禁止され、特定の旦那所へ御祓を配る廻旦に限定されてしまう。そして、延宝三年九月には、このような「御師活動」も山田奉行によって禁止された。これを受けて、穀屋の山伏は風宮兵庫大夫という御師へと転身を遂げる。

以上の穀屋の山伏の事例から、山伏による御師活動が断絶に至る

までの道筋を素描できたと考える。そして、このようにみてゆくと、山伏の転身には、近世前期の二つの変化との直面が要因として存在していたことがわかる。一方は、伊勢神宮との関係の変化が挙げられる。すなわち、仏家である山伏が宮域内に関わり続けることが問題視されるようになったのであり、このため、山伏は、その活動を大きく制限されることとなった。もう一方は、職分をめぐる変化が挙げられる。すなわち、幕府によって山伏が御祓を扱うことが問題視されるようになったのであり、穀屋の山伏に即してこの影響を考えると、主要な収入源の途絶を意味したといえる。とりわけ後者は、直接的な転身の要因として位置づけられ、これによりに、中世後期以来、山伏たちによって行われていた御師活動は完全に断絶することになったのである。

なお、山伏を前身とする御師家のその後の活動に関しては、他の御師家との相違の有無など興味深い課題が残る。これに関しては、風宮家や他家の事例をもとに別稿を期したい。

(1) 西山克『道者と地下人』(吉川弘文館、一九八七年)・宮家準「伊勢の山伏と比丘尼」(宮家準編『修験道の地域的展開と神社』所収、國學院大學21世紀COEプログラム「神社と民俗宗教・修験道」研究会、二〇〇六年)。

(2) 例えば、新城常三『新稿 社寺参詣の社会経済史的研究』(塙書房、一九八二年)・久田松和則『伊勢御師と旦那―伊勢信仰の開拓者たち―』(弘文堂、二〇〇四年) など。

(3) 塚本明「近世伊勢神宮領における神仏関係について」(三重大学人文学部文化学科『人文論叢』二七号、二〇一〇年)。

(4) 井上寛司「近世初頭における出雲大社の『神仏分離』」(『國學院雑誌』一〇四卷一一号、二〇〇三年)。なお、同氏は、近世前期にみられる神仏を分離しようとする動きを安直に「神仏分離」と評価することに疑義を呈し、吉田神道との関係性等も踏まえた上で、それぞれの事例の個別性・特異性と普遍性との統一的把握に立脚して、個々の事例を再検討・再評価することが必要であると指摘している。

(5) 伴五十嗣郎「近世神宮祠官の遷宮観」(『皇學館大学神道研究所紀要』十五輯、一九三六年)。

(6) 高埜利彦「十八世紀前半の日本―泰平のなかの転換―」(『岩波講座 日本通史』13巻近世3所収、岩波書店、一九九四年)、

一六〇一八頁。後に『近世の朝廷と宗教』(吉川弘文館、二〇一四年) 所収。

(7) 嘉永元年十月付で作成された御会合衆中宛の口上書(案文)の差出に「風宮橋支配人 風宮兵庫大夫」(「奉願上口上」風宮橋修覆の件)、神宮文庫所蔵、図書番号一門一七六六九の二〇〇号)とあることなど。以下、本章で使用する史料は特に断らない限り、すべて神宮文庫の所蔵である。なお、風宮橋については音羽悟「風日祈宮橋の歴史について」(『瑞垣』二一七号、二〇一〇年)、風宮家と風宮橋との関わりに関しては上相英之「神宮渡始式における老女―その名称と担い手を中心に―」(『人間文化H&S』一二二号、二〇〇七年) に詳しい。

(8) 穀屋(穀屋坊)とは、社堂の破損の修理や坊舎の管理、そして、そのための勧進活動などを行う聖集団の「寺院内における彼らの活動の拠点」を意味するとされる(吉井敏幸「近世初期一山寺院の寺僧集団」(『日本史研究』二六六号、一九八四年、五三頁)。従って、風宮橋の穀屋は、同橋の造替に関わっていた山伏たちの活動の拠点であったと考えられる。西山克氏は「この穀屋は、あるいは内宮法楽舎の末端施設であったのかも知れない」と法楽舎との関係を推量している(「聖地のディスコース―伊勢参詣曼荼羅をテキストとして」、葛川絵図研究会『絵図のコ

スモロジー 下巻』所収、地人書房、一九八九年、二二〇頁）。なお、中世後期の勸進聖と山伏との「親縁性」については太田直之『中世の社寺と信仰―勸進と勸進聖の時代―』（弘文堂、二〇〇八年）を参照。

- (9) 藺田守良『神宮典略』三十六卷「風宮橋」（神宮司序編『神宮典略 後篇』所収、臨川書店、五九一―五九二頁）。なお、元文元年十二月付で、風宮家によってまとめられた同家と風宮橋の由緒に関する書付（案文）によると、御師家になる以前の、歴代の山伏の系譜関係は、観阿弥―正珍坊―知永―妙正―法珍坊―二位坊―真光坊―大日―三位―明慶院、であつたとされる（『玄・覚書・控』、一門一七六六九の一〇号）。

- (10) 前掲「神宮渡始式における老女―その名称と担い手を中心に―」、九頁。

- (11) 飯田良一「伊勢神宮と勸進―寺院・橋・殿舎を中心として―」（地方史研究協議会編『三重―その歴史と交流』所収、雄山閣出版株式会社、一九八九年）・鎌田純一『神宮史概説』（神社本庁、二〇〇三年）・前掲「伊勢の山伏と比丘尼」。

- (12) 前掲「近世神宮祠官の遷宮観」、六〇―六一頁・前掲「神宮渡始式における老女―その名称と担い手を中心に―」、九頁。

- (13) この問題に関しては、既に上相英之氏によって扱われている

（『伊勢神宮風宮家と『風宮橋支配由来覚』、『御影史学論集』三二号、二〇〇七年、一二一―一二二頁）。しかし、新たな関連史料（後述の「宮奉行沙汰文」）が確認できたので、同氏の見解を踏まえ、再度検討を行った。

- (14) 「風宮穀屋大日坊神慮に背くにつき嘆願書」（『三重県史』資料編近世2、三重県、九三五頁）。

- (15) 前掲「玄・覚書・控」。なお、当史料によると、大日は、慶長年間と元和四年に風宮橋の造替を行ったとされる。

- (16) 一門四三四八号。奥書と内容から、「宮奉行沙汰文」は、貞享―元禄年間に、内宮長官と宮奉行との間で宮奉行の任命をめぐって対立が起った一件について、当時、長官であつた中川経盛（元禄七年三月没）がまとめた引付であると推定される。当史料は、その子である中川経冬（宝永元年四月没）が元禄十二年正月以降に書写した写本であると推定される。とりわけ、宮奉行関係の文書が多数引用され、その文書に関する説明（発給の経緯など）が詳細に記されている点が注目される。

- (17) 乗賢は、文明三年（一四七一）正月に内宮庁宣を受けて勸進を行い、文明九年四月に宇治橋を架橋したと伝えられている（大西源一『大神宮史要』、平凡社、一九六〇年、三〇九―三一〇頁）。

- (18) 宮奉行は、長官に属する被官で、宮城内の雑事を掌るととも

に、宮城内の監視などを職務とした（神宮司庁編『神宮要綱』神宮司庁、一九二八年、五八五・五八九頁）。

(19) 「風宮穀屋大日坊取壊しにつき証文」（前掲『三重県史』資料編近世2、九三六頁）。

(20) 仙松庵については、山田奉行所へ提出するため元文五年（一七四〇）八月日付で宇治会合が宇治六郷の寺社の分布・概要をまとめた調書の控である「宇治六郷神社寺院改帳」の下館町の項に、「禅宗無本寺 仙松庵」とみえる（一門六五〇四号）。このことから、「下畑村」は下館町内の小字名であると考えられる。

(21) 「風宮穀屋大日坊託状」（前掲『三重県史』資料編近世2、九三七頁）。

(22) 前掲「宮奉行沙汰文」。

(23) 「榊原家旧蔵資料 寺関係文書 楠部人別帳断片」（十一門三八五の二〇六号）。なお、鳥居前町とその周辺地域で宗門改が開始されたのは、寛永十二年九月のこととされる（宇治山田市役所編『宇治山田市史』上巻、宇治山田市、一九二九年、二四〇～二四一頁）。

(24) 『神宮典略』三十七卷「六坊」（前掲『神宮典略 後篇』所収）。

(25) 「（寛永二十年宗門改帳）」（三重県伊勢市楠部町所蔵、整理番号四二―一一）。当史料は伊勢市市史編さん係においてマイクロ

フィルム版を閲覧した。

(26) 「上両郷寛永二十年宗門改帳」（一門八六九七号）。

(27) 前掲「玄・覚書・控」によると、三位は寛永十八年に風宮橋の造替を行ったとされる。

(28) 「風宮橋之目録 花房志摩守宛」（一門一七六六九の一五号）。

(29) 「内宮六坊出入」については、本稿第一部三章を参照。

(30) 万治二年二月三日付、御奉行所宛の書付（案文）の差出に「風宮橋穀屋別当 明慶院 定清（花押）」とあることなど（「風宮御橋古材納先 御奉行所様宛」、一門一七六六九の一八二号）。

定清は、万治二年に風宮橋の造替を行ったとされる（前掲「玄・覚書・控」）。

(31) 「内宮六坊出入并雑記」（一門四六六三号）。奥書によると、原本は、橋村正満が「内宮六坊出入」についてまとめたものであるとされる。当史料は文政五年（一八二二）七月に広辻光恒から足代弘訓が借りて書写したものである。

(32) 「三方会合記録」二巻、承応三年正月二十二日条（一門三五五八号）。

(33) 同右「三方会合記録」二巻、明暦元年五月条。

(34) 「神宮編年記 氏富記」延宝二年九月十三日条収録「浦田織部口上写」（一門一五九一三の三三三号）。

(35) 「神宮編年記 氏富記」万治元年閏十二月四日条・万治二年正月十日条(一門一五九一三の一二号)。

(36) 「万治元年内宮炎上記」(一門一一一四三号)。奥書や蔵書印などから、本史料は、小田成近によってまとめられ、元禄八年(一六九五)十二月五日付で「荒木田神主尚忠」が書写した後、「講古堂」(書肆力)や八幡光保を経て、御巫清直へと転写・伝来したものであると推定される。

(37) 「風宮家文書」は風宮家が旧蔵していた文書群で、平成二年に子孫である風宮貞子氏から神宮文庫へ献納されたものである(風宮貞子「風日祈宮橋と風宮家」『瑞垣』一五七号、一九九〇年)。

(38) 前掲「近世伊勢神宮領における神仏関係について」、一八頁。

(39) 「神宮編年記 守秀記」明和七年七月十一日条(一門一五九一三の七四七号)。

(40) 詳しくは、前掲『大神宮史要』(六八八〜六九三頁)を参照。

(41) 前掲「三方会合記録」五卷、延宝三年九月条。

(42) 「風宮卜名乗由来下書 内宮二郷年寄衆宛」(一門一七六六九の一二六号)。

(43) 抹消された本文の右傍には、新しく「一、風宮と名乗申候訳ハ右之筋目故ニ而御座候処、今新ニ外之家名を名乗申候而ハ旦

方之廻方不^レ芳、以家之障リニ罷成候事ニ御座候間、憐前々之通ニ被^レ為^ニ成置被^レ下候様ニ奉^レ願候」と書き直されている。なお、修正の理由としては、主張内容の変更と、註(44)に挙げた記憶違い、或いは、作為による不正確な記述の削除が想定される。

(44) 慶光院の御被配りの停止は、寛文六年四月の「唯一宗源御改」の際であつて(前掲「三方会合記録」五卷、寛文六年四月条)、山伏としての名称(明慶院)が未だ確認できる時期である。従つて、この「慶光院の御被配りが停止されたということ、私も転身を迫られた」という転身時期に関する記述は、風宮定清の記憶違いか、御師家としての活動期間を引き延ばすために主張された偽りであると考えられる。

(45) 「仏家だつた者が還俗しただけで、御師に転身できるのか」という疑問が生じる。しかし、大西源一氏が「御師は一種の株であり、また立派な財産であつたから、其の売買も盛んに行われ、所有者は転々として移動した」(『参宮の今昔』、神宮司庁教導部、一九五六年、一四一〜一四二頁)と述べているように、御師の「株」とその旦那・旦那所の売買・譲渡は盛んに行われており、この事実から、旦那・旦那所さえ保有していれば、自由に御師になることは可能であつたと考えられる。例えば、天

和年間に持ち上がった御師の帯刀の可否をめぐる一件において
山田奉行は「師職ハ我等手下之百姓ニ而も可ニ罷成」候」と述べ、
百姓でも御師に成ることができるということを問題視している
（「神宮引付」、天和三年八月八日条、一門四一四九号）。

第六章 衣類統制と伊勢神宮―天和年間の「帯刀一件」を素材に―

はじめに

本章は、徳川綱吉政権下の衣類統制をめぐる幕政の動向を浮き彫りにするとともに、近世の伊勢神宮における御師の位置づけについて考察するものである。

近世前期は、朝尾直弘氏が「主要な身分集団の秩序立てがとつたのは十七世紀末から十八世紀初頭であった⁽¹⁾」とする身分秩序の確立へと向かう時期であった。これに関し、高埜利彦氏は、綱吉政権下において、家綱政権の政策を引き継ぐ形で、集団の組織化とそれに伴う境界の明確化、職分の分化が実施されたとしている⁽²⁾。

とりわけ、境界の明確化をめぐることは、同氏が例として、

たとえば町人の帯刀は、寛文八年（一六六八）年三月、旅立の時と火事が起こった時だけを例外として禁止されたが、天和三年二月、火事の節も旅立の時もすべて町人の帯刀は禁止された。

前述のようにかぶき者（町奴）対策の一面を持つが、町人の帯刀禁止は本質的には近世初頭以来続いてきた町人身分に含まれていた武士的要素を最終的に否定するものであった。

と述べている町人身分の帯刀を禁止した幕府法令の存在が注目される。格式を「身分に付随するもので、特定の事物や所作を象徴^{シンボル}とし

て扱うことによって、身分という抽象物を外形的、視覚的に表示する様式⁽³⁾」と理解するならば、帯刀はこの格式の事例として考えることができ、これが禁止されたという法令は、町人だけではなくその他の隣接する集団にも多大な影響を及ぼしたものと想定される。しかしながら、従来の研究では、史料的な制約もあつてか、その具体相については等閑に付されてきた。

このような状況の中、関連する成果として、寺嶋一根氏の研究が挙げられる⁽⁴⁾。同氏は、近世前期における衣類統制に関する法令を検討することを通じて、天和三年二月に出された法令の意義を指摘するとともに、衣類が身分秩序維持の装置として重視されていたことを明らかにした。右の成果は、衣類統制のあり方を整理した点で高く評価できるものである。ただ、あくまで衣類統制としての法令の性格に関する考察に重点が置かれたため、これがどのような影響を及ぼしたのか、については未だ検討の余地が残る。また、特に帯刀規制に関しては、藤木久志氏が近世前期における刀狩りの状況という視座から、当該期の百姓・町人への帯刀規制の変遷に関して考察を行っている⁽⁵⁾。

右を踏まえ、本章では、天和年間（一六八一―一六八四）に、伊勢神宮において実施された衣類統制と、それに伴って持ち上がった帯刀の可否をめぐる一件^{（以下、「帯刀一件」と記す）}を検討することを通じて⁽⁶⁾、こ

れが及ぼした影響について明らかにすること課題として設定したい。

検討の対象とするのは、神宮御師である。これは伊勢神宮の宗教者で、大きく四つの階層（家格）が存在した⁽⁷⁾。第一に挙げられるのが神宮家である。代々、両宮（内宮・外宮）の禰宜職を世襲し、一禰宜（長官）から十禰宜（十神主）までの正員禰宜として祭祀を勤仕してきた家々で、神領という形で幕府から知行が与えられていた。第二には宇治会合年寄家・山田三方年寄家が挙げられる。これらの家々は、伊勢神宮の鳥居前町（宇治・山田）でそれぞれの自治組織（宇治会合・山田三方）を構成する家々で、前者が五十余家、後者が二十四家あったとされる。第三に町年寄家が挙げられる。山田のみに存在し、この家々は自らの居住する町の支配を行った。最後に平師職家が挙げられる。御師としての配札などを専らとする層で、有する旦那数は少なく、多くの場合、有力な御師家の手代となって廻旦を行ったり、別に商いを営んだりする者たちであった。

神宮御師に関する研究は、主にその活動面を中心に進められ⁽⁸⁾、近年では「庶民を伊勢へと向かわせた伊勢御師、近世社会で爆発的に増加する参詣旅行において、彼らが各地を廻村していた意味は大きい⁽⁹⁾。」といった評価が、実証面の裏打ちのもと下されるようになった。しかしながら、近世の伊勢神宮と御師との関係に関しては未だ検討がなされておらず⁽¹⁰⁾、御師の伊勢神宮における位置づ

けを明らかにすることは、活動の背景を考える上で不可欠な作業であるといえる。

以上、二つの課題を示した。よって本章では、「天和年中師職刀免許之事⁽¹¹⁾」という史料を素材として、帯刀という格式をめぐる山田奉行と伊勢神宮（特に内宮側）とのやり取りから、当該期の衣類統制の一端を明らかにし、さらに、その統制が及ぼした影響をもとに、御師の位置づけについて考察してゆきたい。なお、交渉の主な論点に合わせて経過の区分を行った。また、伊勢神宮の職掌を勤仕し、何らかの形で祭祀に関わる人々を「祠官」と称することとし、「年寄」・「御師」も区別して考察を進めたが、その実態は渾然一体であり、三者に明確な線引きを行うことは不可能である⁽¹²⁾。あくまで論点を明瞭にするための措置であることを予めお断りしておく。

一 祠官の帯刀に関する交渉

天和二年（一六八二）十月二十二日に山田奉行の桑山貞寄⁽¹³⁾と伊勢内宮造宮奉行の大嶋義近⁽¹⁴⁾が「御遷宮御金物吟味」のため内宮文殿へ行き、中川隼人・藺田内匠⁽¹⁵⁾、作所⁽¹⁶⁾から十文字仙大夫、そして禰宜たちが応対した。その時に、山田奉行が中川隼人へ神宮家や五位にある者の帯刀の来歴と年寄の帯刀状況について尋ねたことを発端とする。

しかしこの後、目立った指示はなかったようで、翌三年二月朔日に、宇治の町代の寺田孫大夫が内宮長官のもとを訪れ、帯刀のことについて然るべく取り計らってくれるよう願ったのを確認できるのみである。動きがあったのは同月二十三日のことで、山田奉行は、

去冬も申候刀之事何故返答無^レ之哉、此儀ハ手前一存之事ニハ無^レ之事ニ候、江戸ニテ堀田筑前守殿・水野右衛門大夫殿より被^ニ相尋^一候筋有^レ之候、不^ニ指急^一事故其俣ニ打過候処段々延引ニ候、

と述べ、さらに「江戸ニ而の噂ニ禰宜并ニ五位人等ハ帯刀尤事ニ候、其外むさと帯刀ハ不^ニ相成^一候事ニ候處、猥ニ相成候と被^レ仰候故遂ニ吟味「ニ而候」ことを明らかにした。以下のことがわかる。

A、「堀田筑前守」は大老の堀田正俊⁽¹⁷⁾、「水野右衛門大夫」は寺社奉行の水野忠春⁽¹⁸⁾と推定されることから、この帯刀に関する諮問の背後には幕閣の意向が働いていたということ。

B、幕閣は、禰宜と五位以上の者の帯刀は差し支えないという認識を示し、それ以外の人々と明確な線引きを行っていたこと。

そして、同年二月二十六日には、

覚

一、祭礼・法事弥輕可^レ執^ニ行^一之、惣而寺社・山伏法衣・装束等万端かるく可^レ仕事、

一、町人・舞々・猿楽者縦雖^ニ為^一御扶持人、向後刀さすへからざる事、

一、百姓・町人之衣服、絹紬・木綿・麻布以^ニ此内^一応^ニ分限^一妻子共ニ可^ニ着用^一事、

一、舞々・猿楽右同断、但役相勤時分者熨斗目不^レ苦事、

一、惣而下女はしたは布・木綿可^レ着^レ之、帯同前之事、

(出典)
□ 二月

という法令が触れ出された⁽¹⁹⁾。

実は、この法令と同文言のものが同年二月十七日に江戸の町々へ触れ出されている⁽²⁰⁾。藤木久志氏によると、江戸での触は「江戸市中を超えて、大名領にも適用さるべき公儀の法としての位置を与えられていた⁽²¹⁾」とされ、寺嶋一根氏も江戸・大坂・奈良・京都・金沢藩・津藩などで確認できることから「全国令」としている⁽²²⁾。

二か条目に、町人・舞々・猿楽は扶持を与えられている者であっても帯刀は禁止する、とあることに注目したい。江戸での触の主眼が「特権商人の帯刀免許の取り消し⁽²³⁾」にあったことや、長崎において、同趣旨の触が出され『年寄衆』(町年寄)をはじめ、唐通事・阿蘭陀通詞・出島乙名・常行司・シャム通詞・散使といった

地役人の帯刀が禁じられ、町使・船番・遠見番・籠守（・御船頭―筆者注）といった番方の地役人のみが帯刀を許されることとなった（²⁴）という措置が取られていることから、この法令は藤木氏が指摘しているように（²⁵）、町人への帯刀を例外なく格式として禁止することを目指すものであったと考えられる。すなわち、これまでの山田奉行の諮問は、町人的要素を有していると想定された下位の祠官や年寄・御師へ帯刀規制を及ぼすことを企図するものだったのである。

同四月十一日、内宮長官と禰宜たちは中川隼人を使者として左のような書付を山田奉行へ提出した。

奉言上^二

神宮家并叙爵人等帯刀之儀何時より之事^二候哉之由御尋^二御座候、神宮之儀ハ勿論叙爵人ハ神系連綿代々位階も御座候故何時よりと申義も無^レ之用來候、右不^レ限末々職掌人等^二至迄神事供奉之職役^二御座候得者輕キ者たり共帯刀仕來候、此末弥無^二違失^一様奉^レ願候、年寄帯刀之義ハ於^二神宮^一存知不^レ申候、此段申上候、以上、

神主中

天和三亥四月十一日

内宮長官

つまり、

a、神宮家は言うまでもなく位階を叙されている者は、神の子孫として、代々、位階を有しているので何時から帯刀しているかは不明であるということ。

b、下位の祠官に至るまで勤仕しているのは神事に供奉する職掌であるから、輕輩であつても帯刀を行つてきたということ。

c、年寄が帯刀していることに関しては与かり知らない、ということ。

の三点を主張していることがわかる。

この書付の内容に対し、山田奉行は、「神宮之申分尤^二候、來ル十六日、出羽守江戸へ罷歸候、右之便り江戸へ可^二申上^一候」と述べ、理解の姿勢を示した。なお、「出羽守」とは大嶋義近を指す。しかし、年寄が帯刀することに関しては疑念が残つたらしく、山田奉行の留守の篠岡九郎右衛門（²⁶）を以て、中川隼人へ年寄の帯刀に関する事情について尋ねている。

経過を小括すると、幕閣の意向を受けて、山田奉行によって下位の祠官や年寄・御師の帯刀に対する統制が企図された。神宮側の働きかけにより、禰宜以下の職掌を勤仕する者（祠官）については帯刀が認められたが、年寄が帯刀することに関しては問題として残された、となる。

二 年寄の帯刀に関する交渉

天和三年（一六八三）六月二十八日、宇治会合年寄の腹巻主膳・梅谷久大夫、山田三方年寄の榎倉若狭・堤木工が内宮長官のもとを訪ね、十禰宜が応対した。年寄たちの口上は、「衣服刀之儀」について山田奉行から「御尋」があり、順を追って話したが許可してもらえなかった、自分たちも帯刀ができるよう考えて欲しい、というものであった。対して十禰宜は、

右刀之儀追々御内意も申事二候、当地之規模ニも候へハ年寄中ハ帯刀有^レ之度者二候、乍^レ去年寄ハ神役人ニ無^レ之、所之たはねを致迄之事ニ而候へハ訳合違ひ候、神宮家并諸職掌人之事ハ大方滞も無^レ之哉と存候、何卒よき申上方可^レ有候、

と述べた。鳥居前町の体面にも関わることであるから年寄は帯刀を認められるものであつて欲しい、しかし、年寄は「神役人」というわけではなく、単に地域の取りまとめを行っているに過ぎないのであるから帯刀を認める条件に適わない、という内宮側の認識が窺われる。これを受けて年寄たちが、それならば何方も差し障りがないように「師職中」と言つて欲しい、御師ということならば「神職」であるからきつと許可があるう、と言うと、十禰宜は、御師は「神役人」であるとはいえない、しかしながら、取り繕うので、年寄も

表向きは「神役人」と申し立てるように心得よ、と申し入れた。すると、年寄たちは、①以後、支配下にある御師に神宮側から「神用」を仰せつけられることがあつても、異議を申し立てないようにする、②自分たちは神忠を尽くしているので権禰宜に補任される者もある、という二点を挙げ、然るべく取り計らってくれるよう願つた。

内宮側にとっては、帯刀を許されるべき神職とは、「神役人」すなわち、祠官でなければならなかったのであり、年寄や御師であつてもこの論理に包括されるべきものであつたといえる。しかも、この論理の適用は、年寄たちが①と述べていることから明らかなように、「年寄はその統制下の者に対する神用賦課を阻害しない」ということへの取引上の措置であつた。

そして、七月五日付で宇治会合の年寄たちから書付が内宮側へ提出された。それは、山田奉行への「帯刀御免」の斡旋を願うにあつて、

一、年寄にかかわらず御師として帯刀を認めてもらいたい。

二、右が駄目なら、年寄の中でも特に会合へ出勤して支配の任にあたっている者たちへの帯刀を認めてほしい。

三、以後、年寄の管轄下の町の住民が「神用」に関する取立てや補任が神宮側よりなされても宇治会合はそのことに關して異議を申し立てない。

の三点を内容とするものであった。

同月二十四日、内宮・外宮長官が山田奉行のもとを訪れ、「年寄帯刀之事」を願った。山田奉行は、

此義手前ハ当地之為ニ宜敷様にと存候得とも江戸之上相済間敷候、併両神宮よりわけて願【候て年寄も神職ニ無相違】証人ニ被_レ相立_レ候ハ、願_{（27）}【方も可_レ有_レ之候、

とし、「子細有_レ之候願ハ聞届ケ難キ」旨を述べた。また、同趣旨のことを年寄たちにも申し渡している。山田奉行は、伊勢神宮と鳥居前町にとつて良いようにしたいが、江戸からの指示である為、そうはいかない、内宮・外宮から願い出て、年寄も神職に間違いないという証人に立つならば願ひようもある、子細がある願ひは聞き届けがたい、と認識していたのである。この回答から神宮側は「先々_{（山田奉行案山貞寄）}下野守殿之念入首尾能候」と、手ごたえを得たようである。

八月六日、内宮長官と十禰宜、宇治会合年寄の腹巻主膳・友井内記、山田三方年寄の榎倉若狭・福井与左衛門が外宮長官のもとを訪ね、外宮長官・外宮五・六・九禰宜が応対した。そして「今度御法度之衣類刀之事」に関する相談を行った。まず、宇治会合・山田三方の年寄たちが、年寄に対する帯刀の許可に協力して欲しい旨を願った。これに対し神宮（両宮）側は、

先日両長官小林へ参、段々申候得とも、年寄ハ帯刀すへき筋ハ

無_レ之候とて何分御聞届難_レ被_レ成由ニ付、仍而神職を兼候由も申上候へ共、当地之様子御存候へハ、余り成ル事も難_二申上_一候、且他所ニ而輕キ神職も帯刀之由申上候處、さらハ夫を書付上候へと被_レ仰候、

と伝えた。すると、年寄たちは「御尤ニ存候、何卒、御願書へ祠官御師と書つけ御上可_レ被_レ下候」と納得の姿勢を示し、再度、仲介を願ひ出ている。以上から、年寄としての帯刀は格式として許されないのに対し、神職であれば輕輩であっても帯刀が認められる可能性があったことがわかり、御師が神職に含まれるという根強い認識が存在していたことが窺われる。

なお、この「さらハ夫を書付上候へ」という山田奉行の指示を受けて、山田三方の年寄たちによつて他社の状況に関する調査が行われた。対象となつたのは、大原野・下御霊・北野・賀茂・松尾・稲荷・藤森・平野・祇園・八幡・住吉・天満天神・春日・大和横井村春神の全十四社である（28）。「天満天神」を例に挙げると、

一、天満天神

右之社家御奉行所へ窺被_レ申候へハ其方達も之義ハ江戸より何共不_二申参_一候、然者町人とハ各別之事ニ候間、勝手次第ニ可_レ仕候へとの御事ニ付刀差申候、然共結構成衣服ハ遠慮申候、

とある。このようにして他社の神職の帯刀について調査し、十四社すべての社の神職が無条件で帯刀を行っていることを確認している。また、「天満天神」の神職が、町人とは格別であることを以て帯刀を許可されている、という事実注目するならば、山田奉行が年寄への帯刀を許さなかったのは、年寄が身分としては町人に属すると認識されていたからであると考えられる。

経過を小括すると、年寄の帯刀の可否について神宮側と年寄たち、そして神宮側と山田奉行の間で交渉があり、山田奉行から年寄であることを理由とした帯刀が認められないことが示された、となる。

三 年寄と御師の帯刀に関する交渉

天和三年八月八日、両宮の長官が山田奉行のもとを訪れ、再度「年寄刀之事」を申し上げた。すると、山田奉行は左のように答えた。

年寄ニ而ハ刀ハ難_レ成事先日申入候處、再応之申条如何ニ候、既宇治之茶師上林法順ハ五百石知行を拝領候得とも、刀ハ不_二相成_一候、当地年寄ハ神領之事故、公儀より大神宮へ之崇敬を以、少之品付被_レ遣候得とも、他村庄屋同事ニ候、法度申付候連、夫ハ輕キ庄屋も所之法度ハ申付候、御朱印頂戴とて御知行被_レ下候ニハ無_レ之候、神宮家のことく知行之御朱印とは違ひ申候、然ル上ハ年寄身分ハ刀不_二相成_一候、よく／＼考候へハ師職

とても難_二相成_一存候、夫ハ師職に青物やも有_レ之、たは粉やも有_レ之候、右之身分ニ而ハ刀ハ不_二似合_一候、若神宮取持ニ而願候共、此所を分候様可_レ被_二申出_一候、すなわち、

a、「宇治之茶師上林法順」は五百石の知行を拝領していても帯刀は許されていない。

b、宇治・山田の年寄は「神領之事」であるので、伊勢神宮への崇敬を以て、少し箔付けを行っているが他村の庄屋と同じようなものであり、法度を申し付けているといっても、それは他地域の「輕キ庄屋」も法度を申し付けているので一緒である。

c、「御朱印頂戴」といっても、神宮家とは違い、年寄たちへ「知行之御朱印」が与えられているわけではない。

d、よくよく考えてみれば、御師であつても帯刀は許され難い。なぜなら御師には青物屋もあり、煙草屋もある。このような者が帯刀するのは不似合である。

と指摘し、神宮側を通じた交渉であつても以上の四点を踏まえなくては応じないことを強調している。a～cまでは年寄の帯刀に関することであり、dは御師の帯刀に関しての問題点である。

それぞれ見てゆくと、aにおいては「上林法順」が例として挙げ

られている。『寛政重修諸家譜』によると、四九〇石を知行した「上林峯順重胤」を指すと考えられる⁽²⁹⁾。上林氏は「御用茶師」であり、その「茶頭取」を勤めたとされる⁽³⁰⁾。山田奉行はこの例を挙げることによって、將軍から知行を与えられている者ですら帯刀が認められていないことを示したといえ、bとcについては、代々の將軍から守護不入の朱印状を与えられ神宮領の自治を行っている年寄たちへの特別扱いを否定し、他の地域の庄屋などと本質は同じである、という見解を表わしている。aとcから、山田奉行は神宮領の支配を行う年寄であることを根拠とした帯刀の許可はありえないことを明示したのである。

そして、dに関しては、御師の中に青物屋や煙草屋などを兼業するものがあることを問題として指摘している。よって、山田奉行が認識する帯刀が認可される上での最大の障害は、御師と商いの兼業が行われていることであつたと考えられる。また、外宮側の記録では、「師職ハ我等手下之百姓ニ而も可_レ罷成_一候⁽³¹⁾」とも山田奉行が述べたとある。つまり、御師が「株」化しており、譲渡・兼業の可能性のあることを熟知した上で、御師の専一化を示唆したのである。年寄たちはこれを受けて、御師のあり方への変革を迫られることになったといえる。

同十二日、内宮長官のもとへ中将監・十文字仙大夫・梅谷左近・

寺田兵左衛門、榎倉若狹・福井与左衛門・春木隼人といった宇治会合・山田三方の年寄たちが「小林へ之願書」の案を持参し、相談を行った。それは、神宮側の取り持ちを以て願書を山田奉行へ提出してもらいたい、というものであり、具体的には、古来より御師ばかりを専業で勤めている者は、帯刀ができるよう望みたい、というものであつた。

これに対して内宮側は、年寄のなかには、御師の他に小間物屋・綿屋・味噌屋などを営む者があるが兼業している商いを廃業するかどうか尋ねた。すると、年寄たちは、兼業している商いをやめない場合は、その者を年寄から省いてもよい、しかしながら、御師すべてが帯刀できるようにしたい旨を答え、「此度願之品」を記した書付を提出した。その内容は、希望する帯刀の範囲を、①宇治・山田の年寄、②他業を兼業しない御師、③位階を有する年寄とその子孫、とするものであつた。注目すべきは②である。ここに御師の專業化が図られたと考えられる。

八月十八日、内宮長官・十禰宜・外宮長官・九禰宜、作所から藤波修理が山田奉行のもとを訪ね、「刀之事神宮願書」を差し上げたところ、山田奉行は「師職家・年寄家業不_レ相交_一」とはどういう申し分か、と質問したので、「師職而已ニ而商売不_レ仕者之事之由」を申し上げた。すると山田奉行は「当時年寄筋之内商売有_レ之候ハ如

何」と再度尋ねた。神宮側が「近来困窮故如^レ斯候、御免之上ハ、商売留候力、夫も不^ニ相成^一候ハ、年寄をはね可^レ申候」と答えると、山田奉行は、支配に携わることや将軍と直接の主従関係にあることが帯刀の許可につながるものではないことを改めて述べ、年寄であることを理由とした帯刀はありえないことを再び言明した。すなわち、帯刀が認められうる対象は、あくまで他業を兼業しない御師であつたのである。

同日、内宮長官は宇治年寄の大黒民部・八羽伝内を招き、年寄としての帯刀許可は上手くいかなかったが、今後も協力してゆく旨を伝えた。その夜、再び八羽伝内が内宮長官のもとを訪ね、このまま捨て置くわけにはいかないので、長官の力添えを以て帯刀許可を成就したい旨を述べた。このことから、交渉の焦点が御師であることを理由とした帯刀の許可へと絞られてゆくことになったといえる。経過を小括すると、神宮側と山田奉行との交渉により、年寄であることによる帯刀の許可はありえないことが確定し、御師であることを理由とした帯刀の承認が模索された、となる。

四 交渉の帰結

八月二十日、内宮長官と藤波修理が山田奉行のもとを訪れ、「刀之事」を申し上げた。しかし、不首尾だったので、次に提出すべき願

書の内容を山田奉行の家老中から承った。すると、山田奉行が対面した。そして、帯刀のことは成就しないだろうが江戸の老中に上申する旨を約した。この時、内宮側から提出されたのが左の書付である。

奉^レ願口状

当地年寄以下帯刀衣服之儀御停止之段承知仕候、年寄ハ神職にも無^レ之間、御停止之段、於^ニ神宮^一可^ニ申上^一様無^ニ御座^一候、乍^レ去、年寄之内叙爵・権禰宜職も有^レ之、同輩之内帯刀仕候者、又帯刀不^ニ相成^一者御座候茂如何ニ奉^レ存候、殊年寄始師職之儀も皆神民ニ御座候、年寄も皆師職相勤候、且当時補任無^レ之者迎も御宮之御用有^レ之時ハ、差遣申事ニ御座候へ者、畢竟、神職同事と奉^レ存候、以後、神用并神役人闕如之節神宮より申付候得者可^ニ相勤^一旨申合候上ハ、神役人同時ニ被^ニ思召^一候而帯刀・衣服師職中ハ御免之儀、長官・神主一同奉^レ願候、已上、

神主中

天和三亥年八月

内宮長官印

桑山下野守殿

年寄が神職ではなく帯刀という格式が相応しくないことを認めた上で、

(1)年寄の内に、叙位を受ける者や権禰宜職に補任される者があり、同じ年寄であるにもかかわらず帯刀の可・不可という相違が発生してしまうのは如何なものか。

(2)年寄を始め御師も皆「神民」であつて、年寄を勤める者もすべて御師である。

(3)補任を受けず特定の職掌を勤仕しない者であっても「御宮」の「御用」がある時は、それを勤めなければならないのであるから年寄・御師は神職と同じである。そして、以後「神用并神役人闕如」の時、神宮側から申しつけられた場合、必ず勤めると取り決めたので、祠官と同じであると考えて頂きたい。

という三点を述べることで御師の帯刀や衣服の許可を願っている。つまり、(1)従来の幕府の方針では、年寄の間に帯刀の有無という格式の差異が生じてしまうということ、(2)帯刀を願う対象が「神民」であり御師であるということ、を強調したうえで、(3)において定まった職掌を担うものではなくても、命じられた場合は、それを勤めるという取り決めを行っており、御師は、祠官と同じであると考えてもらいたい、と主張しているのである。また、同日条に「外宮よりも同様二被_二申上_一候」とあることから、以上は、内宮・外宮、宇治・山田の年寄たちの共通した認識であつたといえる。

すなわち、何ら職掌を帯びなくとも伊勢神宮のために勤仕する者は祠官であり、その者は神職と同じであるという見解が明確に打ち出されたのである。これは(2)において、年寄も御師であるということが強調されていることから明らかなように、職掌・祭祀には直接関わらない御師という存在を伊勢神宮の中に位置づけようとする新たな解釈であり、禰宜たちによる積極的措置であつた。

同十月三日、内宮長官・二・四・五・六・七・八・九・十禰宜⁽³²⁾、藤波修理・中川隼人、外宮の長官と禰宜たち、宇治会合・山田三方の年寄たちが山田奉行所へ呼び出された。そして、篠岡九郎右衛門と北知儀左衛門が応対し、幕閣との相談の結果、帯刀の許可が下りた旨、この申渡しは両長官への申し入れである旨を述べたうえで左のような内容を申し渡した。

一、正禰宜・権官中・諸神役人衣服刀指申儀、如_二前々_一可_レ被_レ成候、御家来旦方江被_レ遣、或、小林江被_レ遣、又共二被_二召連_一候とも、刀指可_レ申由二候、扱、諸神役人と有_レ之候義師職も神前ニて祈祷申候得ハ神役人ニ而候故如_レ此候、
一、江戸などへ権任中被_レ遣候時、拝領被_レ申候時服ハ其者斗拝領之者着申候而親・兄弟にも着セ申間敷事、
一、前々山本杯年寄杯鑑持候事有_レ之候由、御停止二候、堅相守リ申へく候事、

一、上下之女中・町人・百姓之衣類之儀、最前被_二仰出_一候御条目之通り停止_二候、堅可_二申付_一事、

一、前程奈良晒之儀停止_二被_二申付_一候得共、是も町人・百姓迄着せ可_レ申候、

大きく祠官と御師に関する一・二・三か条目と鳥居前町の統制に関する四・五か条目に別けることができる。本章の論点となる前者を見てゆくと以下のことが定められたことがわかる。

A、正禰宜・権官中⁽³³⁾・諸神役人は衣服や帯刀に関して従来_の格式を認める。その家来についても、旦那方や山田奉行所へ遣わす場合、また、供をさせる場合に、帯刀をしても良い。「諸神役人」の範囲には御師も含まれる。それは御師も神前で祈禱を行うからである。

B、権任中が江戸で拝領した時服はその者のみが着用でき、親・兄弟であつても着用させてはならない。

C、前々のように山本大夫⁽³⁴⁾や年寄などが鎧持の供を連れるのは禁止する。

注目すべきはAである。二十日に提出された「奉_レ願口状」における神宮側の解釈・措置を踏まえたものであり、参宮者の依頼を受けて祈禱を行うという御師の活動を考慮した解釈が幕府の側でなされたことが窺われる。またB・Cにおいては格式の徹底が企図され

ている。以上から、御師は職掌を勤仕するものではなかったが、参宮者の希望に応じて祈禱を行うことを以て、祠官に含まれるものとして幕府から位置づけられたことがわかり、同時に、年寄であることを根拠とした御師との格式の差異化は否定されたと考えられる。

これを受けて同四日、内宮長官のもとを宇治会合の大黒民部・神楽大膳・友井内記・十文字仙大夫・上野縫殿助、山田三方の谷主殿・堤右衛門・春木隼人・橋村主膳・足代玄蕃が訪ねた。そして、応対した藤波修理へ左のような書付⁽³⁵⁾が提出された。

一、此度帯刀之儀_二付、段々御苦勞被_二成下_一、偏御取合_二而首尾仕、当地一統之大慶_二御座候、右帯刀申立、神役人専之義_二候得ハ、此以後、神慮之御用_二付御召使被_レ成候ハ、年寄以下師職共違背仕間敷候、此段相違有_レ之候ハ、兼而下野守殿御内意之趣_二もとり申候間、何時_二ても其旨御申上候而、年寄・師職帯刀御取上被_レ成候共、年寄始師職少も申分無_二御座_一候、為_レ其書付仕差上申候、以上、

内宮年寄惣代

大黒民部（花押）

天和三年亥十月

神楽大膳（印）

十文字仙大夫（印）

内宮

長官様

御神主中

なお、同日条に「右書附出候、尤外官方も同前之由也、」とみえ、外官においても同趣旨の書付が提出されたようである。この書付から年寄以下の御師は「神慮之御用」があつた場合、それを果たすことが確約されたことが窺われる。ここに、伊勢神宮において御師が果たす役割は明瞭なものとなった。

経過を小括すると、交渉の結果、年寄以下の御師は、祠官に含まれるものとして位置づけられ、帯刀の格式が承認された。そして、御師は「神慮之御用」を臨時に勤めることとなった、となる。

おわりに

本章では、近世における御師の位置付けについて、天和年間の衣類統制の影響に注目して考察を行ってきた。要点を挙げると以下のようなになる。

一、統制の当初、幕閣は、伊勢神宮の祠官や年寄・御師の帯刀は基本的に認められず、禰宜と五位以上の者の場合に限り、差し支えないと認識していた。

二、天和二年二月二十六日付で触れ出された幕府法令によって、町人・舞々・猿楽の帯刀は禁止されることになり、それに

伴い、町人的要素を有していると想定された禰宜より下位の祠官や年寄・御師の帯刀が問題として顕在化することとなった。

三、祠官については、彼らが神事に供奉する職掌を勤仕してきたことを以て帯刀が許可された。

四、年寄の帯刀に関しては、神宮領の年寄であることを根拠とした交渉が行われたが、年寄は身分としては町人に属していると認識されていたため許可されなかった。

五、御師であることを理由とした交渉がなされ、結果、御師は、町人としての側面、すなわち兼業している商いの廃業を余儀なくされた。しかし、祈祷を行うことを以て祠官に含まれるものとして幕府から看做されることになり、神職として帯刀が認められた。また、伊勢神宮との関係においては、御師は、神役を臨時に勤めることが義務付けられ、そのことを条件に祠官として位置づけられた。

以上をもとに、まず、当該期の衣類統制に関する幕政の動向について触れておく。今回扱った帯刀一件から、幕閣がこの統制を通じて、神職などの武士に準ずる身分の宗教者と被支配身分である町人との明確な分離をも企図していたことが浮き彫りとなり、さらに、その結果、人々の職分と負担する役の厳密化が押し進められたこと

が明らかとなった。

次に、御師の位置づけについてまとめる。先行する研究が述べているように、御師が伊勢信仰普及の担い手であったことは言うまでもないことである。ただ、元来、御師そのものとしては、禰宜やその他の祠官などのように職掌や祭祀に関わるものではなく、伊勢神宮との接点は希薄であった。しかし、衣類統制をきっかけに、御師は、職分の明確化を迫られることとなり、交渉の結果、幕府からは参宮者の希望に応じて祈祷を行うことを以て、そして、伊勢神宮からは臨時に神役を勤めることを以て、祠官として位置づけられることになったと結論付けられる³⁶。つまり、中世後期以降においては、伊勢神宮とは距離を置いて形成されることとなった御師という存在が、衣類統制という外的要因によって伊勢神宮のなかに組み込まれた瞬間であった。すなわち、伊勢神宮が御師という私幣の仲介者を正式に承認した点で、御師の祠官化は一つの画期であったと評価でき、以降の更なる伊勢信仰の広がりと深化を考える上で考慮されなければならない事柄として指摘できる。

残された課題としては、「帯刀一件」の交渉に際して、山田奉行の見解と江戸の幕閣が出した結論とが大きく異なっていた、ということが挙げられる。詳しくは、祠官化が及ぼした御師への影響を明らかにする事とともに、他日の課題としておきたい。

(1) 朝尾直弘「近世の身分とその変容」(同・辻達也編『日本の近世』七卷所収、中央公論社、一九九二年)、三七頁。のちに、『朝尾直弘著作集』七卷(岩波書店、二〇〇四年)所収。

(2) 高埜利彦「十八世紀前半の日本―泰平のなかの転換―」(『岩波講座 日本通史』13巻近世3所収、岩波書店、一九九四年)一五頁。後に『近世の朝廷と宗教』(吉川弘文館、二〇一四年)所収。○

(3) 朝尾直弘「武士の身分と格式」(前掲『日本の近世』七卷所収)、二〇七頁。

(4) 寺嶋一根「法令と文学作品からみた近世衣類統制の性格―天和三年令を中心に―」(『京都府立総合資料館紀要』三一八号、二〇一〇年)。

(5) 藤木久志「百姓の平和Ⅱ刀狩令」(『豊臣平和令と戦国社会』所収、東京大学出版会、一九八五年)・同『刀狩り―武器を封印した民衆―』(岩波書店、二〇〇五年)。

(6) この一件の概要については、石巻良夫氏の先駆的な成果によって既に紹介されている(「伊勢神宮帯刀一件」、『國學院雑誌』二三卷一〇号、一九一七年)。

(7) 大澤貴彦「近世神宮祠官の家格と家筋について」(谷省吾先生退職記念神道学論文集編集委員会編『谷省吾先生退職記念神道

学論文集』所収、国書刊行会、一九九五年)、五五七―五八一頁。

(8) 例えば、久田松和則『伊勢御師と旦那―伊勢信仰の開拓者たち―』(弘文堂、二〇〇四年)、千枝大志「伊勢御師の動向と山国」(坂田聡編『禁裏領山国荘』所収、高志書院、二〇〇九年)など。なお、中世後期以前の神宮御師については、窪寺恭秀氏が主要な議論を整理している(「中世後期に於ける神宮御師の機能と展開について」、『皇學館大学神道研究所紀要』二一輯、二〇〇五年)。

(9) 内田鉄平「近世後期、豊前・豊後国における伊勢御師の活動―橋津家大庄屋日記を参考として―」(『史学論叢』三五号、二〇〇五年)、二七頁。

(10) 阪本廣太郎氏が「室町以後徳川時代に入りては、神宮に全く関係なきもの、即ち師職が輩出して、盛に国民の奉養を代行することゝなり、此に於て大麻及暦本の頒布、或は私第に於ける神樂祈禱の奏行等が流行することゝなつた」(『神宮祭祀概説』、神宮司庁、一九六五年、九五頁)としているように、御師そのものとしては伊勢神宮との接点を有していなかったとするのが通説的である。例えば、林淳氏は「伊勢神宮では、(中略)御師はいわゆる社家ではなく、伊勢神宮の神事に携わることとはなかった。伊勢と比較すると、津島の御師は津島社の社家であり、

あるいはその下で仕えていた手代であった。この点で、伊勢神宮と津島社との相違は歴然としていた」(『近世津島社の社家組織と御師』、青柳周一・高埜利彦・西田かほる編『近世の宗教と社会1 地域のひろがり』と宗教』所収、吉川弘文館、二〇〇八年、四一頁)としている。

(11) 神宮文庫所蔵、図書番号一門一七六〇六の七五号。以降、断らない限り当史料を出典とする。奥書によると、原本は内宮長官が藤波氏富であった時に、公文所において作成された内宮側の記録であるとされ、四禰宜の藤波氏貞から元禄十三年(一七〇〇)正月に正亀氏が写して以降、転写されてゆき、最後に、守屋昌綱から寛政二年(一七九〇)八月二十九日付で小川地克家が書写した写本である。なお、本章で使用する史料は特に断らない限り、すべて神宮文庫の所蔵である。

(12) 宇治会合家・山田三方家以下の御師は、内人や物忌父などの特定の職掌を勤仕する者が多く、なかには権禰宜に補される者もあった(『宇治山田市史』上巻、宇治山田市、一九二九年、三七五〜三八一頁)。しかし、「御師」それ自体は、近世初頭以前から「株」化して売買・譲渡が可能となっており(前掲『宇治山田市史』四〇二〜四〇四頁・大西源一『参宮の今昔』、神宮司庁教導部、一九五六年、一四一〜一四二頁)、さらに、伊勢神宮

の職掌を勤仕しない家々も存在していたため(前掲『宇治山田市史』三八〇〜三八一頁・前掲『参宮の今昔』一四四頁)、伊勢神宮との関係における位置づけは曖昧であった。すなわち、このような御師の位置づけをどうするのか、という問題が一つの焦点として顕在化したのが帯刀一件であったといえる。

(13) 『寛政重修諸家譜』巻第九九二(『新訂 寛政重修諸家譜』第十五、続群書類従完成会、三七七〜三七八頁)。

(14) 『寛政重修諸家譜』巻第七三(前掲『新訂 寛政重修諸家譜』第二、九二頁)。

(15) 中川隼人・藺田内匠が如何なる役職・地位にあったかは定かではない。しかし、藺田内匠が「国崎御膳料之儀」について外宮の「政所」とともに鳥羽の「松本茂左衛門」のもとを訪ねていることなどから(『神宮編年記 氏富記』天和三年五月十二日条、一門一五九一三の四六号)、両者は内宮長官の政務機関の一員であると推定される。

(16) 近世の作所は遷宮に際して「造宮奉行の督励により諸祭の用度、頭工等の作料や衣糧を下す」ことを職務とした(中西正幸「近世の遷宮記録」、『皇學館大学神道研究所紀要』五輯、一九八九年、四九頁)。

(17) 『寛政重修諸家譜』巻第六四五(前掲『新訂 寛政重修諸家

譜』第一一、一〇二頁。

(18) 『寛政重修諸家譜』卷第三三三(前掲『新訂 寛政重修諸家譜』第六、七一〇七二頁)。

(19) 「浦田家旧蔵資料 万日記」天和三年二月二十六日条(一門一七三二〇の三四二号)。

(20) 『正宝事録』天和三年(近世史料研究会編『正宝事録』一卷、整理番号六五五、二二八〇二二九頁)。

(21) 前掲「百姓の平和」刀狩令、二〇七頁。

(22) 前掲「法令と文学作品からみた近世衣類統制の性格」天和三年令を中心に、八二〇八三頁。

(23) 前掲「百姓の平和」刀狩令、二〇六頁。

(24) 添田仁「奉行所と地域社会——長崎奉行所の天保改革——」(藪田貫・奥村弘編『近世地域史フォーラム② 地域史の視点』所収、吉川弘文館、二〇〇六年)、六六頁。

(25) 前掲「百姓の平和」刀狩令、二二五頁。

(26) 前掲「神宮編年記 氏富記」天和三年十月四日条(一門一九一三の四七号)に「御留主居篠岡九郎右衛門」とみえる。

(27) 「天和年中師職刀免許之事」では【】内の文言が脱文となっている。「天和帯刀一件」(一門三〇〇八号)をもとに補った。

「天和帯刀一件」は、守屋昌綱から「末偶」、鵜飼元則と転写さ

れ、最後に寛政十年五月付で小牧保獲によって書写されている写本である。

(28) 前掲「神宮編年記 氏富記」天和三年九月二十一日条(一門一五九一三の四七号)。

(29) 『寛政重修諸家譜』卷第一二五六(前掲『新訂 寛政重修諸家譜』第一九、一三七〇一三八頁)。

(30) 穴田小夜子「江戸時代の宇治茶師」『学習院史学』八号、一九七一年)。

(31) 「長官引付 神宮引付」天和三年八月八日条(一門一八四三七の八一八号)。

(32) 三禰宜は「当番参籠」だったため不参であった(前掲「神宮編年記 氏富記」天和三年十月三日条、一門一五九一三の四七号)。

(33) 権禰宜には「権官」と「権任」の二種類が存在し、「権官」は「正員禰宜に就任可能な神宮家出身者の者」を指す(石川達也「天明期における神宮禰宜の位階」、『神道史研究』五六卷一号、二〇〇八年、九二頁)。逆に「権任」は禰宜に就任できない非神宮家出身の権禰宜である。

(34) 「公儀御師職」を世襲した宇治会合年寄家の山本氏を指す。同氏は、伊勢国三重郡生桑村の内で「二〇〇石」の知行が与え

られていた（鎌田純一「内宮山本大夫朱印地」、『皇學館大学史料編纂所報 史料』八号、一九七九年）。

（35）この書付は「天和年中師職刀免許之事」に載せられているが、原本が確認できるため原本に拠った（「藤波家旧蔵雜古文書二

三 内宮年寄惣代誓状」、一門九一七三の二三号）。

（36）ただし、制度面での位置づけに関しては一考の余地がある。

例えば、元禄十年（一六九七）四月に、外宮権禰宜の河崎延貞が山田奉行に提出する目的で外宮の職制などを記した「外宮神宮法例」（一門二九八七号）を参照すると、御師の記載は存在しておらず、従って、御師が正式な祠官であったとは言い難い。このことについては、臨時の神役の内容を明らかにすることとともに、今後、取り組んでゆきたい。

終章

本稿は、六章に亘って近世前期の神宮御師集団について考察を行ってきた。各章で明らかにした事実を整理するとともに、今後の課題となる諸点を示し、結びとしたい。

第一部では、御師集団に起きた変化がどのようなものであったか、に関して検討した。

第一章においては、寛永年間の争論を事例として、師旦関係の問題を論じた。元来、内宮御師集団と外宮御師集団の間には、集団の区別はあるものの、師旦関係に関しては明確な線引きは存在していなかった。しかし、寛永争論を契機として、曖昧であった師旦関係のあり方が整理された。具体的には、正宮に対応する形で別個のものとされ、それぞれの集団内での個々の御師が有する師旦関係が承認された。

第二章においては、近世前期の山田三方を事例として、裁判制度の問題を論じた。従来の研究では、中世後期以降、山田三方による裁判が間断なく実施されていたと考えられてきた。しかし、ここでの検討から、公権力によって裁判が行われていた時期があることを浮き彫りにし、また、旦那争論の特殊性が理由となつて裁判権の委譲がなされたことを明らかにした。そして、その委譲後の制度整備

の過程を跡付けた。

第三章においては、「内宮六坊出入」を事例として、連帯意識の萌芽の問題を論じた。内宮御師集団と外宮御師集団は、中世後期以来、対立を重ねてきたが、山伏との御祓配りをめぐる争論を経ることで、連帯意識を持つようになったことを指摘した。

第二部では、当該期における御師集団の動向が如何なるものであったか、について検討した。

第四章においては、外宮宮城への「宮中之定」の制定を事例として、外宮と山田三方（外宮御師集団）との関係について論じた。外宮御師集団にとつて参宮者の保護は極めて重要な案件であつて、外宮宮城への干渉はこれを理由としていることを示すとともに、これが、参宮者の増加と多様化に伴う外宮宮城の性格の変容に対応するものであることを浮き彫りにした。

第五章においては、内宮御師である風宮兵庫大夫家を事例として、山伏から御師への転身をめぐる諸問題について論じた。山伏から御師への転身には、「伊勢神宮との関係の変化」・「職分をめぐる変化」という近世前期の二つの変化との直面が要因として深く関係しており、特に後者から、伊勢神宮の御祓を配ることは山伏に相応しいものではなく、御師の職分に属するものとされたことが明らかとなった。

第六章においては、天和年間に起きた帯刀をめぐる一件を事例として、神宮御師の身分と格式、位置づけについて論じた。衣類統制をきっかけに、御師たちは、その身分や格式などを問われるところとなり、交渉の結果、神職身分に属するものとして帯刀の格式が認められた。これは、江戸幕府からは参宮者の希望に応えて祈禱を行うことを以て、そして、伊勢神宮からは臨時に神役を勤めることを以て、祠官として位置づけられたことによるものであった。

以上の論考から明らかになったことをまとめておきたい。まず、江戸幕府との関係については、江戸幕府の政策や裁定が及ぼす影響が極めて大きかったことを指摘できる。つまり、近世の神宮御師とその集団の特色として理解される諸要素は、近世前期に起きた争論などの様々な「摩擦」とその解決を経るなかで、漸次的に江戸幕府によって認定されていったものであるといえる。

次に、伊勢神宮との関係については、①参宮者の保護が重要な案件であったこと、②御師が祠官に含まれるものと位置づけられたこと、の二点から考えてゆく必要がある。①に関しては、本質的には中世後期の事情と変わるものではないが、この保護を行う仕組みの整備に御師たちが乗り出し、その保護を行うにあたって一定の役割を担うようになったことは大きな画期であったと考えられる。従って、伊勢神宮との直接的関係は、参宮者をめぐって展開してゆくも

のと見て大過ないであろう。②に関しては、伊勢神宮とは、制度上では無関係な存在であった神宮御師が、伊勢神宮との間に新たな関係を構築することになったと捉えられ、伊勢神宮に属する宗教者としての性格が明確になったものと評価しておきたい。このことは、「幕府あるいは領主権力から朱印地・黒印地・除地などとして認められた土地に建つ神社に奉仕していること」を「神職身分の必要条件」とする近世社会特有の規範⁽¹⁾に準拠するものであると理解することが可能であって、両者の関係は、近世社会に適合的な形に変化したと指摘できる。

神宮御師の近世的展開としては、集団をめぐる問題と存在形態の問題から概括しておく。前者に関しては、線引きが不明瞭であった師旦関係が明確に分けられ、二種類の御師がそれぞれ師旦関係を結ぶことが可能となった。そして、このことが、以降の師旦関係のあり方を論点とした御師集団間の対立を招き、伊勢神宮もそれに巻き込まれてゆくことになる。ただし、山伏との争論を経るなかで、御師集団間に連帯する意識が生じていたことも看取された。集団内部の問題としては、江戸幕府からの裁判権の委譲にともなって、恣意性を抑えた公正な形での裁判制度の整備が図られた。

後者に関しては、神職身分として帯刀の格式を有し、祈禱や御祓配りなどを主要な職分とすることになった。また、伊勢神宮の祠官

として臨時の神役を勤めることも取り決められた。そして、これには、類似した活動を行っていた寺院・山伏の排除と、商いの禁止による町人との峻別、祠官への建前上の編入、が背後に存在していた。

右をもとに、本稿の取り組みのなかで浮上してきた課題となる諸問題を指摘しておく。

第一に、師旦関係と伊勢信仰について。神宮御師を伊勢神宮と前近代社会の人々をつなぐ仲介者であったとするならば、御師の活動のあり方が変化すれば、それに対応して両者の関係も変化することになる。このことを考慮するならば、正宮ごとに師旦関係が分けられたことは、且那の信仰のあり方にも何らかの影響を及ぼした可能性があり、御師集団間の競合・対立の問題を踏まえ検討してゆく必要がある。

第二に、御祓について。第二部五章では、山伏による御祓配りの禁止を扱ったが、この御祓自体の変化にも留意しなければならない。例えば、寛文十年の両宮御祓銘論において、外宮御師側から「祓之銘に両神号書来候証文」として評定の場に提出された「天文之二冊之帳」には、「御伊勢両太神宮二天八王子諸神諸仏」とあったとされる⁽²⁾。また、この他にも「両神号有^レ之道者帳」として出された「中西勘兵衛方に焼残り候元和年中之日記数卷」には「大菩薩」と記されていた⁽³⁾。つまり、仏教的要素を色濃く帯びた御祓も配られて

いた可能性が高いのであって、この禁止によって御祓自体も仏教的要素を排除したものに变化したことが想定される。これは御師が説いた布教内容とも深く関係する問題であり、後期伊勢神道の成立など神道説の展開にも目配りして検討してゆく必要がある。

第三に、伊勢神宮における位置づけについて。天和年間に御師が祠官に含まれるものとされたことを明らかにしたが、江戸幕府の認識に注目するならば、これ以前より御師を伊勢神宮に属する宗教者として理解していた形跡がある。例えば、寛文十一年五月朔日付の幕府下知状⁽⁴⁾には次のようにある。

定

一、伊勢外宮禰宜等専学^二神祇道^一、有来神事・祭礼守^二古例^一可^レ勤^レ之、向後於^レ令^二怠慢^一者可^レ取^二放神職^一事、

附、不^レ可^レ成^二新義之華美^一事、

一、禰宜等之位階如^二前々^一守^二執奏之次第^一、遂^二昇進^一之輩者弥可^レ為^二其通^一事、

一、有位・無位之輩之装束弥守^二古法^一不^レ可^レ用^二新義^一事、

一、神領一切不^レ可^レ売買^一并不^レ可^レ入^二于質物^一、惣而对^二檀方^一構^二利欲^一不^レ可^レ企^二非義^一事、

一、雖^二遠来参^一宮之客^一、依^二其人之品^一致^二相応之馳走^一、不^レ可^レ致^二過量之費^一事、

附、私之交会可_レ用_二儉約_一事、

一、宮中末社小破之時、其相応常々可_レ加_二修理_一事、

一、宮中洒掃不_レ可_二懈怠_一事、

右條々、両宮之禰宜等・年寄・師職以下迄相互申合、糺_二古法_一猥之儀無_レ之様可_レ令_二沙汰_一、若違背之族於_レ有_レ之者、随_二咎之輕重_一可_レ被_二仰付_一者也、

寛文十一_辛年五月朔日

内膳正（花押）

但馬守（花押）

大和守（花押）

美濃守（花押）

雅楽頭（花押）

これは、遷宮に関する同日付の幕府下知状⁽⁵⁾とともに、両宮の禰宜たちに与えられたもので⁽⁶⁾、寛文五年七月十一日に諸社に対して出された諸社禰宜神主等法度（神社条目）の伊勢神宮版といふべきものである。これを見ると、「右條々、両宮之禰宜等・年寄・師職以下迄相互申合」とあって、明らかに御師は伊勢神宮の構成員として捉えられている。つまり、近世前期においては、江戸幕府と禰宜たちとの間には認識のズレがあつたと指摘できる。従つて、これ

が如何なる理由に起因するものなのか、そして、これがどのような形で調整されていたのか、といった問題にも、取り組んでゆかなければならない。

最後に、研究の展望を述べておく。本稿では、近世前期の御師集団への検討に焦点を絞つたが、今後は、鳥居前町の実相や個々の御師家の実態などにも注目することで議論を深化させてゆきたいと考えている。とりわけ、近世中期以降の展開に関しては、自叙伝⁽⁷⁾などを素材とすることで御師一人ひとりの姿にも光を当てることが可能となり、集団と個人⁽⁸⁾の両方の切り口から、彼らの実相に迫つてゆけるものと見通しを立てている。課題は山積しているが、史料の読み直しと更なる発掘をもとに、多角的な視点から研究に取り組んでゆきたい。

(1) 西田かほる「近世在地社会における芸能的宗教者」『歴史評論』六二九号、二〇〇二年、三八頁。

(2) 「御祓銘論江戸下向記」寛文十一年十一月十二日条『二宮叢典』中篇所収、吉川弘文館、三五四～三五五頁。

(3) 同右。

(4) 「伊勢外宮方下知状」(神宮文庫所蔵、図書番号一門四三九〇号)。なお、内宮側へ発給された下知状は「伊勢内宮方下知状」(神宮文庫所蔵、図書番号九一三七号)で、これについては中西正幸氏が既に紹介している(「近世における神宮の制規(一)」『神道宗教』一二〇号、一九八五年、四八～四九頁)。

(5) 内宮側に発給された幕府下知状は、「内宮遷宮に関する幕府下知状」『三重県史』資料編近世3『下』、三重県、七二～七三頁。外宮側に出されたものは「伊勢外宮方下知状」(神宮文庫所蔵、図書番号一門四三九一号)。

(6) 寛文十一年の五月十日に山田奉行の桑山貞寄から山田三方へ出された「覚」の一か条目に、

一、今度御条目二通禰宜中江被_レ下候、
右之条々神領中堅可_二相守_一事、

とあり、禰宜たちに発給されたことがわかる(「山田奉行より寛文大火後の復興につき達書写」、前掲『三重県史』資料編近世3

『下』、七一～七二頁)。

(7) 例えば、「久保倉弘政生涯の道しるべ」(神宮文庫所蔵、一門五九三二号)。当史料は、寛政二年(一七九〇)に久保倉弘政が著した自叙伝である。自らの人生で起きた主要な出来事を題材として、挿絵と和歌を交えて教訓や心得を記している点に特色がある。弘政は、享保二十年(一七三五)に度会郡迫間浦(現度会郡南伊勢町迫間浦)の「酒の小売等」を営む石谷家の三男として生まれ、河崎町の商家で奉公した後、同町親類の商家を継ぎ、さらに、天明元年(一七八一)に久保倉金吾大夫の師職株を購入して御師に転身した人物である。また、天明八年七月には「正六位上橘朝臣弘政」となったとある。なお、久保倉金吾大夫家については、恵良宏「伊勢御師久保倉家文書の寄託について」『皇學館大学史料編纂所報 史料』七号、一九七八年)を参照。

(8) このような「個人」に注目する近年の研究潮流として、大橋・幸泰・深谷克己・堀新ほか編『江戸の人と見分』全六冊(吉川弘文館、二〇一〇年)が挙げられる。